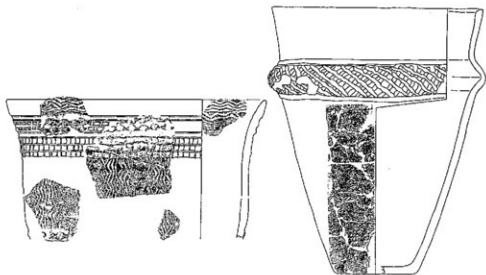


間下丸山・禅海塚遺跡

—平成7・8・9年度 緊急地方道路整備(街路)事業
に伴う間下丸山・禅海塚遺跡発掘調査報告書—



1998年(平成10年)3月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会

郷土の文化財20

間下丸山・禅海塚遺跡

—平成7・8・9年度 緊急地方道路整備(街路)事業
に伴う間下丸山・禅海塚遺跡発掘調査報告書—

1998年(平成10年)3月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会

序

このたび「緊急地方道路整備（街路）事業に伴う間下丸山・禅海塚遺跡発掘調査報告」を刊行することになりました。

岡谷市内には縄文時代をはじめ、弥生、奈良、平安時代など多くの遺跡が発見されておりますが、間下丸山・禅海塚遺跡は古くから住宅地として開発されていたため、これまで本格的な発掘調査が行われることもなく、遺跡の性格や規模などが十分に知られていませんでした。しかし、今回の調査により市内でも数少ない縄文時代早期あるいは古墳時代の集落の存在が明らかになるなど、幾つもの時代が重なる複合遺跡であることが確認されました。また、中世から江戸時代の遺物が出土するなど、これまでにない貴重な発見があり、原始古代の庶民の生活を知る多くの成果を挙げることができました。

本書はこうした調査成果を掲載し、報告するものです。今後この報告書が岡谷市の原始・古代の生活の様子を解き明かし、学術文化の向上に活用されることを願っております。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に代しまして、深いご理解とご協力を頂きました長野県諏訪建設事務所、工事関係者、地元間下区、新屋敷区の皆様に厚く御礼申し上げます。本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成10年3月

岡谷市教育委員会

教育長 北澤 和男



長野県内における遺跡の位置図

本文目次

序	
例言	
第I章 調査の経過と概要	1
1. 発掘調査にいたる経過	1
2. 発掘調査組織	3
3. 調査の概要	6
第II章 遺跡の位置と周辺遺跡	12
第III章 関下丸白遺跡	14
1. 住居址と遺物	14
(1) 4号住居址	14
(2) 5号住居址	15
(3) 6号住居址	16
(4) 7号住居址	17
(5) 8号住居址	17
(6) 9号住居址	19
(7) 10号住居址	23
(8) 11号住居址	26
(9) 12号住居址	27
第IV章 禰塚遺跡	29
1. 住居址と遺物	29
(1) 3号住居址	29
(2) 4号住居址	31
(3) 5号住居址	33
(4) 6号住居址	35
2. 小竪穴と遺物	37
(1) 縄文時代早期の小竪穴	37
(2) 縄文時代中期初頭の小竪穴	37
(3) 平安時代から中世の小竪穴	38
(4) 江戸時代以降の竪穴	38
(5) 土間状の堅緻な面	39

第31図	禪海塚遺跡小竅穴10P・15P・25P・34P出土石器実測図(1:3)	40
第32図	禪海塚遺跡小竅穴・遺構外出土遺物実測図(1:4)	40
第33図	禪海塚遺跡黒耀石刻片分布図(1:30)	42
第34図	禪海塚遺跡遺構外出土石器実測図(1:3)	44
第35図	禪海塚遺跡小竅穴・遺構外出土石器実測図(1:4)	45
第36図	間下丸山遺跡第9号住居址土器出土位置図(1:25)	47
第37図	禪海塚遺跡黒耀石刻片集中地点(1:20)	51
第38図	禪海塚遺跡黒耀石刻片集中地点出土石器実測図(1~7は1:1.5、8は1:3)	53
第39図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器のグリッド別出土状況図(1:320)	55
第40図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第1類)拓影図(1:2)	60
第41図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第1類)拓影図(1:2)	61
第42図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第1類)拓影図(1:2)	62
第43図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第1類)拓影図(1:2)	63
第44図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	64
第45図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	65
第46図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	66
第47図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	67
第48図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	68
第49図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	69
第50図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	70
第51図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	71
第52図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)	72
第53図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(第2・3類)拓影図(1:2)	73
第54図	禪海塚遺跡縄文時代早期土器(24P)拓影図(1:2)	74
第55図	禪海塚遺跡縄文時代早期小竅穴・黒耀石刻片集中地点出土土器(1:4)	75
第56図	相木式土器の分類〔守谷(1997)〕	76

第 I 章 調査の経過と概要

1. 発掘調査にいたる経過

平成 5 年 9 月 8 日	6 年度実施予定国道・県道・河川改修に係る埋蔵文化財に関する照会が、県文化課からあり、間下丸山、禅海塚遺跡について回答する
10 月 22 日	上記に関する埋蔵文化財の保護協議 岡谷市役所において県教育委員会文化課、諏訪建設事務所、岡谷市教育委員会（生涯学習課）、及び岡谷市建設部都市計画課の 4 者により開催
11 月 1 日	県教育委員会から保護協議に基づき保護措置（試掘調査に基づき再協議）について通知あり
平成 6 年 9 月 14 日	試掘確認調査実施 9 月 30 日まで 9 月 19 日付発掘調査の通知を提出
12 月 2 日	本調査について、県文化課、建設事務所と打ち合せ、6 年度調査を見送る
平成 7 年 4 月 26 日	禅海塚遺跡の発掘調査について 4 者の現地協議 岡谷市役所にて開催し、8 月実施の本調査、間下丸山遺跡の試掘、地元への協力要請、調査の契約等について協議する
5 月 9 日	発掘調査計画書と予算書について諏訪建設事務所と打ち合せ
5 月 19 日	間下区楡川岡谷線（丸山橋線）対策委員会に調査計画・日程を説明
5 月 29 日	平成 7 年度緊急地方道路整備（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の契約 調査期間は平成 7 年 5 月 29 日から同 8 年 3 月 10 日
6 月 1 日	調査開始 表土剥ぎを始める
9 月 4 日	発掘作業を終り、出土品整理に入る
9 月 27 日	間下丸山遺跡発掘調査について 4 者による現地協議 8 年度調査の実施について、調査期間等を打ち合わせる
平成 8 年 3 月 10 日	「平成 7 年度緊急地方道路整備（街路）事業発掘調査業務」実績報告書提出
4 月 1 日	発掘調査終了届を提出
4 月 2 日	埋蔵文化財拾得届を提出
4 月 25 日	埋蔵物の文化財認定の通知
7 月 1 日	8 年度間下丸山遺跡発掘調査の通知を提出
8 月 1 日	間下丸山遺跡発掘調査計画及び予算について諏訪建設事務所と協議
9 月 2 日	平成 8 年度緊急地方道路整備（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の契約 調査期間は平成 8 年 9 月 2 日から平成 9 年 3 月 10 日



第1図 間下丸山・榑海塚遺跡 (○印) の位置 (1 : 50,000)

11月20日	間下区檜川岡谷線（丸山線）対策委員会「三役会」8年度調査について説明、安全対策について要望を受ける
11月26日	発掘調査開始 表土剥ぎ工事
12月6日	発掘作業終了 出土品の整理に入る
平成9年3月10日	「平成8年度緊急地方道路整備（街路）事業発掘調査業務」実績報告書提出
3月31日	発掘調査終了届を提出
4月3日	埋蔵文化財の拾得届を提出
6月9日	平成9年度緊急地方道路整備（街路）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の契約 調査期間は平成9年6月9日から平成10年3月10日
6月17日	平成9年度間下丸山道跡発掘調査の打ち合せ 関岡谷組、諏訪ガス株、岡谷市建設部都市計画課、水道課、生涯学習課各担当者、現場責任者出席
6月24日	新屋敷区平成9年度都市計画道路丸山線道路拡幅事業対策委員会 発掘調査及び工事について説明
6月26日	発掘調査を開始 表土剥ぎ工事及び安全対策工事を始める
7月22日	発掘作業終了 出土品の整理に入る
12月8日	12月定例会で岡谷市一般会計補正予算（第7号）文化財調査発掘等事業（報告書作成）費上呈、同17日可決
平成10年1月5日	平成9年度緊急地方道路整備（街路）事業に伴う埋蔵文化財調査報告書作成業務の契約
3月31日	報告書発刊

2. 発掘調査組織

平成7年度

事務局	齋藤 保人（教育長）	小口 光雄（教育次長）	堀内 明（社会教育課長）
	会田 進（社会教育課主幹）	伊藤 幸代（同主任）	小坂 英文（同主事）
調査担当者	林 賢（日本考古学協会会員）		
調査員	上條 重利	山崎めぐみ	
作業主任	藤森 知広		
作業従事者	今井 四雄	岡田 文字	小口英一郎 笠原 昇 奥石 雅子
	藤原 綾	小島 利彦	高橋 公夫 中島 九重 西堀 喜信
	浜 益弘	林 初男	藤森 芳 宮坂あき子 宮沢 辰寿
	宮沢 光男	百瀬 太介	山田 和子

平成8年度

事務局	齋藤 保人（教育長）	小口 光雄（教育次長）	矢島 敏夫（社会教育課長）
-----	------------	-------------	---------------

会田 進 (社会教育課主幹) 小坂 英文 (同主事) 廣瀬 智子 (同事務員)

調査担当者 林 賢 (日本考古学協会会員)

調査員 佐藤美枝子 (長野県考古学会会員) 上條 重利 山崎めぐみ

調査補助員 笠原 香里 依田由紀子

作業主任 藤森 知広

作業従事者 今井 匡雄 奥石 雅子 小島 利彦 鈴木 幸枝 高橋 公夫
 中島 九重 西堀 喜信 浜 益弘 林 初男 橋爪 映子
 藤森 芳 宮坂あさ子 宮沢 辰春 宮沢 光男 山田 和子

平成 9 年度

事務局 齋藤 保人 (前教育長) 小口 光雄 (教育次長) 林 勝弘 (生涯学習課長)

会田 進 (生涯学習課主幹) 小坂 英文 (同指導主事) 廣瀬 智子 (同主事)

調査担当者 林 賢 (日本考古学協会会員)

調査員 佐藤美枝子 (長野県考古学会会員) 山崎めぐみ

調査補助員 笠原 香里 依田由紀子

作業主任 藤森 知広

作業従事者 浅田 博康 安部 史裕 笠原 鈴子 奥石 雅子 小島 利彦
 佐々木トミ子 清水 弘子 鈴木 幸枝 高橋 公夫 中島 九重
 西堀 喜信 橋爪 映子 浜 益弘 林 初男 藤森 芳
 宮坂あさ子 宮沢 辰春 宮沢 光男 山田 和子

出土品整理・報告書作成

調査組織

平成 9 年度

事務局 北澤 和男 (教育長) 小口 光雄 (教育次長) 林 勝弘 (生涯学習課長)

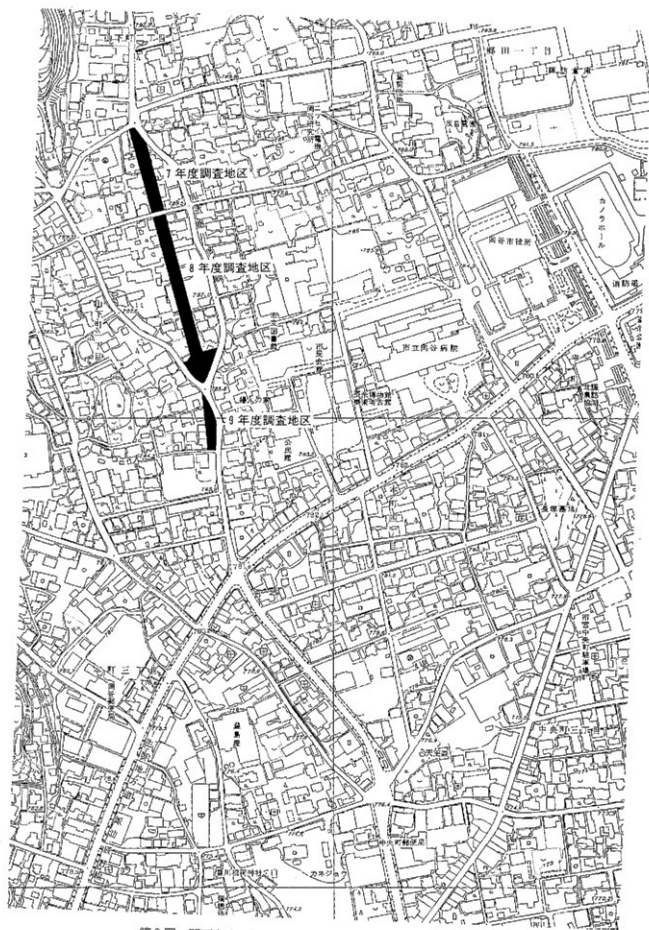
会田 進 (生涯学習課主幹) 小坂 英文 (同指導主事) 廣瀬 智子 (同主事)

調査員 林 賢 (日本考古学協会会員) 河原喜重子 佐藤美枝子 (長野県考古学会会員)
 山崎めぐみ

調査補助員 笠原 香里 依田由紀子

作業従事者 浅田 博康 安部 史裕 笠原 鈴子 奥石 雅子 小島 利彦
 佐々木トミ子 清水 弘子 鈴木 幸枝 高橋 公夫 中島 九重
 西堀 喜信 橋爪 映子 浜 益弘 林 初男 藤森 知広
 藤森 芳 宮坂あさ子 宮沢 辰春 宮沢 光男 山田 和子

整理協力者 三上 徹也 原 明芳
 (土釘の会) 飯田 孜 小口 喜子 笠原 鈴子 門口 民雄

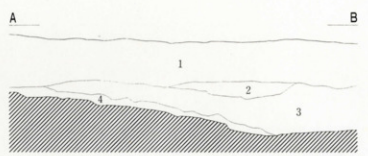
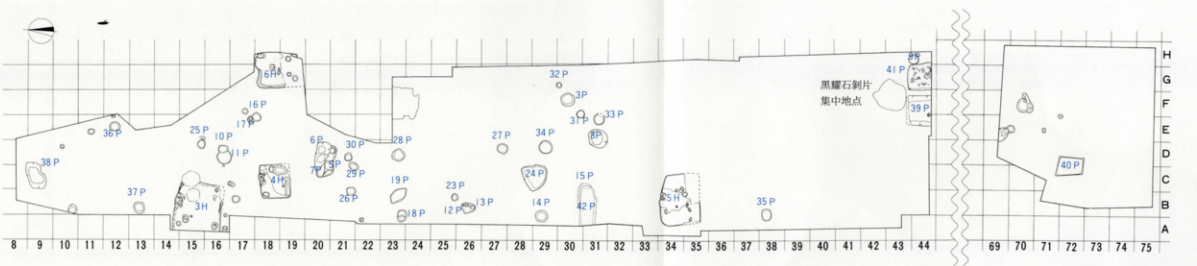
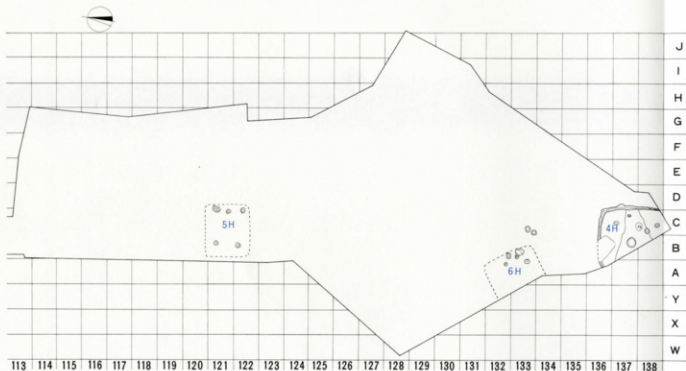
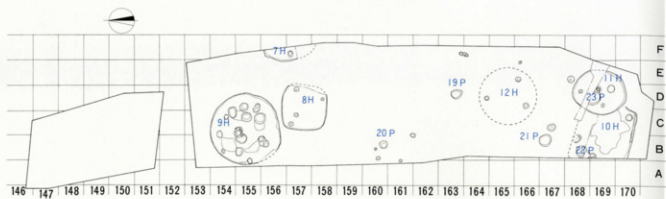


第2図 関下丸山・福海塚遺跡発掘調査地区図 (1:4,000)

窪田 辰男 興石 雅子 佐々木トミ子 竹内あつ子 中島 九重
 中島 武津 濱 正二 原 重彦 藤森 芳 宮坂 貴子
 宮沢 光男
 (敬称略)

3. 調査の概要

- | | |
|-------------|--|
| 1. 事業主体者 | 諏訪建設事務所 |
| 2. 発掘調査主体者 | 岡谷市教育委員会 |
| 3. 遺跡名 | 禪海塚遺跡 (岡谷市遺跡地図 No. 154)
間下丸山遺跡 (岡谷市遺跡地図 No. 83) |
| 4. 遺跡の所在地 | 岡谷市 (間下区・新屋敷区) |
| 5. 調査の目的 | 岡谷都市計画道路 3・5・23丸山橋線拡幅工事に伴う当該遺跡の記録保存 |
| 6. 発掘調査期間 | 禪海塚遺跡 平成7年6月1日～平成7年9月4日
間下丸山遺跡 平成8年11月26日～平成8年12月6日
平成9年6月20日～平成9年7月22日 |
| 7. 遺物整理期間 | 禪海塚遺跡 平成7年9月4日～平成8年3月10日
間下丸山遺跡 平成8年12月9日～平成9年3月10日
平成9年7月22日～平成10年3月10日 |
| 8. 調査面積 | 禪海塚遺跡 1,135㎡
間下丸山遺跡 1,194㎡ |
| 9. 調査方法 | グリッド表記について
道路のセンター杭を基準に2mグリッドを設定し、東西方向をアルファベット、南北方向を数字にて設定 |
| 10. 発見された遺構 | 禪海塚遺跡
縄文時代小竪穴 19基 (早期7基 中期初頭12基)
縄文時代早期黒曜石剥片集中地点 1個所
古墳時代住居址 3棟
奈良時代住居址 1棟
平安時代から中世の竪穴遺構 1基
江戸時代以降の竪穴 3基
間下丸山遺跡
縄文時代住居址 4棟
古墳時代住居址 1棟
平安時代住居址 3棟 |



1. 攪乱
2. 耕作土
3. 黒色土
4. 漸移層

第3図 間下丸山・禰塚遺跡遺構全体図 (1:300) 禰塚遺跡の標準土層堆積図 (1:50)

竪穴状遺構 1基

小 竪 穴 5基

11. 発見された遺物 禅海塚遺跡

縄 文 時 代 土 器 (早期・中期初頭~中期末)
石 器 (第1表)

奈良・平安時代 土師器・須恵器

中 世 土師器皿

江 戸 時 代 陶器・磁器

間下丸山遺跡

縄 文 時 代 土 器 (中期中葉・中期後葉・晩期)
石 器 (第1表)

古墳・奈良・平安時代 土師器・須恵器

第1表 石器一覽表

禅 海 塚

種 別	器 種	点 数
石 器	石 鎌	54
	小型尖頭器	7
	石 鏃	20
	打製石斧	29
	磨製石斧	4
	石 匙	3
	磨石類	11
	磁 石	1

間 下 丸 山

種 別	器 種	点 数
石 器	石 鎌	7
	石 鏃	2
	打製石斧	5
	磨製石斧	2
	磨石類	15
	敲石	1
	石 皿	3

12. 資料整理の方法と基準

遺跡No. 154 (岡谷市遺跡地図No.) 禅海塚遺跡

83 (岡谷市遺跡地図No.) 間下丸山遺跡

遺物No. 遺跡No・年次・グリッド・遺物取り上げNo・出土遺構Noと層位

グリッド グリッド区名を示すアルファベットと数字

遺構略号 住居址・H

小竪穴一数字P

柱穴 一P数字

層位(土層名)略号




遺構内		遺構外	
覆土上層(逆三角堆土)	フ上	黒色土	クロ
覆土中	フ中	黒褐色土	クロカツ
覆土下層(三角堆土)	フ下	暗褐色土	アンカツ
覆土	フ	褐色土	カツ
床上または床直	床	表土・耕作土	表
炉	炉	攪乱	カク
柱穴内	P数字	表探	Z
炭化物	C		

土器実測図 実測図化は、スリット写真撮影を株式会社シン技術コンサルに依頼した。写真トレースによる実測図化はすべて教育委員会で行っている。

土器の説明は図版中に表記した。表中の()内の数値は推定ないし残存値である。

実測図の断面は土器、土師器 白抜き、須恵器—黒塗り、施釉陶器—網掛けによって区別した。

遺構図 各遺構図中の略号は以下のようにした。柱穴内の数値(マイナス表示)は付近の床面から測った深さを示している。

F	焼土および炉
S	石
P	土器
数字P	小竪穴
P数字	住居址柱穴
	焼土
	貼床
	構築材

石器属性表

主な石器は巻末に一覧表を掲載した。石器石材の略号は以下の通りとした。

黒燧石	ob	泥岩	— 泥
チャート	— ch	泥質片岩	— 泥片
シルト岩	— sh	砂岩	— 砂
安山岩	— 安	砂質片岩	— 砂片
石英安山岩	— 石安	頁岩	— 頁
緑色凝灰岩	— 緑凝	凝灰岩	— 凝
蛇文岩	— 蛇		

報告書作成作業分担

土師器・須恵器・灰釉陶器	会田 進
石器・石製品類総体	河原喜重子
遺構全般	小坂 英文

縄文土器	佐藤美枝子（早期）	小坂 英文（中期）	
図版作成	佐藤美枝子	磯爪 映子	浜 信昭
土器・石器実測トレース	山崎めぐみ	清水 弘子	依田由紀子 腰原 綾
	浜 信昭	奥石 真理	
遺構図トレース	宮坂あさ子	清水 弘子	

図版作成は遺構・遺物全般にわたって主に佐藤、山崎が監督して行った。全体の編集・構成は小坂がまとめた。

執筆分担

会田 進	第I章	第III章 1（遺物）	第IV章 1（遺物）	・ 2(1)~(3)	・ 4(2)
腰原 綾	第II章				
河原喜重子	第V章 2				
小坂 英文	第III章 1（遺構）	第IV章 1（遺構）	・ 2(4)~(6)	・ 3	・ 4(1) 第V章 1
佐藤美枝子	第V章 3				

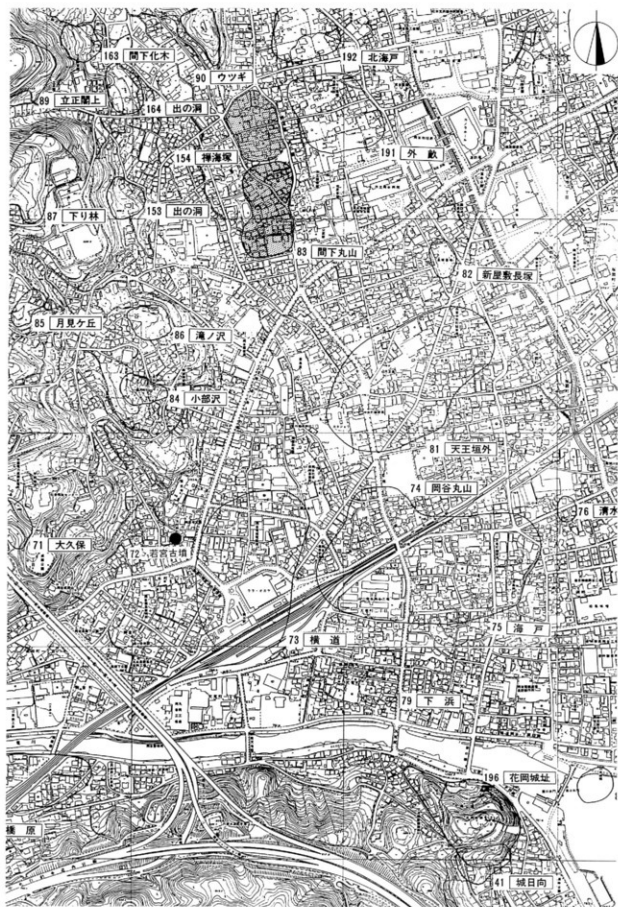
第II章 遺跡の位置と周辺遺跡

岡谷市は諏訪湖盆地北側の主部を占め、地質構造上、塩嶺などの山地、その山麓とこれに続く段丘状の丘陵、横河川が開いた広大な扇状地、諏訪湖沿岸などに沿ったわずかな沖積地という4つに分けられ、分布する遺跡の大部分は周辺丘陵地帯と扇状地にある。

西山山地の山麓線と塚間川の間には標高770～820mの間に、幅200～500mで、諏訪湖近くまで南北に細長く連なる段丘状の地形が見られる。塚間川との比高差5～10mの微高地であり、塚間川段丘とも呼ばれているが河成段丘ではなく、水準点の検測成果から見ると、塚間川西岸地域の隆起活動が認められるため、大地の隆起によって形成された段丘であると考えられる。この段丘の上に今回調査が行われた間下丸山・禅海塚遺跡が存在する。遺跡のある間下地区は古くから住宅地となっていたためこれまで発掘調査の例がなく、遺跡の性格など詳細はわからなかったが、近年の農地転用など小規模開発に伴う発掘調査により、縄文・平安時代の遺構の存在が明らかとなっている。

塚間川段丘上には、間下丸山・禅海塚遺跡のほか、天王垣外・岡谷丸山・海戸遺跡があり、南に緩やかに傾斜しながら諏訪湖近くまで続く。縄文・弥生時代を主として、奈良・平安時代から中世、そして現在まで集落が連なっている。また市内を見下ろす塩嶺山麓尾根や小丘陵などには、月見ヶ丘・間下化木・ウツギ・滝ノ沢・小部沢遺跡といった、縄文時代前期末から中期初頭、あるいは同中期後葉の時期に属する多くの高地性小規模遺跡が点在する。(第4図)

間下丸山遺跡については、『諏訪史一』の中に土器・土偶・石皿・石棒といった遺物のかなり豊富な出土が伝えられている。



第4図 間下丸山・神海塚遺跡と周辺の遺跡 (1 : 9,000)

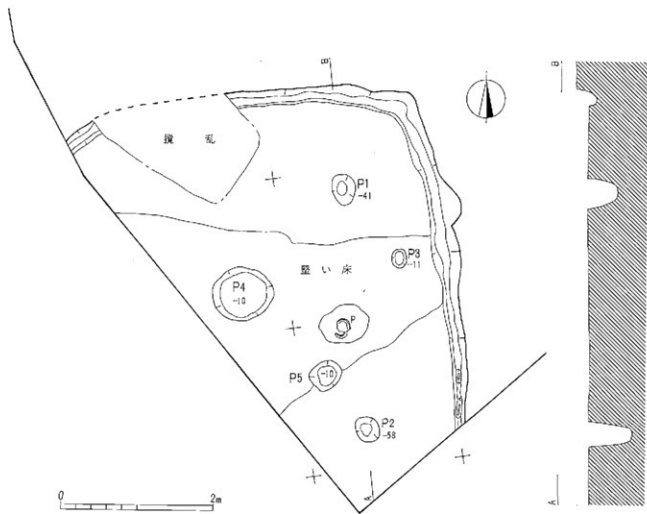
第三章 間下丸山遺跡

1. 住居址と遺物

(1) 4号住居址

調査の経過 本址は調査区南端で発見された古墳時代の住居址である。攪乱が深く、重機で地表面から1mほど掘り下げた後、じょれんで黄色の砂礫層まで遺構確認面を下げないと竪穴落込みを発見できなかった。住居址の竪穴は北壁と東壁を検出することができたが、西壁と南壁は調査区の外となる。

遺構 住居址はC-136グリッドに位置し、竪穴の大きさは調査区の外に住居址が及ぶため、推定で南北5.7m×東西5.0mの隅丸方形の住居址である（第5区）。住居址の掘り込みは遺構確認面が深



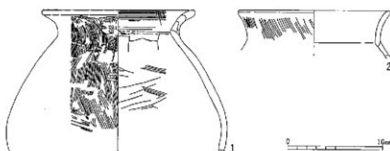
第5図 間下丸山遺跡第4号住居址実測区(1:50)

いにも関わらず北壁17cm、東壁18cmである。黄色砂礫層を掘り込んでいるため、壁には礫が露出している箇所がある。周溝は幅25～30cm、深さ8～15cmで東壁下から北壁下につながり西壁下に続く様子があり、住居址を全周すると思われる。

床面は全体に堅く、黒褐色の覆土と違いが明瞭なため、容易に検出することができた。特に床中央部は堅く叩き締められている。床面検出にともない発見された小穴は5箇所あるが、柱穴となるのは深さが40cm以上あるP1、P2である。これ以外の穴は深さ10cm以下であり、柱穴とは考えにくい。P1、P2の縁は貼り床されており、床面検出のときは25cm×17cmと30cm×24cmの落ち込みであったが、これが柱痕跡と思われ、貼り床を削がした完掘の状態では42cm×33cmと38cm×34cmである。

発見されたP1、P2の間にある浅い小穴から土師器製の破損品が逆位で出土した。弥生期の主柱穴間にある埋竈炉を思わせるが、焼土の痕跡はない。出土した甕は、古式土師器に属するもので、本址からはS字口縁も1片ながら出土しており、カマドの出現前の古い形態の住居であろうか。

遺物 土師器甕が2点ある(第6図)。1点は主柱穴間の小穴から出土した1の甕である。球形に近い胴部から、頸部はくの字に開いて短い口縁部がゆるく外反して立ち上り、口唇端部は肥厚気味。粘土ひもの積み上げ成形の痕跡が頸部内面に残り、ヘラ削りの擦痕が粗く残る。ハケ目整形がていねいになされていない。外面は頸部から胴上半分は縦方向にヘラ磨き整形されている。胎土に大小の砂粒を多く含み、雲母の微粉も多い。2は口縁部が直線的に立ち上る甕の口縁部である。外面のハケ目調整は弱く、内面は軽く横ナゲされているだけである。このほかに甕の破片は接合しない同一個体と思われる破片が4片あり、あるいはS字状口縁の胴部ではないかと思われる。体部外面にハケ目が縦方向に軽い弧を描いて走るが、内面にはない。これと別に極めて薄手の小型甕破片などもまとまってあり、全体に出土量が多いが、ほとんど土師器甕破片である。これら土師器を見る限り、古墳時代Ⅱ～Ⅲ期(『長野県史』)に相当しようか。

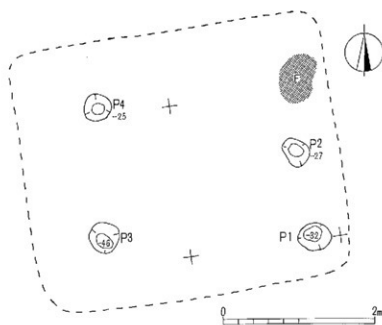


第6図 間下丸山遺跡第4号住居址出土遺物実測図(1:4)

(2) 5号住居址

遺構 本址はB.C-121グリッドに位置する。当初このグリッドの攪乱層を掘り進めると須恵器製の破片が出土し、遺構の存在を思わせたが、攪乱層が黄色砂礫層にまで達しており、遺構のほとんどが破壊され、結果的に柱穴と思われるもの4箇所と、カマドと推定される焼土の範囲を確認しただけである。発見された柱穴の配置から4本柱の生居を想定できる。カマドではないかと思われる焼土の位置は、北壁と東壁の接点となることから北東の隅に設けられたカマドと推定される。周溝、床面は発見さ

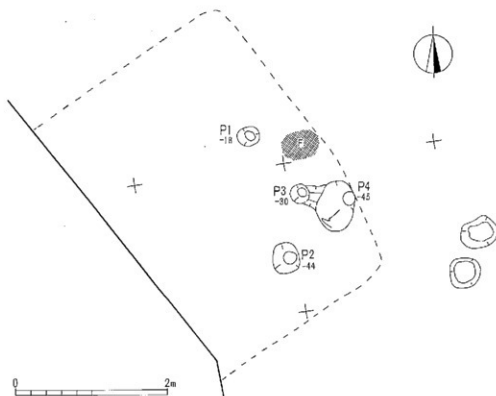
れなかった（第7図）。平安時代の住居址であろう。



第7図 間下丸山遺跡第5号住居址実測図（1：50）

(3) 6号住居址

遺構 本址はA-133グリッドに位置するが、攪乱されているためわずかにカマドと思われる焼土の範囲と、柱穴と思われるものを発見できただけである。5号住居址より保存状態は悪く、床面、周



第8図 間下丸山遺跡第6号住居址実測図（1：50）

溝は発見できなかった。住居址から遺物は全く出土していない。付近の掘乱層からも出土遺物はない(第8図)。平安時代の住居址であろう。

(4) 7号住居址

調査の経過 本址は遺構確認で調査区東端に黒褐色土の落ち込みを発見し、掘り進めを行ったが遺構のほとんどが調査区外に延びているため、調査することができたのは西壁だけである。また掘乱を受けているため南側半分も削り取られている。幸い調査区の土層観察により住居址南側の立ち上がりを確認できたため、住居址の大きさを知ることができた。縄文時代中期の住居址である。

遺構 住居址はF-157グリッドに位置する。西壁は13cmあり、北壁の立ち上がりまで確認できた。南壁は掘乱により破壊されているが、調査区の壁で土層観察を行って8cmの立ち上がりを確認できた。床面は黄色砂礫層を掘り込んでいるため、表面を叩き堅めても締まらない。部分的に堅い面が残るが全面には及んでいない。周溝は無く、柱穴が1個所発見された。他の柱穴や炉址は調査区外にあると思われる。遺構のほとんどが調査区の外になるが、残存状態から平面形は隅丸方形ではないかと推定される。(第9図)

遺物 小破片が8点出土するだけで見るべきものは第20図1の小型土器底部があるだけである。

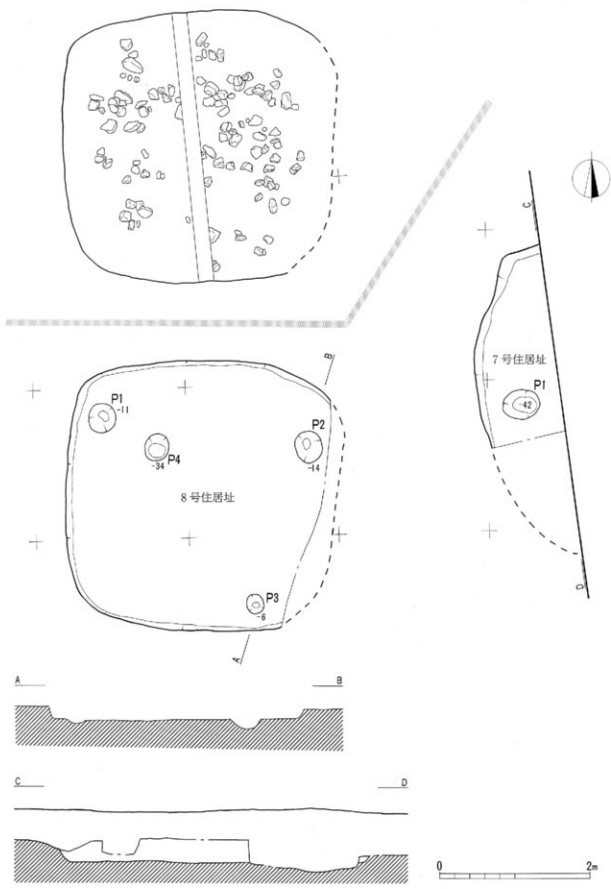
(5) 8号住居址

調査の経過 暗褐色土層中で遺構確認を行い、黒褐色の覆土を掘り下げると焼土の塊や10~20cmの礫が多く出土した。焼土は床より高い位置で西側から竪穴の中心に向かって傾斜している。焼土の状態は、赤く変色した焼土のほか、黒褐色の覆土が赤くなるに至らないが変色していることから、他の場所で焼かれた焼土をここに廃棄したのではなく、竪穴の埋没途中で火を焚いたものであろう。礫の出土状態は四方の壁から20~25cmほど内側に入った位置から出土し、竪穴南東壁ではほぼ床面に接する高さで出土する。北西側では遺構確認のときすぐに礫が出土しはじめ、床から高い位置で出土している。これら焼土の傾きや礫の出土状態から、竪穴の埋没過程の一時りに礫が投げ込まれ、また火が焚かれたものと推定された。(第9図)

遺構 本址はC-157に位置し、竪穴の大きさは東壁が掘乱を受けているが南北3.6m×東西3.4mの隅丸方形と推定される。北壁20cm、南壁13cm、西壁14cmを残し、周溝はない。床は黄色砂礫層をわずかに掘り込んでおり、部分的に礫が露出している。全体に踏み堅められたか、叩き締めたような堅い面が中央に残り、覆土と床面の色や堅さの違いは顕著であった。床面の積査の結果、発見された小穴は4箇所、このうち主柱穴はP2、P3であると推定される。覆土中に焼土が発見されたが、床面には焼土は発見されずカマドの痕跡もなかった。(第9図)

遺物 土器の小破片を20片ほど出土しているが、2片の土師器片を除くとほかは縄文土器の破片である。土師器の破片のうち1点は皿底部片で、糸切感である。

本址は遺物の出土が少なく、所属時期を決定するまでに至らないが、住居の形態から竪穴状遺構と思われ、鎌倉期以降に比定しておきたい。



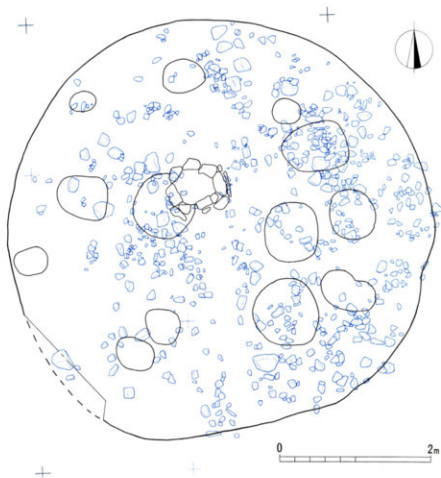
第9図 間下丸山遺跡第7・8号住居址実測図(1:50)
 (第8号住居址は礫の上上状態・中央ベルトはセクションベルト)

(6) 9号住居址

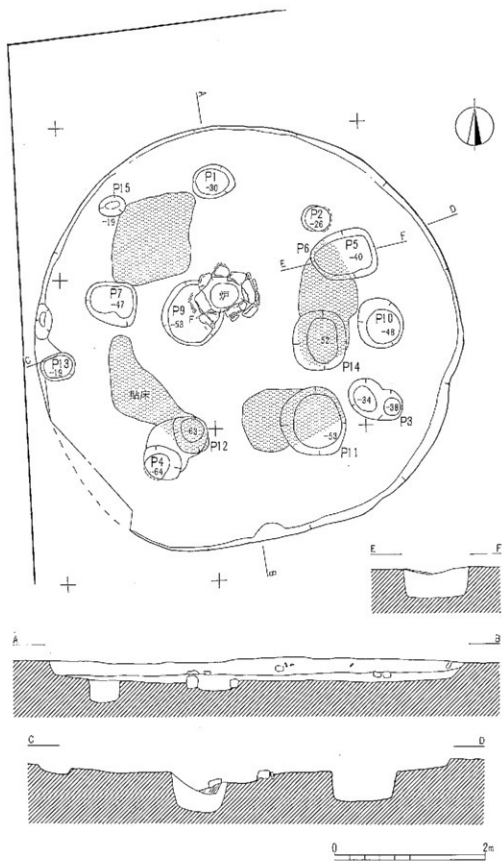
調査の経過 本址は黄色砂礫層を掘り込み構築されている縄文時代中期後葉の住居址である。覆土は暗褐色土であったが、含まれる礫の量の差によって大きく2層に分けられた。覆土の掘り進めを行うと住居址西側には礫が少なく、東側に礫が多く混入していた。遺物は礫を含まない西側の暗褐色土から多く出土したが、東側の礫を多く含む暗褐色土層には少ない。人為的に短期間に埋められたものであろうか。覆土が薄いため堆積状態を明瞭に観察することはできなかったが、住居址の埋没過程は、礫の多く含まれる暗褐色土が東側から堆積し、住居址東側半分が埋没したあと、礫を含まない暗褐色土が廃棄された石器や土器とともに堆積したのではないと思われる。このため遺物出土量は住居址西半分に集中する。復原可能な土器は住居址ほぼ中央部から南側へと広がるが、床面より5～13cm高い位置になる。(第10図及び第11図)

遺構 本址はC-155グリッドに位置し、平面形は直径約5.5mの円形の住居址である。壁は北壁20cm、南壁8cm、東壁8cm、西壁13cmである。周溝はなく、床面は黄色砂礫層を掘り込み全面的に堅い叩き面が広がる。覆土との色、堅さの違いは明瞭で検出は容易であった。部分的に黄褐色の土で貼り床されている。この貼り床の下には柱穴があることから、住居の建て直しが行われたことが窺われる。

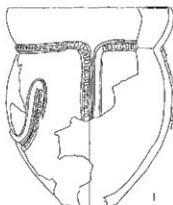
住居址内で検出された小穴は14箇所あり、このうち貼り床で覆われていた柱穴と思われるものはP6、



第10図 間下丸山遺跡第9号住居址遺物出土状態図(1:50)



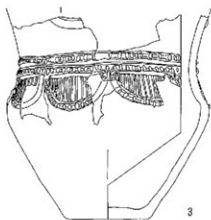
第11图 間下丸山遺跡第9号住居址奥測図(1:50)



遺物 No./83・4・D154・3・9Hフ
上
出土状態/甕土上部に存在
時期/縄 中期中葉末
高さ/20.8cm
口径/17.6cm
胎土/白色の粒子を多く含む
胎形/内外ともていねいな磨き
文様/頸部に一本の横線をめぐらし、そのまま頸部に垂下させる。部分的にその横帯上に両み目を付す。おそらく、その横帯で頸部に渡り字状文を施していると思われる
備考/頸部上半の内面にスス付着

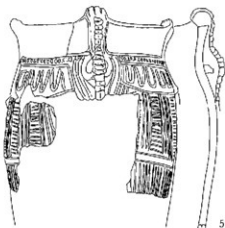
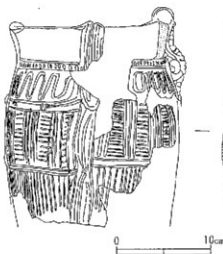
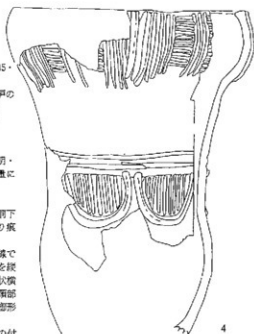


遺物 No./83・4・B154・1・9Hフ上
出土状態/甕土上部に存在
時期/縄 中期中葉末～後葉初期
胎土/白色・黒色・赤色の粒状を少し含む
胎形/内外ともていねいな磨き
文様/口縁部に彩色文が上下に重なる
備考/内面のみ炭化物付着



遺物 No./83・4・C155・26・9Hフ上
出土状態/伊の東側に逆接して、床上12cm
時期/縄 中期中葉末
高さ/21.7cm
胎土/含有物少ない
胎形/内外ともていねいな磨き
文様/頸部無文、胴部に帯形文、縦線とは刻まれている
備考/胴下部の上位（膨らみ部）の内面にのみ炭化物付着

遺物 No./83・4・C155・35・9Hフ上
出土状態/床上12～13cm、伊の西面近くに存在
時期/縄 中期中葉末
高さ/27.9cm
口径/24.4cm
胎土/黒色・白色・透明・雲母の細粒を多量に含む
胎形 内/やや粗い磨き
外/やや粗い磨き、胴下半部横方向の刷り痕残る
文様/口縁部を縦の線縁で4分割。その間を縦の枕線とはしご状横枕線で埋める。頸部無文、胴部下に御形文を施す
備考/頸部内面炭化物の付着

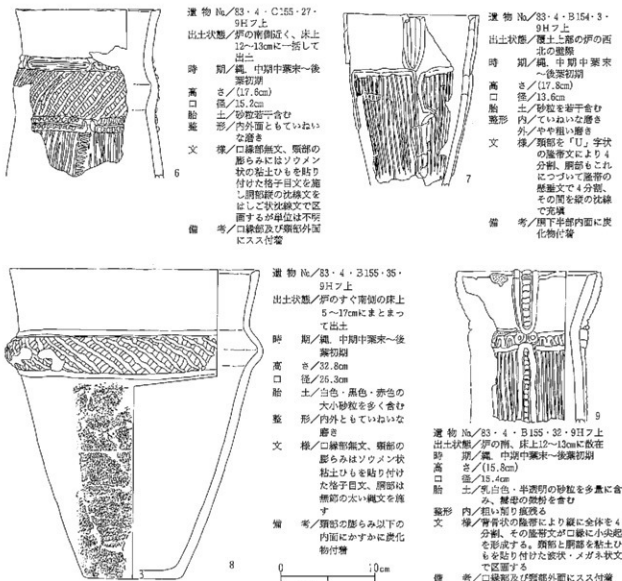


遺物 No./83・4・B155・41・9H・P9
出土状態/伊石上、住居址甕土中
時期/縄 中期中葉末
高さ/21.2cm、(23.2cm)
口径/15.9cm
胎土/黒帯と白色、黒色粒子を多く含む
胎形 内/磨き
外/無文部磨き
文様/口縁部は無文帯で、それを指形及び小尖形につながる脈帯で4分割し、これにより胴部も4分割。頸部の横帯上に刻みを付す。以下に蛇行する枕線を施し、その下に縦の枕線とはしご状の横枕線を並列、胴下部縦位枕線を並列、胴下部に赤炭化物付着

第12図 間下丸山遺跡第9号住居址出土土器突眼図 その1(1:4)

P11、P12、P14の4本であり、これらの柱穴の外側に貼り床されていない柱穴P3、P4、P5、P10がある。住居址西及び北側の柱穴のそばには、同様の柱穴が発見できなかったことから、本址は住居構築後、一度東側へ若干移動して拡張を行ったと思われる。P5、P6については、穴の形状が楕円であること、P6には貼り床がされているがP5には貼り床されていないことから、拡張のとき柱穴を別の位置に掘るまでもなく、現在使用している柱穴を東側に拡張し、柱をずらす程度で拡張ができたため、柱の移動後、穴の西半分だけに貼り床を施したのではないと思われる。

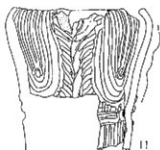
炉は住居址中央よりやや北側に位置し、大きさ約20cmほどの竈9個を五角形に配置した石囲炉である。このほかに小さな竈を東側の炉石周辺に埋め込んでいる。炉内には焼土がほとんどなく、長期使用された様子はない。西側の炉石3個はP9内にずり落ちた状態になっている。またこの炉石の外側から焼土が発見されたことから、最初に作られた炉はP9の上面に作られたが、住居の東側への拡張に伴い炉も僅かではあるが東よりに塗り替えられたと思われる。その後何らかの理由によりP9の埋土が長い間の土圧によって沈下したため石囲炉の石がずり落ちた様な状態になったのであろう。(第11図)



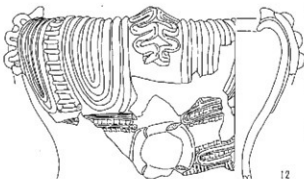
第13図 関下丸山遺跡第9号住居址出土土器実測図 その2 (1:4)



遺物 No/83・4・9H上
出土状態/覆土中に散在
胎 土/白色・黒色・霰母の細砂粒を多く含む
整形 内/ていねいな磨き
文 様/器口の単位不明、口縁部はソウメン状粘土ひも貼り付けによる指文文と、その間を横線線で連絡すると思われる。胴部に同じく約行文、胴部は半張竹管工を用いた縦の半線状線文で充填する



遺物 No/83・4・B155・33・9H上
出土状態/覆土中に散在
時期/縄・中期後葉初期
高さ/(14.7cm)
胎 土/白色・乳白色の細砂粒を含み、厚手に堅微
整形/内外面ともていねいな磨き
文 様/胴部は粘土ひもを貼り付けた網状線帯で区画、その間をソウメン状粘土ひもを貼り付けた指文文を施すが単位は不明。刻落により隆帯の上方に突起が付くかどうか不明。指文文の直下でもソウメン状線帯が胴部を区画する。胎土・文様モチーフともやや異質
備 考/外面にスス付



遺物 No/83・4・B155・30・9H上
出土状態/扉の側面上12~13cmに散在
時期/縄・中期後葉初期
高さ/(17.0cm) [28.4cm]
口 径/22.0cm
胎 土/白色・黒色・赤色・乳白の砂粒を多量に含み、厚手を若干含む
整形 内/隅り線が広く残る
文 様/口縁部に4単位の器手、その間を2単位のソウメン状粘土ひもを貼り付けた指文文を施し、それを横線線で連絡。器手の下方は刻落して不明。胴部の指文文間及び外には押し引文を施す。胴部は半張竹管工を用いた縦の半線状線文で充填



遺物 No/83・4・B154・11・9H上
出土状態/覆土上層中
胎 土/白色・黒色・赤色の細砂粒、霰母を含む
整形 内/ていねいな磨き
備 考/内面部分的に炭化物多く付着

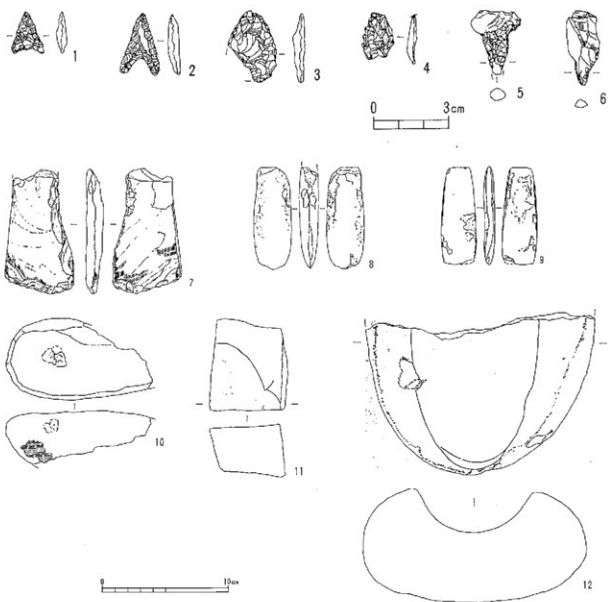
第14図 関下丸山遺跡第9号住居址出土土器実測図 その3 (1:4)

遺物 出土した土器片の量は浅いコンテナに5箱分であった。復原作業により区示できたものは縄文時代中期中葉末から中期後葉初頭の土器13点で、梨久保B式とする土器群にあたる。復原された土器の文様は、口縁部に無文帯をもち胴部に縦の沈線を充填する円筒形土器や、キャリパー形土器と呼ばれるもので、胴部に櫛形を描く櫛形文土器、口縁部に4単位の突起を付けた4単位立体突起付土器などが出土している。(第12図~第15図)

(7) 10号住居址

調査の経過 本址は遺構確認後、黒褐色の覆土を掘り進めると炭化材が多く出土し、火災住居址ではないかと予想された。8号住居址と同様に、床面から高い位置で覆土中に焼土が2箇所発見されている。一つは住居址西側のP2の上5~7cmほどのところから、もう一個所は住居址東側壁際で床面より4~8cmの高い位置である。床面の精査では鉄製品や銅製品が出土し、床面からは炭化した木製の食器破片や、炭化した種子類(何であるか不明)が出土する平安時代後期の住居址である。

遺構 住居址はB-169に位置し、竪穴の大きさは残存状態から南北約4.7m×東西約5.3mほどで、平面形は長方形ではないかと推定される。掘り込みは浅く、北壁は撈乱を受けており、南壁は7cm、

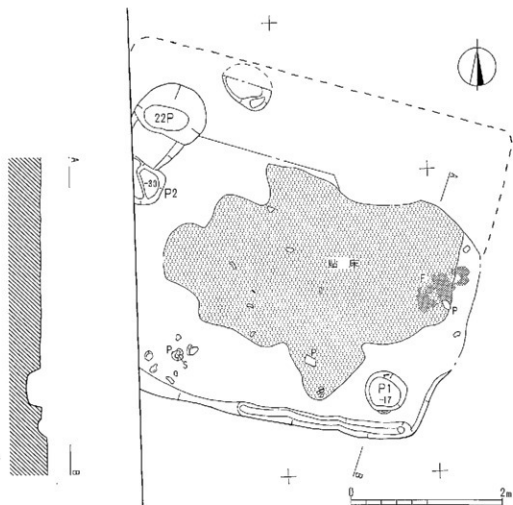


図No.	遺物区	層位	グリッド	No.	分類	細分類	石材	長さ(mm)	柄(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
1	9H		B156	3	石鏃		o b	16.3	12.9	3.8	0.5	
2	9H	フ下	C154	6	石鏃		o b	24.1	15.5	4.3	1.0	
3	9H	フ上	C156	10	石鏃		o b	27.6	(19.3)	4.8	(1.9)	
4	9H	フ	B155	4	石鏃		o b	(18.7)	(13.0)	3.1	(0.6)	
5	9H	フ上	C154	7	石鏃		o b	25.2	19.3	5.1	1.6	
6	9H	フ上	C156	18	石鏃		o b	29.7	13.2	7.7	1.9	
7	9H	フ上	C156	12	打製石斧		規	98.2	54.7	12.5	87.8	
8	9H	F9	B156	48	磨製石斧	縁磨		79.9	30.4	15.1	66.5	
9	9H	フ上	C156	15	磨製石斧	蛇		76.2	27.5	8.4	31.4	
10	9H	不明		9	磨石槌	安		(114.8)	(65.7)	(39.3)	(248.5)	凹みと数ザリ面
11	9H	フ上	B154	21	砥石			(71.9)	(72.5)	(45.2)	(300.0)	
12	9H	フ下	B154	14	石皿	安		(28.9)	(18.0)	(8.8)	(1930.0)	

第15図 関下丸山遺跡第9号住居址出土石器実測図(1~6は1:1.5、7~12は1:3)

東壁で残存している部分は11cmである。床面は黄色砂礫層を掘り込んでいるため、礫が露出している部分がある。全体に平らに整地され住居中央部には叩き締めたためであろうか、非常に堅い面が顕著に認められる。床面には炭化材が多く散在していることから火災住居址であると思われる。周溝は住居址が攪乱により破壊されているため、南壁についてだけ確認され、幅20cm、深さ5cmである。

小穴は床面で5箇所発見されたが柱穴になるものはP1、P2以外には特定できない。床面の精査では焼土やカマドの火床面らしい箇所は確認できないため、カマドの位置を特定できない。(第16図)



第16図 間下丸山遺跡第10号住居址実測図(1:50)

遺物 住居址掘り込みが浅いこともあり、覆土は極度の攪乱状態にあったためか、遺物の出土は少なく、また混在がはなはだしい。図示できたものには土師器の2点がある。(第17図)



第17図 間下丸山遺跡第10号住居址出土遺物実測図(1:4)

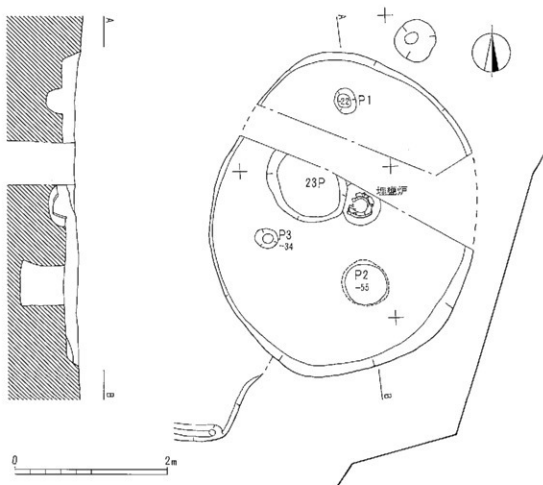
1は小型の土師器環である。ロクロ成形であるが整形痕が明瞭ではない。糸切り底である。2はロクロ成形の糸切り底の環で、器肉の厚いポツリしたつくりである。外面に部分的ながら黒く炭化物が付着する。このほかには小型環の小破片が3点、環・壺破片が7点と少ない。

須恵器破片は大小10片あまり、大小の壺破片と思われる。また白磁の小破片が1点ある。混在する縄文土器が点数では多い状況である。

特異なものとして、炭化した木製椀がある。高台付きの底部が1片なのであるいは1個体分かもしれない。口縁部ほど薄く、端部は尖り気味に削り出されている。もろくて復元できない状況にあり、全体を知るところまでいたらないのは残念である。

(8) 11号住居址

調査の経過 本址は10号住居址の遺構確認においてその東側に不整形な黒色土の落ち込みを発見し、10号住居址調査終了後、覆土の掘り進めを行って検出された住居址である。住居址は中央やや北側を走る攪乱層により二分されているが、遺物の出土量も覆土の色も大きく異なった。攪乱層北側は黒色土であり、遺物も土器片が多く出土した。攪乱層南側では覆土の色は暗褐色土で砂利を多く含む層であった。遺物の出土はほとんどない。土層観察を行うと住居址南側から砂利を含む暗黄褐色土が入り込み、その



第18区 間下丸山遺跡第11号住居址実測図(1:50)

後黒色土が堆積したことが判る。9号住居址の覆土の堆積の仕方と似ている。砂利を含む暗黄褐色土からはほとんど遺物が出土しないため、短時間に埋没したと考えられる。

遺構 住居址はD-169グリッドに位置し、平面形は南北に長い楕円形で南北4.3m×東西3.5mである。住居址の中央よりやや北側を東西に攪乱層が走る。北壁25cm、南壁19cm、東壁19cm、西壁21cmを計り、南側の壁はほかに比べてやや緩やかに立ち上がる。周溝はない。

床は黄色砂礫層を掘り込むため、床面、壁面には礫が露出する。特に貼り床をした所はないが、住居址中央にやや堅いところがあり、生活している間に踏み堅められたものであろうか。床面検出で発見された小穴は4箇所ある。23Pは住居址より新しく炉址の一部を破壊している。柱穴と思われる穴はP1、P3と考えられるが、このほかに柱穴は発見できなかった。P2は袋状小壁穴であり基底部が穴の縁より外に広がっていることから貯蔵穴と思われる。

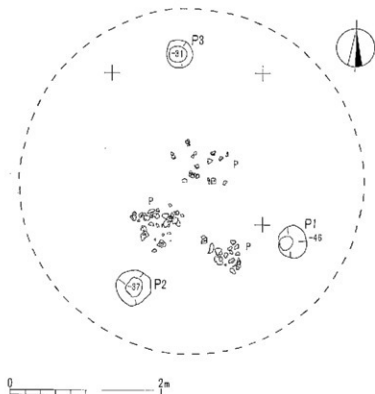
住居址のほぼ中央に埋燵炉が発見されている。土器の底部はなく、攪乱や23Pの影響を受けたため破損がひどく、復原が十分にできないほどである。炉内に焼土はほとんどない。縄文時代中期中葉の住居址である。(第18図)

遺物 縄文時代中期中葉頃の土器破片が20片ほどあるだけで、図示できたものは埋燵炉の土器1点のみである(第20図2)。口縁部に巾狭の無文部がめぐり、以下は頸部まで重三角の隆線による区画文帯、以下縄文密接施文となる。隆線わきにはやや先の丸い三角押し引きが入り、中央に鋭利な三角押し引きが入る。区画内も縄文を施文する点が異質で、岡谷にはあまり例を見ないタイプである。白色の砂粒を多量に含む中期中葉特有の胎土である。

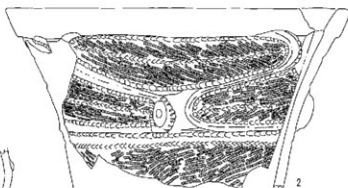
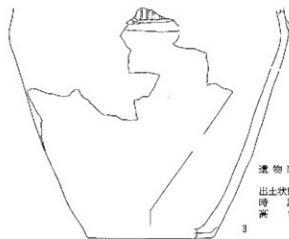
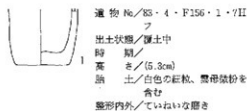
(9) 12号住居址

調査の経過 本址はD-165グリッドに位置し、遺構確認において暗褐色土層から縄文時代中期の土器破片が集中して出土したため、住居址覆土ではないかと思われた。しかし攪乱層が地山まで及んでいるため、遺構の平面形を確認することができず、遺物を多く含んだ暗褐色土が部分的に残存している状態であった。遺物を取り上げ、暗褐色土を掘りあげると柱穴が3本発見されたが、明確な床面や炉址は攪乱層のため発見できなかった。(第19図)

遺物 攪乱状態が激しかった割には出土量も多く、大小の破片がコンテナ半分ほど出土した。しかし、図示できるほどに遺存状態のよいものは1点(第20図3)だけである。これとても胴下部を残すのみで、わずかに筒形文の一部が読み取れるだけである。この他に、口縁部に4単位の山形状把手と区画内を沈線で埋める後葉初頭の土器がままとまっているが、図示できるまでに復原できていない。中期初頭の破片もあるが、全体に中葉～後葉にわたる土器の文様が主体を占めるので、そのあたりの住居址であろうか。



第19図 間下丸山遺跡第12号住居址実測図 (1:50)



砂粒も若干含む
 整形 内/ていねいな磨き
 文 採/口縁から腹部は條帯による重三角の区画文で、縁線の間は三角押引文、区画内はこれと異なる工具の三角押引文、全体に竊文を施文

胎土/白色・黒色・透明の細砂粒、豊厚の微粉を含む
 整形 内/デラデラな部分が目立つ
 外/磨き
 文 塊/櫛形文

0 10cm

第20図 間下丸山遺跡第7・11・12号住居址出土土器実測図 (1:4)

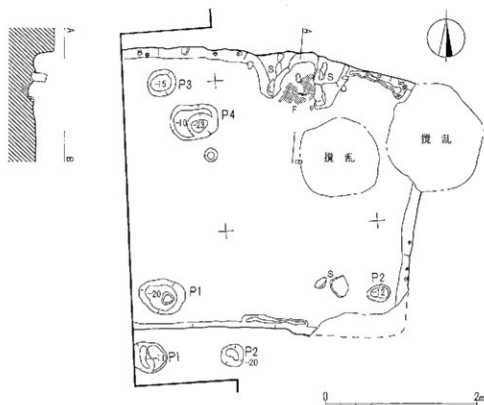
第IV章 禅海塚遺跡

1. 住居址と遺物

(1) 3号住居址

調査の経過 平成6年度の試掘調査で黒褐色の落ち込みを確認してあった住居址である。遺構であることを確認するためトレンチを設定し、黒褐色土を掘り下げて、15cmほど掘り進めたところ、ロームブロックを多く含んだ黒褐色土が発見された。住居址の床面にしてはそれほど堅くないため、この層を一部掘り進め地山まで掘り込み土層観察を行った結果、床面であることが確認された。7年度発掘調査では遺構検出作業を地山まで下げず、攪乱を取り除いたあとの暗褐色土層面で行い、竅穴遺構を検出した。それによって、黒褐色土の覆土で方形の住居址と確認されたが、住居址の西壁が調査区から外れることがわかった。住居址北壁ほぼ中央にはカマドの袖石が壁を検出した当初より露出していた。住居址覆土はローム粒子を多く含む黒褐色土である。

遺物は土師器変破片が少量出土しただけであり、復原可能なものはない。



第21図 禅海塚遺跡第3号住居址実測図(1:50)

遺構 住居址はA・B-15・16グリッドに位置し、竪穴の大きさは西壁が調査区外になることや、住居址の隅が攪乱を受けていることから断定はできないが、南北3.7m×東西4.0mの方形の住居址と推定される。住居址の掘り込みは比較的深くローム層まで達する。壁の高さは北壁20cm、南壁15cm、東壁19cmである。北壁カマド左側と東壁の一部に垂木痕跡と思われる小穴がある。周溝は南壁に幅10cm、深さ2cm、長さ90cmの溝が、また北壁カマド東側に幅5～8cm、長さ70cm、深さ5～6cmの溝を設けている。東壁下には周溝は認められない。床面は堅く叩き締められていないが、住居構築時に掘られた凸凹の掘方面を整地するためか、ロームブロックを多く混入した黒褐色土で全面を覆っている。所謂粘土質の土を持ち込み、堅く叩き締められてある貼り床とは異なり、床面の堅さは生活している間に踏み締められただけのように思われる。

床面検出により発見された小穴は5箇所である。この中で柱穴と思われるのはP1、P2、P3で、P4は柱の建て直しかとも思われるがはっきりとした痕跡はない。住居址南壁の外側15～20cmのところに2本の柱穴がある。右側の柱穴は直径30cm、深さ19cm、左側の柱穴は直径約40cm、掘り残りの基部で深さ19cmである。本址は北カマドであることから南側に出入口があると推測され、この屋外柱穴が出入口の柱などの痕跡ではないかと思われる。

この出入口から住居に入って突き当たり、住居址北壁の中央やや東寄りと思われる位置にカマドが構築されている。袖幅120cm、奥行き65cmのカマドである。右袖は長さ約40cmの石を床面から約15cm埋め込んで立て、このほかに2個の石を埋めずに並べて据えている。左袖は長さ約36cmの石を床面から約10cm埋め込んで立て、やはりこのほかに2個の石を埋めずに据えて石組みとしている。この石組に暗黄褐色土で粘土質の土を被せてカマドを築いている。天井石は崩れ落ちており原形をとどめていない。火床面には長さ約20cmの四角い石を3cmほど埋めて、支脚としている。火床は厚く10cmを計る。(第21図)

遺物 土師器壺破片30片余りが出土しているだけである。それらは2個体分の壺破片で、第22図1、2の同一個体破片がほとんどと思われる。1は胎土がやや薄手の小型壺の上半部である。粘土ひもを覆みあげて成形の後に、口縁部から頸部の内外面をていねいに横方向のナダ調整をしている。胴部はハケ目調整を外面は縦方向に、内面は横・斜めにていねいに行っている。胎土に砂粒をあまり含まず、赤褐色を呈した特徴的な色調である。



第22図 禅海家遺跡第3号住居址出土遺物実測図(1:4)

2は球胴の壺の口縁部から頸部の破片である。口縁部が短く丸味をもつてくの字に外反する。粘土ひもを覆み上げて成形の後、体部内外面をヘラによる粗い整形をしている。接合しないがこれと同一個体と思われる胴部破片をみると、縦方向の幅広いヘラナダがみられ、ていねいな整形ではない。頸部に縦のヘラ痕が間隔をおいて並ぶが、ヘラ磨きを省略したものであろうかはっきりしない。胎土は大粒の砂粒を少量ながら含み、ややもろく、色調は明るい黄褐色を呈す。

この2点の壺の特徴から本址は5世紀中頃(『長野県史』古墳IV期)あたりに位置付けられようか。

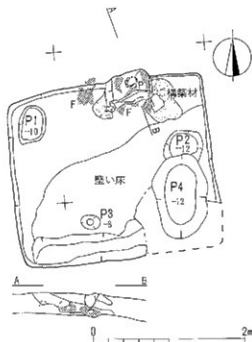
(2) 4号住居址

調査の経過 本址は調査地の北側、3号住居址のすぐ南側に発見された。攪乱を取り除いた黒褐色土層の遺構検出中に、大小の礫と並んで土師器壺の口縁部が発見されたのであるが、この時点では住居址の平面形は確認できなかったため、住居址のカマドとは想定しなかった。このため、さらに遺構検出面を下げ暗褐色土層での遺構検出を行って、黒褐色土層上検出面で方形の住居址を発見することができた。当初から発見されていた石はカマドの天井石で、土師器壺がカマドに設置された状態のものであることがわかった。覆土中の遺物出土量は少ない。

遺構 住居址はC-18グリッドに位置し、平面形は南北2.7m×東西2.4mの方形の住居址である。遺構の掘り込みは比較的浅く、ローム層まで達していない。壁の高さは北壁5cm、南壁12cm、東壁10cm、西壁12cmである。周溝は住居址南壁下に幅35cm、深さは床面より5cm深く掘られているが、北、西及び東壁下には周溝は見られない。

床面はローム層を掘り込んでいないため、暗褐色土層中につくられている。住居址南半分は強く叩き締められているが、カマド左側から西壁下はあまり堅くない。カマドが北側にあることや、床面の堅さが南側がより堅いことから出入口は南側にあったのではないと思われる。床面検出のときに4箇所の小穴が発見されたが、これらの深さを計ると、床面からの深さがP1は10cm、P2は11cm、P3は5cm、P4は24cmである。穴の形状からみて柱穴と思われるものはP4を除く3本であるが、穴の深さが10cm前後であり比較的浅いため、柱穴であるか断言できない。またP4は攪乱を受けており、住居址の床面から検出できたものではなく、どのような性格なのか不明である。

カマドは北壁の中央よりやや東側に寄った所に構築されている。保存状態は良好で、カマド石組みは両袖石の上に天井石が置かれ、ほかに石を並べたような痕跡はない。石組みを覆っていたと思われる構

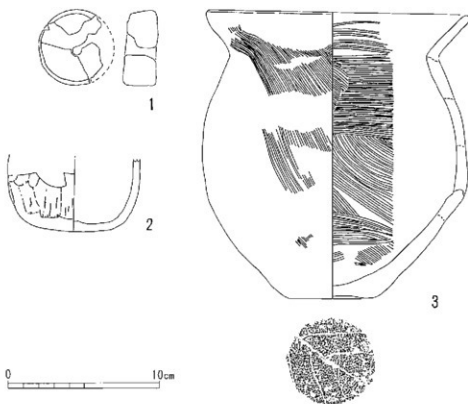


第23図 禅海線遺跡第4号住居址実測図(1:50)

築材は、通常、粘土質の褐色土を用いることが多いが、本址では両袖石の周辺に僅かに褐色土の構築材が認められただけである。設置されていた甕の周囲に褐色土がなく、黒褐色土だけであったことから、粘土質の褐色土をあまり使わず、主に黒褐色土を用いてカマドを構築していたと思われる。

天井石や設置された土師器甕はそのままの状態で見つされた。この甕はカマドの火床面に立つ長さ6cmの石の上に土師器底部を逆位に覆せ、その上に土製紡錘車を重ねて高さ調節をした支脚の上に置かれていた。カマドの特徴としては、カマドに設置された土師器甕がそのままの状態で見つされたこと、通常カマド内の支脚は石を用いているが、今回は小さな石と土師器と土製の紡錘車を重ね合わせて高さ調節をした支脚を使用していること、カマドの構築が袖石に縦長の石を立てただけで、複数の石を並べていないことや粘土質の褐色土を用いていないことが挙げられる。(第23図)

遺物 カマドに据えられた状態で発見された土師器小型甕(第24図3)と、それを支えていた土師器底部破片(2)とその両者の間に挟まっていた紡錘車(1)が主なものであり、その他には9片の土師器細片が出土しただけである。



第24図 神海塚遺跡第4号住居址出土遺物実測図(1:4)

3の甕は口縁部はくの字状に強く外反し、口縁部は胴部最大幅とほぼ同じで広く開く。

胴部は球形に近く膨らみ、成形時の接合痕が胴下半部に認められる。整形はハケ目によるナデが体部内面全体にわたって見られるが、それほど強く施されていない。外面はさらにハケ目調整が弱い。底部に木葉痕を残す。

2はカマドの支脚石の上に覆さっていた土師器の底部である。体部外面は粗いヘラ削りの調整が行われ、部分的には器壁3mmという薄さである。内面は指ナデ痕とヘラ痕が粗く残る。底部は丸底に近い状態なので、どの器種の底部か明確ではないが、長胴甕のものと考えておきたい。胎土は砂粒を若干含み、

火熱を受けているためか外面の色調は明るい赤褐色ないし灰色である。この底の上ののっていたのが1の紡錘車であった。もろくてボロボロ状態であったため完形に復原できなかったが、推定外径5.0cm、最大厚2.2cm、中心部に穴が貫通する。

本址の遺物は3の小型甕から見て古墳期6世紀初段階あたりと考えられる。

(3) 5号住居址

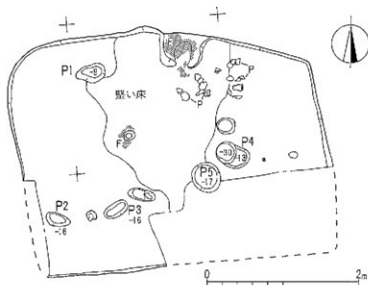
調査の経過 本址は平成6年度の試掘調査で黒褐色の落ち込みを発見し、カマドの構築材と思われる褐色土を確認することができたため、平安時代の住居址ではないかと推測されていた住居址である。

発掘調査時の遺構検出は、攪乱が深いため褐色土層まで掘り下げて行った。住居址は攪乱の影響強く受けており、すでに削り取られている部分もある。

遺構 住居址はB-43グリッドに位置する。竪穴の大きさは南北3.2m×東西4.0mの長方形と推定される。平面形を見ると、住居址の北西隅は隅丸方形であるが、北東隅が方形であることや、南西隅の壁の残存状況から、隅丸方形にはならないと思われる。南東隅は攪乱により破壊されているが、これらの状況から1コーナーが丸味を帯びているものの、全体に長方形の住居址と分類した。壁の高さは攪乱の影響もあり、北壁7.2cm、南壁4.0cm、東壁11.5cm、西壁4.2cmと場所によって違いがある。周溝は発見されなかった。

床は褐色土層を掘り込み、ローム層に塗している部分もあるが、遺跡の地形が南側にやや傾斜しているため床がローム層に塗しているのは北側半分で、このほかは褐色土層中に床が作られている。このため床面北側半分はロームブロックの混入した黒褐色土で整地し床としている。カマドの周辺から住居址中央は強く叩き締められているため床面検出は容易であった。床面精査で発見された小穴は8箇所、このうち柱穴と思われるものは形状や深さを見るとP1、P4ではないかと思われるが、規則性は見られない。

カマドは住居址北壁の中央よりやや東側に構築されている。袖径約50cm、奥行き約45cmのやや小さい



第25図 榊海家遺跡第5号住居址実測図(1:50)

カマドである。天井は崩れ、袖石も抜き取られたためか発見することができず、火床面を確認できただけである。焼土は厚く、約10cmを計る。(第25図)

遺物 図示した土師器・須恵器環以外は破片から図上復元した土師器壺の同一個体片が併せて30片余りあるが、接合・復元はできなかった。坏は図示したものがすべてで、破片の出土はない。

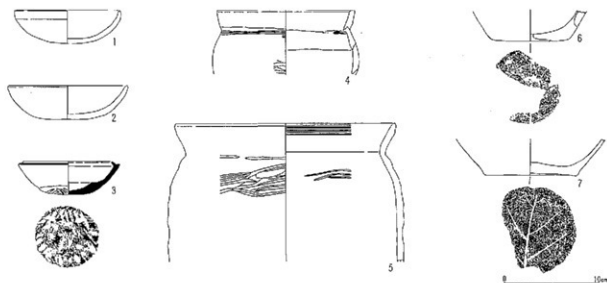
第26図1はロクロを用いなくて成形される丸底の環で、口縁がやや内湾ぎみに立ち上り、口唇端部は尖りぎみに薄く作り出している。口縁付近の内面は横ナデと若干のヘラ磨きで調整し、底部外面はヘラ削りの後、ていねいなヘラ磨きにより、平滑に仕上げている。内外面ともヘラ削りやヘラ磨きの痕跡をほとんど残していない。胎土は雲母の微粉を含み、外面の色調は暗い黄土色であるが、胎土内は黒色をなしている。2は同じく丸底に近い底部の環で1に近い器形であるが、底のヘラ削りはやや平底状の部分を作り出し、口縁部の口唇直下を外反り気味に横ナデ整形している。全体にヘラ磨きは外面が粗雑で、ナデや削りが消されていない。内面は比較的ていねいな整形で半分が黒色、その他は茶褐色をなす。

3は須恵器坏である。口縁の立ち上り部は低く、受け部より少し出る程度で、体部はやや深めである。底部外面は手持ちで4回ほど回転しながらヘラ削りが施されているが、粗い削りで飛びカンナ風面に削り痕が残る。胎土は2～3mmの砂粒を若干含み、焼成はややもろさを感じさせる。色調は内面が外面より灰白色を呈す。

土師器壺は2個体が図上復元できた。4は小型壺の上半部で、粘土紐の積み上げによる成形痕を明瞭にとどめる。整形は雑で接合部に貼り付けた粘土は完全にナデツケされず、裂落する部分もある。口縁部は短く、やや外反して立ち上り、口唇端部は凹凸が残る。口縁部外面にハケ目の整形がわずかに見られるが、以下はヘラ磨き痕が残る。胎土は砂粒をあまり含まず緻密で、外面は黒褐色、内面は黒色を呈している。木葉痕をもつ6はこの底部と思われる。

5は長胴壺の上半部である。7はこの底部と思われ、この他に接合しない房部破片があり、それらと合わせて整形を見ると、口縁部は内外面は横ナデ、胴上半部外面は粗いヘラ磨き、胴下半部はヘラ削りである。胎土に大小の砂粒と雲母を含み、赤褐色ないし灰白色を呈す。

本址の遺物は、土師器坏を見る限り6世紀末あたりに比定されると思われる。須恵器坏は「長野県史」のいう古代V期に相当しようか。

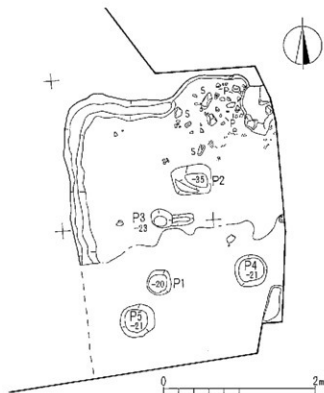


第26図 榑海塚遺跡第5号住居址出土遺物実測図(1:4)

(4) 6号住居址

調査の経過 本址は攪乱を取り除いた褐色土層での遺構検出を行い、黒褐色土の落ち込みを確認し、発見された住居址である。

当初、住居址はそのほとんどが調査区外になってしまうため、地境ぎりぎりまで拡張して調査を行った。しかし住居址の東側半分は調査区の外になり、南側半分も攪乱によって破壊されていることがわかった。結局住居址の約1/4だけの調査となったが、ちょうどカマドの左側の張出部から土師器甕破片が集中して出土した。



第27図 禅海塚遺跡第6号住居址実測図(1:50)

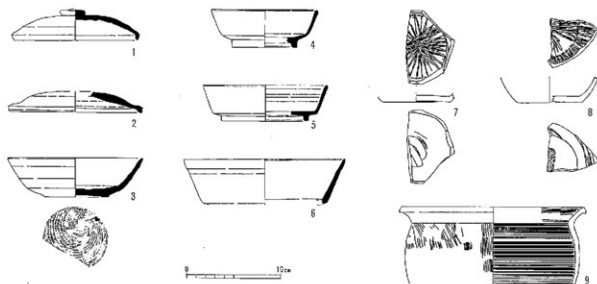
遺構 住居址はG-18グリッドに位置し、平面形は調査を行うことができた部分の形状から隅丸方形の住居址と思われる。竪穴の大きさは南北約4.0m×東西約5.0mと推定される。壁は北壁が19cm、西壁は16cmの高さが残り、ローム層まで達する比較的深い掘り込みを持つ住居址である。北壁にはカマドが構築されており、左袖から西側1mほどが約30cm外側に張り出す。西壁下に巡る周溝は北壁へと続くが、この張出部で止まる。周溝の幅は25cm、深さ7cmであるが、南壁は攪乱を受けており、東壁は調査区外になるため周溝の存在を確認できなかった。張出部は床面から2~10cmほど高い位置で土師器甕破片や礫が集中して出土することから、何らかの構造物があった可能性がある。

床は全体に堅く叩き締められている。特にカマド周辺は堅い。床面精査で発見された小穴は6箇所である。主柱穴と思われるものはP2、P5で、P1、P3、P4は何かの支えの柱穴であろうか。いずれも深さ20cm前後である。P6は攪乱なのか判別できなかった。

カマドは住居址北壁のほぼ中央部に構築されていると推測される。調査区域の関係でカマド左袖部分だけしか調査を行うことができなかったが、住居址北壁が部分的に張り出しているところにカマドを構築している。またその周辺から土師器破片や礫が出土していることから、調理場としての空間が設けられていたことが窺われようか。(第27図)

遺物 本遺跡の遺構の中では最も出土量が多く、土師器片36点、須恵器片19点、図示できたものは7点にのぼる。(第28図)

1・2の須恵器坏蓋は、天井部が丸味をもって甲高になる1と、口縁部がわずかに湾曲して平端面をなす2がある。擬宝珠つまみは偏平である。ロクロ成形後、天井部外面をヘラ削りするが、1は平坦部の狭い範囲のみ軽く削る程度であるのに対し、2は半分ぐらゐまで削っている。胎土は両者が大きく異なり、1は含有物が多く、焼成によって気泡状に膨らんだりアバタ状に孔があく。色調も灰黒色である。これに対してもう一つは含有物が少なく灰色を呈したきれいな器膚である。



第28図 榊海塚遺跡第6号住居址出土遺物実測図(1:4)

須恵器坏は4点区示できた。3を除いて破片から図上復原したものである。高台をもたない3は広い底部からわずかに内湾して立ち上り、直線的に外へ開いて上方へのび、口唇端部方面は丸味をもってわずかに外反する。胎土は大小の砂粒を若干含み、色調は黄土色で火だすきを残す。4～6は高台付の須恵器坏で、広い底部から口縁部へ直線に短くのびるもの(4・5)と深いもの(6)がある。口縁部はていねいなナデ調整により軽く外反する(4・6)。高台はあまり踏ん張らずに角張っている。6は高台接合部で欠損していると思われる。胎土・色調は4が1の蓋にきわめて似ているが、5は白色の砂粒を多く含み、灰色を呈すなど大きく異なる。

土師器は3点を図示できた。7・8は所謂甲斐型環の破片である。7は糸切り底をヘラ削り後、ていねいにヘラ磨きして、内面はロクロナデ痕を残したまま放射状のヘラ磨きを施す。8は外面の整形は底部中央にヘラ削り痕を残すが、そのほかはよくヘラ磨きされている。内面は器壁と底面に放射状のヘラ磨きを施す。胎土は含有物が少なく、色調は明褐色ないし黒褐色である。なおほかに小破片1点が出土している。土師器破片9は上半部のみであるが、口縁部はくの字に強く直線的に外反し、口唇端部が須恵

器の臺のように平坦に成形されている。胎土が異質で、多量の砂粒とわずかに雲母の微粉を含む。整形は体部外面の頸部直下を縦のハケ目調整、胴部をへら割り、内面を横にハケ目調整する。

このほかに図示できなかった破片に美濃産須恵器の大きな破片が9片ある。接合しないため器形ははっきりしないが、横瓶の破片であると思われる。

以上、本址の遺物は、土師器、須恵器とも8世紀を境にその前後に位置するものではないかと考えられようか。

2. 小竪穴と遺物

弥海塚遺跡では住居址以外の竪穴遺構は36基発見されたが、出土遺物を伴い時代などを判明することができる遺構は23基である。このうち縄文時代早期の小竪穴が7基、縄文時代中期初頭の小竪穴が12基、江戸時代後期以降の竪穴が4基発見されている。

(1) 縄文時代早期の小竪穴

押型文（山形文）土器片や沈線文、条痕文の土器片が出土している小竪穴があり、これらの遺物が出土しているものは、3P、12P、13P、19P、24P、34P、37Pで調査地のほぼ中央に集中している。各小竪穴の平面形には統一性がなく、円形、楕円形などバラエティーがある。早期の小竪穴と思われるものが集中している辺りは、暗褐色土層中から遺構外の遺物としてやはり押型文土器片や、沈線文土器片が出土している。

小竪穴の遺構検出では、暗褐色土層の中で若干黒っぽい落込みが認められたため小竪穴として掘り進めたものがある。このため、基底部に明らかな立ち上がりがないことや、鍋底状であることで小竪穴として認められるのか疑問視されるものもある。掘り込みが明らかにローム層を掘り込んでいるものに24Pが挙げられる。

(2) 縄文時代中期初頭の小竪穴

縄文時代中期初頭の土器片が出土した小竪穴は5P、8P、14P、17P、18P、26P、27P、28P、29P、30P、33P、36Pの12基である。早期の小竪穴から出土した遺物と比べると大型の破片が多く25P、26P、27P、28P、29Pに特に顕著である。小竪穴の掘り込み面は暗褐色土層で確認されたのであるが、早期の小竪穴よりは覆土の色が濃く、検出が容易であった。

縄文時代早期、中期初頭の小竪穴が発見されているのは、調査区中央より北側に集中している。これは、集落の中で一定のまとまりをもった小竪穴群として捉えてよいのか、それとも遺構の掘り込みが浅いため、比較的深い層まで攪乱が及んでいた南側では、既に破壊されてしまっていて検出できなかった結果なのか見解が分かれるが、今回の調査範囲では結論を引き出すことが難しい。

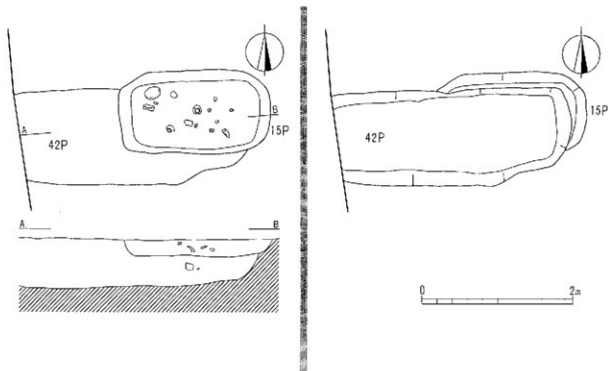
(3) 平安時代から中世の小竪穴

南側の調査区（C・D-72）からは方形の竪穴40Pが発見され、覆土から土師器皿の破片が出土した。竪穴の平面形がやや菱形になることや、覆土が非常に薄く攪乱の影響を受けていることから、遺構の性格を解明することはできなかった。

(4) 江戸時代以降の竪穴

江戸時代以降の竪穴は4基発見されている。このうち15Pと42Pは、陶器破片が多く出土する遺構である（第29図）。当初、遺構確認のときは15Pだけが検出されたのであるが、その下から42Pが発見された。重複関係は15Pのほうが新しく、調査中は15Pから多くの陶器破片が出土したが、これを調査し終わり42P覆土を掘り進めると遺物の出土量は極端に減った。15Pの平面形は隅丸長方形で長さ2m、幅1.1m、深さ23cmである。42Pは遺構の西側の壁が調査区の外になるため正確な長さはわからないが、長さ3.4m、幅1.3m、長さ65cmの長方形というより溝状の竪穴である。

39P、41Pは南壁が調査区の外になってしまうが、一辺2mを越える方形の竪穴である。出土遺物は39Pから高さ5cm、直径30cmを越える偏平な焙烙が出土した。礫などの出土はない。41Pは覆土中から多くの礫が出土したが、時代を決められるような遺物の出土はなかった。



第29図 禅海塚遺跡小竪穴実測図（1：50）

(5) 土間状の堅緻な面

F-23・24の攪乱を取り除き、暗褐色土層で遺構検出を行うと、平安時代住居址のような堅い床状の面が広がっているのを確認したが、この面からは特に出土遺物はない。はっきりした柱穴はなく、ほかの遺構と比べて地表面から浅い位置で発見されていることから、新しい時代の住居の土間の跡とも考えることもできるが、遺構の性格はわからない。

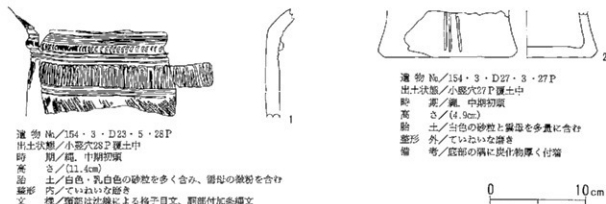
(6) 小竪穴出土の遺物

小竪穴から出土した遺物は、ほとんどが縄文土器・土師器・須恵器の小破片が多いため、図上復原できたものは4点のみである。時期別に見ると、土器片は中期初頭のもの100片あまりと大部分を占めている。石器は5P、10P、25Pから打製石斧が出土しているが、10Pは平安期以降の掘り込みであるため、埋土に混在したものであろう。

主な出土遺物について概略を記すと、縄文土器では、小竪穴27Pから第30図2が出土している。張り出し底と垂下する沈線は中期初頭土器の特徴をもっている。1は28Pの出土である。

平安時代以降の遺物は39Pから第32図1の焙烙が出土した。口径29.4cm、高さ5.0cm、内面の仕上りはなめらかに整形されているが、底部外面は凹凸が多く、あるいは薄く剥落しているのか、胎土含有物の抜けた小さな孔が目立つ。底部の厚さは薄い所で4.5~6.0cmである。

40Pから出土しているのは2の土師器の皿である。非ロクロ成形の所謂手握土器で、丸底状に成形されていて口径7.7cmと計測できるが底径は明瞭ではない。整形のナデは口唇部に沿って1段行っているだけである。13世紀代に比定される類であろうか。

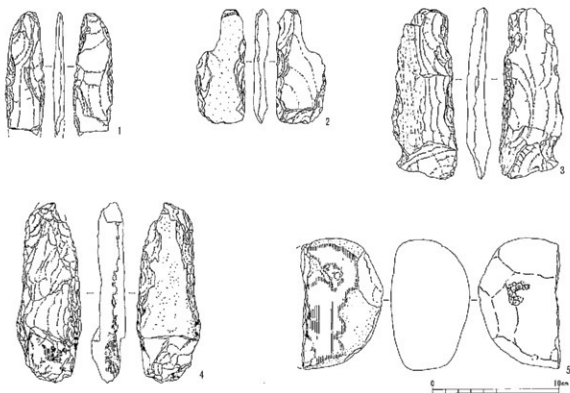


遺物 №/154・3・D23・5・28P
 出土状態/小竪穴28P 覆土中
 時期/縄、中期初頭
 高さ/11.4cm
 胎土/白色・乳白色の砂粒を多く含み、雲母の破片を含む
 編形/内/ていねいな磨き
 文様/頸部は沈線による格子目文、胴部付加糸織文

遺物 №/154・3・D27・3・27P
 出土状態/小竪穴27P 覆土中
 形/丸、中期初頭
 高さ/4.9cm
 胎土/白色の砂粒と雲母を多量に含む
 整形/外/ていねいな磨き
 備考/底部の隅に皮付物厚く付着

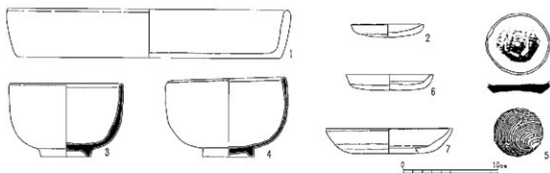
0 10cm

第30図 榑海塚遺跡小竪穴出土土器実況図(1:4)



図No	遺構区	層位	グリッド	No	器種	細分類	石材	長さ(mm)	高(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
1	10P		D16	5	打製石片		石安	(97.4)	30.8	8.7	32.3	
2	25P		D15	4	打製石片		安	89.2	38.6	(9.7)	(44.0)	
3	15P		B31	16	打製石片		頁	135.2	48.6	18.8	118.7	
4	15P		B31	31	打製石片		緑片	140.0	50.9	27.2	207.7	
5	34P		D29	10	磨石類		礫	(102.5)	(62.0)	(61.0)	(575.0)	ナリ面と縦き

第31図 禅海塚遺跡小竪穴10P・15P・25P・34P出土石器実測図(1:3)



第32図 禅海塚遺跡小竪穴・遺構外出土遺物実測図(1:4)

3. 江戸時代の陶器

これまで岡谷市内では、江戸時代の竪穴から陶器が出土したことはほとんどなかったが、今回、禅海塚遺跡の調査で包含層から陶器の破片が出土したり、また15P・42Pからはほぼ完形品に復元できる陶器が出土した（第32図3・4）。このため陶器片の正確な時期や器種・産地などを調べるため、文京区遺跡調査会に破片の鑑定を依頼して指導、助言を賜った。以下その内容を要約する。

禅海塚遺跡出土の資料は次のような特徴が挙げられる。

- (1) 圧倒的に陶器が多いこと
- (2) 时期的には、18世紀から19世紀の遺物がほとんどであること
- (3) 美濃・瀬戸系の製品が多いこと

このことから考えると、禅海塚遺跡で採集された資料は、そのほとんどが陶器であり、磁器が極めて少ないことが特徴の一つにあげられる。これは当時の典型的な地方での生活様式であり、磁器の使用頻度が少なかったことを示す。また、東京都内の調査では、同じ調査区で藩主の一族が生活していた時期の遺構からは磁器が非常に多く出土するのに対し、藩士の長屋としていた時期では陶器が多く出土する傾向があるが、江戸時代後期になると文京区内では、町屋でも大名屋敷でも磁器と陶器の割合の差は見られなくなってくるという。

19世紀に入ると、あちらこちらの地方の窯で同じような製品が作られるようになるため、本資料の産地を特定することが難しくなる。

以上の内容から、出土した陶器は18世紀から19世紀に生活していた江戸時代の庶民の食器であることがわかった。岡谷市内で江戸時代の資料から具体的な年代を判定し報告できるような資料が発見されることは少なく、貴重な成果となった。

4. 遺構外の遺物

(1) 黒耀石剥片集中地点

黒耀石剥片集中地点の調査経過

重機で攪乱層を剥ぎ取り、遺構検出を進める際にF-43グリッド付近から黒耀石の剥片が集中して出土する状態を確認した。黒耀石は攪乱層を取り除いた後の黒色土層から出土しており、周囲に遺構の掘り込みがないか平面形を検出しようとしたが、はっきりした掘り込みは確認できず、全体に黒色土が広がるだけであった。

遺物検出面は攪乱の影響で既に黒耀石の出土する辺りは、東から西にやや傾斜している地形であることが観察できた。このため掘り込みのある遺構内からの出土ではないと推測され、斜面に堆積した黒色土中の黒耀石破片を、出土地点を記録しながら取り上げ、掘り進めることにした。



第33图 禅海家遺跡黒曜石剝片分布图 (1:30)

しかし本来、傾斜の上の方にもさらに黒耀石が散乱していたものが攪乱により削られてしまった可能性もあり、この部分だけの状況によって、剥片の出土の仕方に向向性があることを明言することはできない。出土した黒耀石のレベルの幅は約40cmである。セクションラインを黒耀石の一番集中している部分に合わせて設定し土層観察を行ったが、やはり黒色土層からの出土が多く、地山のローム層に近づくに従って出土量は減少する傾向にあった。

黒耀石を取り上げながら黒色土を掘り終わるとローム層となる。この土層表面は木の根が侵食作用によるものか、凹凸が激しい。この面でもやはり遺構らしい掘り込みは発見できず、全体的に西へ傾いた傾斜地となっている。

剥片の総点数は、大・小剥片と微細な調整剥片や碎片など2,114点に達する。このうち除土作業中に取り上げて出土地点を記録できたもの(第33図)は690点、フローテーションでフルイの網にかかったもの1,424点にのぼる。

微細な剥片は、2～3mmの方形あるいは扇形、また長細いものなど様々な形状であり、また、1mmもない薄いものから分厚い角柱状のものなど多様である。

(2) その他の遺物

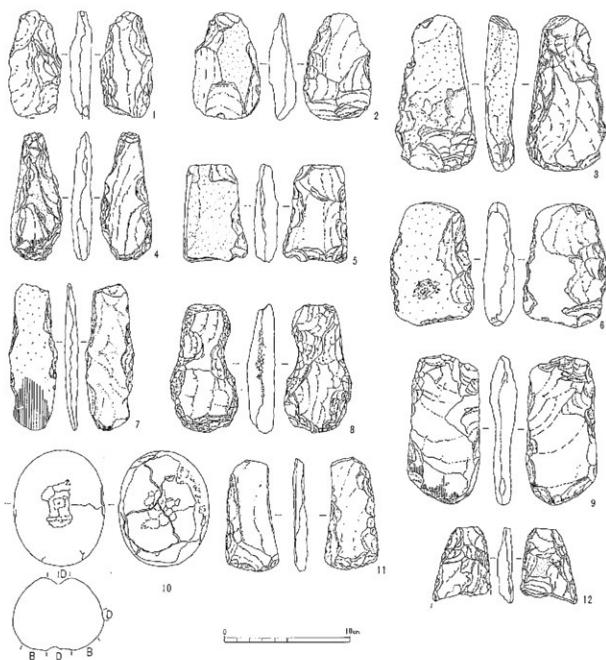
遺構外から検出された遺物は、縄文土器破片が数量的に主体を占める。時期別には中期初頭から中葉初期にわたる土器が1,100点以上と大部分を占め、次いで早期中葉～末の押型文・沈線文土器が520片とまとまっている。これらはいずれも住居址は発見されておらず、包含層に散在する状況であったが、中期初頭～中葉期は小竪穴内出土がより多い。時期的には梨久保、九兵衛尾根Ⅰ・Ⅱから猪沢・新道の各期にわたる土器が主となる。このほかに中葉期のものはほとんどなく、後葉期がほんの少量認められる。

なお、早期土器群について別項に詳細をまとめている。

土師器、須恵器は約コンテナ1箱分が出土しているが、完形に復原できるほどに残存の良いものはない。特記すべき事項としては、古墳時代初期の土師器小型丸底土器の底部破片や、須恵器の嵌形横瓶の破片がある。まとまったものとしては中世の土師器口が15個体あり、1点のロクロ成形を除き、所謂非ロクロ成形の皿である。

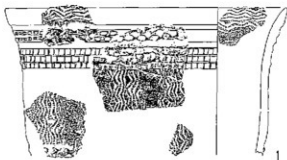
第32図5は須恵器残底部破片であるが、内外面に研磨痕が残る特異な破片のために図示した。内面は底部の中央と割れた縁の一部、外面は底部の底面が全周にわたって、いずれもツルツルと滑らかである。墨の痕跡が付着していないので靨に転用したものではないと思われるが、どういふものであるか不明である。6は土師器皿で、非ロクロ成形の手捏ねである。口唇に沿ってナデ整形され、内面は外面に比べ、ややいいねいに整形されている。胎土に含有物をほとんど含まず、明るいいろ色をなす。7も同じ皿であるが、口径13.3cmと唯一大きく深い皿である。口唇部に沿って強く押しえてナデしているためか内湾ぎみに先回りする口縁部となっている。6・7とも鎌倉期以降に位置付けられようか。

黒耀石と水晶の出土 黒色土を削り、遺構検出を行うとF-37グリッドから直径5～6cmほどの黒耀石が3個まとまって出土した。このためピット内の出土であるのか確かめるため精査をしたが掘り込みは発見されず、包含層中の遺物と思われる。黒耀石の大きさはNo.1が長さ53.3mm、幅59.4mm、厚さ50.5mm、重さ167.7g、No.2は長さ53.3mm、幅82.5mm、厚さ33.9mm、重さ153.0g、No.3は長さ67.5mm、



図No.	遺構区	層位	グリッド	No.	分類	細分類	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備考
1		クロ	D18	3	打製石斧	視片	泥片	83.5	42.8	15.4	62.3	
2		クロ	G29	1	打製石斧	頁	頁	84.5	54.0	20.7	86.0	
3		カツ	E34	4	打製石斧	縁線	縁線	122.7	65.2	23.5	230.1	
4		クロ	C29	5	打製石斧	視片	視片	102.0	40.7	15.1	70.9	
5		クロ	D17	3	打製石斧	安	安	77.3	51.0	18.2	92.6	
6		クロ	E16	2	打製石斧	尾	尾	92.3	65.6	24.1	203.3	
7		クロ	C28	4	打製石斧	縁線	縁線	116.0	37.8	9.8	61.6	
8		クロ	F15	3	打製石斧	砂	砂	101.7	52.2	22.0	150.5	
9		クロ	G29	2	打製石斧	砂片	砂片	118.4	57.4	19.6	156.5	
10		クロ	F16	6	磨石類	縦	縦	51.2	70.5	57.0	47.0	磨削面と刃み
11		クロ	A27	1	打製石斧	箔	箔	89.2	43.5	10.0	45.7	
12		クロ	A29	1	打製石斧	頁	頁	(62.0)	(45.5)	(11.5)	(35.8)	

第34図 押海原遺跡遺構外出土石器実測図 (1:3)



遺物 №/154・3・B28・10・クロ
 出土状態/包含層(黒色土層)
 時期/縄、早期
 口径/29.6cm
 胎土/少量の黒母と半透明の砂粒を含み、ごく微量の繊維が含まれる
 彫形/内外ともナシ
 文様/口縁部上段は内外とも横位の山形文、中段に押玉をもつ2条の基帯、下段には3段の押引文を施す。胴部は縦位の山形文、胴下部は横位の帯をもつ陰帯で分帯する

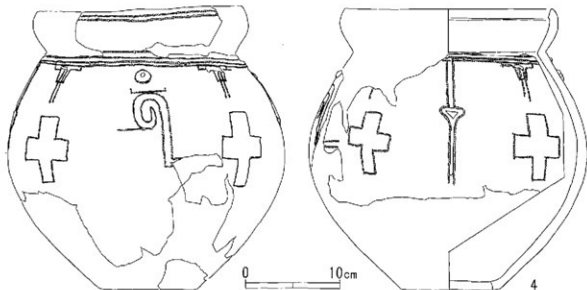


遺物 №/54・3・B26・9・12P
 出土状態/小竈穴12P覆土中
 時期/縄、早期
 口径/50.3cm
 胎土/乳白色粒子と微量の繊維を含む
 彫形/内外とも条痕状彫
 文様/横1mm以下の細い沈線と、幅3mmの、中に条線を残す沈線の2種類で、斜格子文を施す
 備考/外面に灰化粉付着



遺物 №/154・3・P29・11・34P
 出土状態/小竈穴14Pの覆土中
 時期/縄、早期
 口径/21.5cm
 胎土/乳白色の細粒を含み、繊維は含まれない
 彫形/内面条痕状彫
 文様/二層に帯のみを施す。口縁部外面は横位に5条の押引文、内面に横位の山形文を施す

遺物 №/154・3・B28・6・クロ
 出土状態/包含層(黒色土層)中に正位の状態で出土
 時期/縄、中期
 口径/30.2cm
 胎土/21.8cm
 彫形/白色・黒色・赤色・乳白色・透明の細かな砂粒を多く含む
 文様/内外ともていねいな描き
 備考/胴部と頸部は一条の陰帯で分割される。胴部を陰帯の幅で大きく2分割、その間に幅広の十字・わらび字・十字のモチーフを描く。十字の上には十字型文を、わらび字の上にはボクン状貼り付け文を配す。沈線状の文様はすべて単線の帯りをも併用して施している



第35図 禅塚塚遺跡小竈穴・遺構外出土土器実測図(1:4)

幅56.7mm、厚さ50.0mm、重さ152.9gで、いずれも剥片を剥ぎとった形跡がないか、あっても1~2回の剝離痕を残すだけの原石である。またB-29黒色土層から長さ41.5mm、幅17.3mm、厚さ12.5mm、重さ12.5gの水晶が出土している。

特異な文様をもつ縄文土器 注意される遺物としては第35図4があげられる。この出土状況は、遺構確認を行うため黒色土層を掘り進めているとき、土器の口縁部が出土し、さらに土器破片が続くことから、1個体に近い土器が正立した状態であることが予想された。遺構内の出土であるのかどうか確認するため、住居址や小竈穴を想定して周囲の遺構検出に努めたが、黒色土層中では遺構の平面形を発見することができなかった。そこでさらに、土器の中央で包含層を半載し竈穴の立ち上がりなど土層堆積状態を観察したが、土器を埋めるために掘られた小竈穴の立ち上がりは発見されず、遺構に伴う遺物ではないと判断された。土器の口縁部は攪乱の影響のため、破損していて一部分残るだけだったが、胴部の破片は残存が良い。底部は土器内に浮き上がった状態で発見された。全体に土器の保存状態は良く、破損が少ないことから他の場所で破損したものをここへ廃棄したのではないと思われる。土層観察から竈穴の掘り込みが観察できないことなどと考え併せると、元々この位置に正位に置かれていたものが埋没したのではないかとも思われる。しかし、本遺跡からは縄文時代中期初頭の小竈穴がいくつも発見されていることから、黒褐色土層中の浅い掘り込みの中に正位に掘えられた屋外埋竈であったが、遺構検出において、その平面形が発見できなかった可能性は否めない。

この土器はおもしろいことに頸部の分割、胴部の縦の2分割を一条の横走する隆線と垂下する隆線文で表わすものの、文様モチーフは単節Lの線を押しあてた、いわば押圧縄文で描いている点で希有な例である。胴部文様はサワラビ形文を中にして幅広の十字形文が左右に配され、各々の上位にトーチ形あるいは儀杖の冠形ともいうモチーフとボタン状貼付文をおく。サワラビ形文は円の上と下に横線が入り、茎の下は右に曲るなど、これら一つ一つは偶然的文様とは思えないモチーフである。なお、ボタン状貼付文と隆帯の際はいないに押圧の縄文がめぐり、口唇直下には2条の押圧の縄文が一周すると思われるが、残存部が少ないため単純に一属するだけなのかどうかかわからず、興味のつきないところである。尖起の有無も不明である。

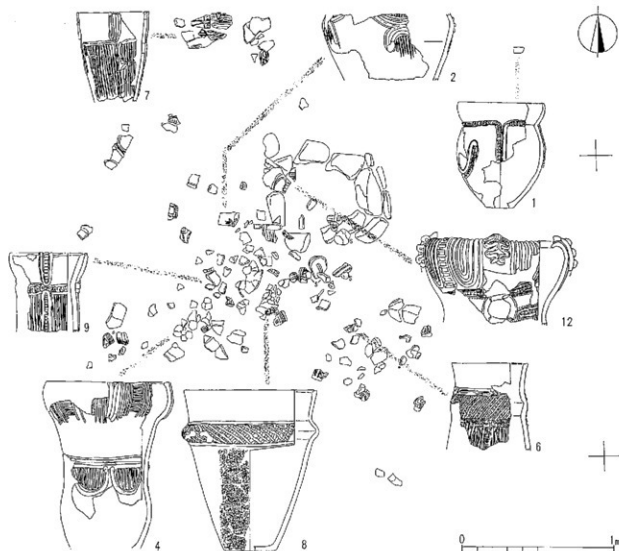
この土器の編年の位置付けについては、包含層中に最も多い中期初頭~中葉の中で捉えておく。

本遺跡から出土した石器類は別項に一覧を掲げた。土器片の在り方と対応してか、石鏃が主体的であり、打製石斧、凹石、石皿が少ない。

第V章 ま と め

1. 間下丸山遺跡9号住居址出土の縄文中期土器

間下丸山遺跡では、以前の調査でも縄文時代中期中葉の住居址などが発見され、縄文時代の集落が形成されていたことが判っている。今回の調査では擾乱の影響を強く受けていたため、住居址の多くは覆土が薄く、全体に出土遺物が少ないが、さいわいに9号住居址では中期中葉から後葉にかけての遺物が比較的多く出土した。これらは中葉末から後葉初期にわたる興味のある資料の出土であったため若干の考察を加えて調査のまとめとしたい。



第36図 間下丸山遺跡第9号住居址土器出土位置図(1:25)

土器の出土状態は住居址西南部に集中する。復原可能な土器は住居址ほぼ中央部から西南側へと広がるが、床面より5～13cm高い位置になる。これら数個体の土器は折り重なるように出土しているが、完形に復原できるものは少なく、またほとんどの破片が裏側を上にして出土している。土層観察では現代の攪乱により、潰れた土器の上側半分が剥ぎ取られた様子はなく、また、縄文時代以降の古い時代に攪乱を受けていないのならば、土器は該期に破片の状態で覆土中に入り込んだことになる。破片の出土の仕方と特別な状況が無いことから、破損した状態の土器が短時間に廃棄された跡と思われる。

資料の観察 復原により区示することができたものは縄文時代中期中葉末から中期後葉初期の土器13点である。

1. 口縁部から底部の間まで器形を図面復原できる中期中葉末の土器で、口縁部は無文で頸部に隆帯を貼り付け、胴部に垂下させる。隆帯の上には断面「U」または「V」字状の工具による刻みがあるが、垂下する部分で刻みが一部見られなくなるところがある。また、その隆帯から胴部に逆「J」字状文が施されていると思われる。

2. 口縁部付近のみの破片で、文様はこの部分しか観察することができないが、最も張り出す部分に人体状モチーフが施されており、櫛の背中には1本の隆帯で表現するものと2本の隆帯で表現するものがある。

3. 胴下半部のみ。頸部に隆帯の痕跡が残る。胴部に2本の隆帯が巡り、櫛形文が施される。隆帯には断面「U」字状の工具による刻みが付けられている。

4. 底部を欠損する。口縁部を2本または1本の縦の隆帯で4分割するが必ずしも等分ではない。その間を縦と梯子状の横の沈線で埋める。胴部に無文帯があり、その下に2本の沈線と隆帯が胴部を巡り、櫛形文を施す。

5. 底部を欠損する。口縁部は無文帯となり、2条一対の小突起状となる隆帯3箇所と正面の大きな突起により4分割する。正面の突起からは隆帯が胴部まで垂下し、頸部にめがね状の把手を付ける。ややくびれた頸部には隆帯が横位に巡り、断面「U」字状の工具による刻みが付けられている。隆帯の下には横に蛇行する沈線があるが、部分的に他の沈線により消され、U字状に見えるものもある。あたかも蕨華状を呈する。この下には縦位および梯子状の横の沈線が交互に施文され、さらにその下は縦位の沈線だけとなり、以下無文帯となる。

6. 口縁部は無文で、内外面は丁寧に磨き、頸部には輪ゴムを横に引っ張ったような槽円状の隆帯が巡り、頸部の膨らみ部分にはソウメン状の粘土ひもを貼り付けた格子目文となる。すぐ下に2本の隆帯が巡り、断面「U」字状の工具による刻みがある。胴部は縦位の沈線で埋められ、部分的に梯子状の沈線で区画されているが単位は不明である。

7. 口縁部無文帯はU字状の粘土ひもの貼り付けにより4分割される。胴部も横に貼り付けた隆帯を口縁部と同じ個所で垂下させ4分割する。この間を縦位の沈線で埋めている。

8. 口縁部は無文で頸部の膨らみはソウメン状の粘土ひもを貼り付けた格子目文で、その上下は1本づつの隆帯で区画される。胴部は太い無節の縄文で埋める。

9. 背骨状を呈する隆帯により口縁部から胴部を縦に4分割している。頸部には2本の隆帯の間を粘土ひもを波状に貼り付けている。胴部は縦位の沈線で埋められている。

10. 口縁部は細いソウメン状の粘土ひもを格子目状に貼り付けた突起をもつ。しかしその単位は不

羽。細い粘土ひもを貼り付けた褶曲文は、やはり細い粘土ひもを梯子状に貼り付けることにより連結する。頸部には波状の隆帯があり、胴部は半載竹管による丁寧な縦位の半隆起線文により充填される。

11. 口縁部には細い粘土ひもを貼り付け褶曲文を描くが単位は不明である。褶曲文の下には細い隆帯を横に貼り付け垂下させる。胴部は縦位の沈線で埋められる。

12. 口縁部には4単位の突起があり、蛇行する2本の隆帯が対となって貼り付けられる。その間を隆帯が褶曲文を描き、隆帯貼付による梯子状モチーフが褶曲文をつなぐ。4つの突起から続く頸部には把手をもつが、その形状は不明。また頸部には横位2条の隆帯を貼り付けその間に押引施文がなされる。胴部は半載竹管工具による縦位の半隆起線文で充填されていると思われ、わずかに梯子状の沈線も見られる。

13. 口縁部を破損し、底部から胴下半部の土器である。

以上、9号住居址出土土器を個体ごと観察してきた。次に器形や文様などの比較を通じた分類により断片の時間内における、より近接した土器群の様相について考えてみたい。

資料の分類 図示できた13点の中に、栗久保B式土器(註1)として捉えられた一群がある。岡谷市栗久保遺跡(註2)をはじめ、花上寺遺跡(註3)報告書においても触れられてきた。本址出土土器は個体数が少なく、量的に充分な資料とは言い難いものの、まずは花上寺遺跡での分類に従い資料の整理をしてみたい。

A. 円筒形土器(第13図6, 8)

円筒形土器は、内湾しない口縁部が無文、器形は頸部で一段の膨らみを持ち、胴部にも膨らみ気味のもの(6)とストレートに急速に細くなるもの(8)がある。頸部の膨らみにはソウメン状粘土ひもを格子目状に貼り付ける。胴部は縦位に沈線が施され、梯子状沈線が見られるものと、無節の太い縄文で埋めるものがある。ただし、後者の類例は極めて乏しい。

B. 櫛形文土器(第12図2, 3, 4)

櫛形文土器は、器形は口縁部が一度外側に開いたあと内湾し、胴部中央またはやや上部でくびれ、底部に向かい一度膨らんでから収束する。4は口縁部に縦位の粘土ひもを貼り付けた口縁部文様帯。頸部の無文帯、胴部文様帯の櫛形文がある。特徴は胴部に櫛形文をもち以下は無文となる。

C. 4単位立体突起付土器(第14図10, 11, 12)

4単位立体突起付土器は、口縁部に4単位の先端三角形の立体的な突起をもつのが特徴である。器形は櫛形文土器と同じで、口縁部が一度外側に開いたあと内湾し、胴部中央またはやや上部でくびれ、底部に向かい一度膨らんでから収束する。文様構成は頸部を境にして上下2つに分けられると思われる。口縁部には粘土ひも貼り付による褶曲文が描かれ、4単位の把手が付く。頸部以下には無文帯がなく縦位沈線で埋められ梯子状の沈線が見られるところは櫛形文土器と異なる部分である。

D. 褶曲文キャリバー形土器

花上寺遺跡では「内湾した口縁部と壺状の胴部にそれを連結する頸部が円筒状に比較的長い器形である土器を指す。」(註4)としている。本址出土遺物の中には、これに該当するものは観察されない。

E. 曾利系土器(第13図7, 9)

口縁部は無文で、2または3本一組の縦位の隆帯が施文され4分割されていると思われる。胴部は縦位に沈線が施される。胴部に梯子状沈線はない。

F. A～E以外の土器 (第12図1, 5 第14図13)

本址出土の土器の中に上記4種類の分類のどれにも属さない1, 5, 13の土器がある。

5の土器は、胴部に梨久保B式の特徴である梯子状沈線が施されている一方、頸部のめがね状の把手やその上に付く突起は井戸尻式土器の文様を残す。しかし口縁部の無文帯に2条一対の隆帯を貼り付ける技法は曾利系土器に見られる文様であり、古い要素と新しい要素を含んだ土器である。

このように僅々に観察した土器を器形や文様の特徴で花上寺遺跡にならない分類を試みたが、梨久保B式土器のなかで、器形では円筒形土器(A)と、キャリパー形土器(B～D)に大別され、円筒形土器は器形に他とほとんど類似性をもたず、独自性が強い。キャリパー形土器はさらに3タイプに分けられるが、本址ではD、褶曲文キャリパー形土器が認められず他の2タイプが認められた。また、文様の特徴から見ると、各分類に分けられた土器も互いに影響をもちながらも独自のまとまりをもっているように思えることから、その共通性を見ると、櫛形文土器(4)と4単位立体突起付土器(10・11・12)では口縁部文様帯に褶曲文をもち、4単位立体突起付土器(10・11・12)と円筒形土器(5・6)では胴部に縦位沈線文を充填したり、把手や頸部にソウメン状の粘土ひもによる格子目文を施すなどの共通点が見られる。これに本来なら褶曲文キャリパー形土器が加わると頸部に無文帯あることで櫛形文土器と共通することが示されるのであろうが、本址からは出土していない。器形的に独自性の強い円筒形土器も、文様については他の土器との共通性が見出せるが、胴部に縄文を施し底部に勾かい急速に細くなる点は他に共通性を見ない。

9号住居址から出土した土器は、中期中葉末から後葉の初めの土器である。この土器と一緒に出土する土器は胴部に梯子状の沈線をもつものなど、これまで梨久保B式土器として扱われてきた土器群であることから、花上寺遺跡の報告に基づき観察した。結果的には多くの資料を扱った花上寺遺跡で示されている内容がここにもあてはまることがわかった。井戸尻Ⅲから梨久保Bへの型式変化を少しでも解明する一助になれば幸いである。

参 考 文 献

1972年『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会

1986年『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会

1996年『花上寺遺跡』岡谷市教育委員会

註1 宮坂 光昭 1972年『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会

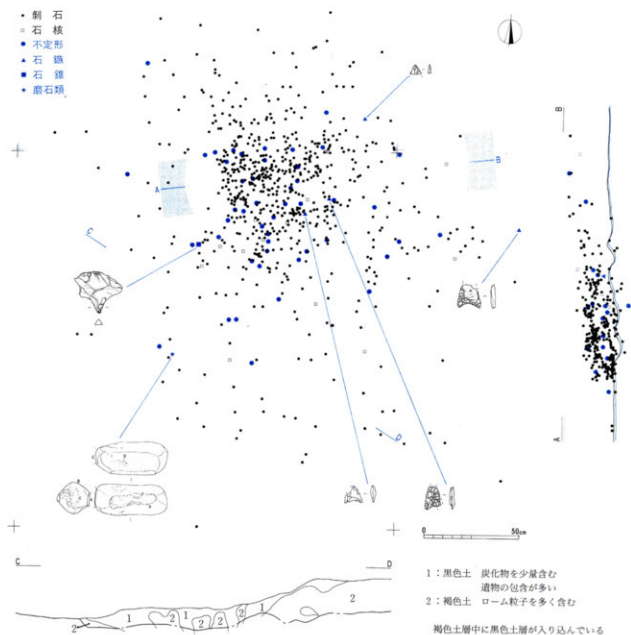
註2 唐木 幸雄 1986年『縄文時代中期後葉土器の分類と検討』『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会

註3 三上 徹也 1996年『花上寺遺跡における縄文時代中期後半の土器様相』『花上寺遺跡』岡谷市教育委員会

註4 註3と同じ

2. 禅海塚遺跡の黒耀石剥片集中地点の石器・石片の在り方

黒耀石の集中範囲は2m四方の広さで東西を長軸に広がり、F-43グリッド北東隅に集中する中心があり、その周囲に散在する。集中する部分のレベルはほぼ同じで、20cm前後の堆積である。その点数は、計測し、取り上げを行ったものだけで770点余りになり、その内訳は、チャート石材の1点を含む6点の石鏃、石錐類1点、二次調整あるいは、使用痕の可能性のあるものをくくった不定形石器（梨久保遺跡報告書の分類による）が53点、石核20点、石片690点、さらに持ち帰った土壌のウォーター・セパレーションによって1424点の微細剥片が加わる。これらは、従来の器種分類で扱ったが、分類を進めるうちに、



第37図 禅海塚遺跡黒耀石剥片集中地点 (1:20)

黒曜石剥片集中地点の場合この分類では情報が得られないことを改めて認識したが、資料操作や分析等の対応ができない中において、大別分類を進める上で気付いた点を述べたい。

1. この遺跡全域での傾向でもあるが、石核・剥片が比較的小形で、大ききでも6cm前後止まり、大半は4cm以下で、2cm前後のものが多い。パンプの発達したものやあらゆる方向から打撃を加えられた剝離痕を残すもの(打点の濃いものも含めて)、切断技法を盛んに取り入れた切断面を残すものが見られる。それとは反対に、両極打法を用いた石器(ピエス・エスキュー)や石核・剥片・碎片は全く見られない。石核・石片に自然面を大なり小なり残すものが多い。また、原石が存在しないのは、この集中地点のみである。

2. 不定形石器とした中に、スクレイパー一面に及ぶような調整を行った石器はなく、剥片の縁辺に、深さ2mm前後の調整を散発的に加えたものや、深さが2mmに満たず、調整痕なのか、使用痕なのか肉眼だけでは判別できない微細な剝離痕が残るもののみ存在する。中には、石鏃の素材剥片と言われる、切断面から成る三角形素材剥片(註)にわずかな調整を行ったものが3点、それに準ずるような形状を示すものが数点見られる。その断面を見ると、槌状剝離面によるものではなく、全て切断面となっている。付け加えて、石片の中にも切断技法による三角形素材剥片が見られる。図示できなかったが、それら3点の大きさは、長×幅×厚の順に3.0cm×2.7×1.7、2.7cm×2.9×1.0、2.4cm×2.2×1.0と比較的近いサイズである。

3. 出土した石鏃のうち、チャート石材の完形品1点以外は全て黒曜石材の欠損品である。その欠損状況は、先端のみ残存の1点を除くと、先端から胴部に及ぶものばかりで、

- ① 片面に先端から胴部に広く剝離が入り、その後も更に側縁を調整しようとした加工が一部にあるもの(図38-3)
- ② 先端から胴部にまで及ぶ階段状剝離を残すもの(図38-2)
- ③ 先端に階段状剝離を残し、一逆刺先端から側縁に向けて槌状剝離を残すもの(図38-5)
- ④ 先端から石材の節理面に沿って欠損するもの(図38-6)

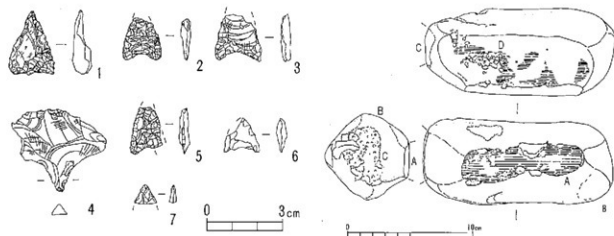
が認められた。①は製作時の失敗による未製品と思われるが、他は、製作時によるものか、使用後によるものか表裏両面ともに、押し剝離調整に覆われていて、むしろ石鏃の観察だけでは判断できない。

4. 黒曜石の中には色目の違いが明確な、特徴のある石材が見られる。それは、

- ① 赤味のある斑点や筋があるもの
- ② 透明度のある石に黒い筋のあるもの
- ③ 透明度のある石にもやのように黒が広がるもの
- ④ 茶色がかった透明度のあるもの
- ⑤ 黒い透明度のあるもの

の5グループである。それらは、石核、不定形、剥片、碎片、ウォーター・セパレーションによって検出された微細剥片の各々に見られ、さらには、①・②・④に対応する石鏃(図38-5・3・2・6)と⑤に対応する石鏃(図38-4)がある。また、より明確に判別できる①の石材は、遺跡内の他地点では数えられる程度の存在であり、この集中地点での出土傾向が強く、資料性として興味深い。それとは反対に遺跡内にまんべんなく見られる石材は④で、ウォーター・セパレーションによる検出でも最も多量である。

5. 台石や敲石となる石器の出土はない。先に述べた両極打法を用いた痕跡がない事とも関連するであろうか。



図No.	遺構区	層位	グリッド	No.	分類	細分類	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
1	黒曜石剥片集中地点		F43	606	石鏃	c h		25.0	13.0	6.0	2.5	
2	黒曜石剥片集中地点		F43	607	石鏃	o b	(15.4)	15.0	(3.9)	(0.7)		
3	黒曜石剥片集中地点	クロ	G43	9	石鏃	o b	(17.9)	(18.1)	(3.8)	(0.9)		
4	黒曜石剥片集中地点		F43	85	石鏃	o b		33.0	33.0	4.3	11.9	
5	黒曜石剥片集中地点	クロ	F43	108	石鏃	o b	(18.6)	(12.2)	4.0	(0.9)		
6	黒曜石剥片集中地点	クロ	F43	442	石鏃	o b	(13.6)	(13.9)	3.4	(0.4)		
7	黒曜石剥片集中地点	クロ	F42	27	石鏃	o b	—	—	—	(0.1)		
8	黒曜石剥片集中地点		F43	316	磨石類	盤	硯	150.5	64.1	61.6	1700.0	

第38図 神海塚遺跡黒曜石剥片集中地点出土石器実測図(1~7は1:1.5 8は1:3)

この集中地点がいかなる性格のものなのか、石鏃製作址となり得るのか、あるいはその未製品等の放棄場所なのか、単なるゴミ、すなわち製作過程で生じた大・小・微細な剥片、碎片、いわゆるくずの捨て場所としての廃棄場所なのか、いずれの可能性がより強く想定されるのかを垣間見ようと試みたが、この時点での見直しは立てられなかった。

ただ、積極的に考えるならば、三角形素材剥片らしき剥片が出土し、技法としては切断技法に限られ、つまり両極打法による石器・剥片が全くないという技術的な面や、石鏃以外の石器(石匙・スクレイパー等)が見られず、また、縄文時代早期の土器片が多く出土しているという事実は、足立氏の論文に沿う部分もあり、石鏃製作に関連する遺物集中地点と考えられなくもない。

いずれにしても他遺跡での集中地点の在り方を調べなくてはならないし、接合資料の有無や剥片の状況・属性の検討という気の遠くなるような作業を経なくては多くは語れない状況である。引き続き、同様の出土状況を分析する機会があるので、その折にさらに発展させたいと考えている。

註 足立 拓朗 1997 青山学院大学史学会『史友』29

その他の参考文献

- 阿部 朝衛・阿子島 香 1979 『聖山』
森山 公一 1978 「切削・折損による両面加工石器の技法とその変遷に関する一考察」
『中部高地の考古学』
高村 道雄 1978 「長野県飯田市石子原遺跡の再検討」『中部高地の考古学』
1983 『縄文文化の研究』
田中 英司 1977 「縄文時代における剥片石器の製作について」『埼玉考古16』
阿部 祥人 1982 「剝離痕による石鏃の分析一試論」『東京都埋蔵文化財センター研究論集1』

3. 禅海塚遺跡の押型文土器と沈線文土器

(1) 出土状況

禅海塚遺跡では、約520点の縄文時代早期に属する土器が出土したが、細片が多いためそのうち237点を図化した(第40図～54図)。縄文・燃糸文については、繊維の入らない所謂古式の燃糸文系土器の拾い出しを試みたが1片としてなかった。また、押型文系の彌沢・細久保・塞ノ神式のものも出土していない。

これらのほとんどは遺構外から出土した資料であるが、3基の小竪穴及び黒耀石剥片集中地点では、比較的多数の資料が出土している。

遺 構 外

調査区のほぼ全体から出土しているが、中央から西側に設定されたB～Dグリッドには約120点が出土するなど、比較的その辺りに集中する傾向がみられる(第39図)。これは、検出された当該期の遺構がB～Dグリッドに多い状況と一致するためであろう。

遺 構

縄文時代早期の遺構として認められるものは、小竪穴3P・12P・19P・24P・34P・37Pと黒耀石剥片集中地点である。その中の12P・24P・34Pは覆土中から比較的多数の資料が出土している。

また、黒耀石剥片集中地点では、黒耀石の剥片、石鏃、不定形石器等と同一の範囲に分布し、口縁部の破片が3点、ほか細片も含め35点の破片が出土した。

(2) 土器の分類と分析

土 器 の 分 類

本遺跡から出土した縄文時代早期の土器は、文様構成及び施文原体等から第1～3類に分類した。

第1類 押型文が施文されるものを一括した。



第39図 相馬塚38遺跡縄文時代早期土器のグリッド別出土状況図（1：300）

- a : 稻木式の文様要素をもつもの
口縁部の文様構成から、3種類に細分される
- b : くずれた山形文が施文されるもの
- c : 山形文が施文されるもの

第2類 沈線文土器群を一括した。

- a : 沈線の間に連続刺突を行うもの
- b : 本遺跡に特徴的な沈線のみで文様を描くもの
沈線の太さで2種類に細分される
- c : 沈線及び刺突で文様を構成するもの
- d : 条痕のみ施すもの

第3類 第1・2類とは趣を異にするもの、3点のみの出土である。
その他、底部の破片が3点出土している。

第1類土器 押型文土器 (第40区～第43区)

a(1): 口縁部文様帯に、沈線間の半隆起帯上に刺突を施す文様をもつもの。(1～3)

1の胴部にはおおぶりの山形文が縦位に全面に施文されている。山形の単位は2単位で、条数、原体の長さは縦位施文のためはつきりしない。胎土には鐵雜と、径2mm程度の半透明粒子を多く含んでいる。

2、3は同一個体で、口縁部と考えられ、沈線間の半隆起線上に刺突を加えている。2は内面に山形文を施文しており、口唇部直下の可能性が高い。

a(2): 口縁部に数条の押引文を施すもの。(4～5)

6は口縁部が外反する器型である。口唇に刻みを持ち、外面は5条以上の押引文が施文される。押引沈線間にはわずかに縦方向の山形文と思われるものがみられ、地文状に縦位山形文を施文していた可能性が考えられる。内面にはくずれた山形文を1帯施文しており、山形は3条まではつきり読み取れるが、4条以上ありそうである。一部分ではあるが、条痕状の調整と思われるものがみられる。4は2条の押引沈線文と横走る刺突文が施される。5は4条以上の押引沈線文を施文し、この破片は内面から器形を観察すると、きれいな弧を描かずに、角張った感じでわずかに屈曲する不自然さがある。

a(3): 口縁部に横位の押型文や、沈線文あるいは押引文を施すもの。(7～12)

器形は口縁がゆるく外反し、頸部はわずかにくびれて、胴部が少し膨らむと思われる。焼成が良好なものが多い。8は口唇部に刻みをもち、口縁部は3段の文様帯を構成する。上段に横位の山形文、中段に2条の押圧隆帯、下段には3段の押引文が施文される。胴部は縦位の山形文が間隔をあけて施文されるが、口縁部の押引文に消されることから、押引文より先に施されているようである。山形文の原体は、山をずらして刻むことによって生ずる空間を、菱形か三角形に刻んでいる。長さが3.6cmと長めの原体である。山形は2単位、条数は山をずらして刻むことによって生ずる菱形あるいは三角ベルトを含めて10条以上とみられる。9は口唇部に刻みをもち、横位及び縦位に山形文を施文し、縦位の山形文の上に幅広い沈線文を施す。内面にも山形文が施文される。7・11は、横位の山形文及び沈線文が施され、7は口縁部で内面にも山形文がみられる。山形文の原体は8と同様に菱形に刻まれている部分がある。10の口縁の縞状縦線は、成形の指圧直ではなく、繊維束状のものの押圧らしいが、施文原体は不明であ

る。その下位に2条の沈線文を施文する。内面には山形文を施文しており、8と同様に山形の原体は山をずらして刻むことによって生じた空間を、菱形あるいは楕円状に刻んでいる。また口唇部には刻みをもつ。12は、横位山形文の下位に縦位の山形文を施文し、縦位山形文の上に押引文を施している。内面にも山形文が施文される。

16~19はくずれた山形というよりはほとんど直線に近いので条線押型文と呼称しておく。直線ではなく、わずかにウェーブがかかる。出土地点が同じであること、胎土が似ていることから、同一個体であると思われる。

16は口縁部で内外に文様を施文する。外面は横位の条線押型文と、2本の沈線を施文しており、沈線の断面はカマボコ状を呈する。内面は横位の条線押型文がみられる。また、口唇部は押型文の原体で押圧を施す。17~19は胴部で縦位の条線押型文を施文する。押型の原体については18のように大きな破片にもかかわらず繰り返しみられないことから、18の破片の長さより推測して直径2cm以上の太い原体であると思われる。原体表面の細かな縦の線が残る(陰部)ことから、草葦類を原体としているかもしれない。内面調整はナデ調整であるが、19のように一部条線調整を施すものが確認される。

14・15は胴部破片で、a(1)~a(3)の識別は困難である。14は縦位にくずれた山形文を施文後、横位の押引文を施している。押引文は破片の上部と下部に見られるが、下部の原体は先が割れて条線をのこす施文具で引いており、上部の原体とは明らかに異なる。15は押引文間の半隆起帯に山形文を施文する。

b: くずれた山形文で、一見、波状文風の山形文。(20~26)

20~25はいずれも胴部の破片である。20は押型の原体を用いた条線調整後、横位のくずれた山形文を施文している。21・22は横位、縦位に施文する山形文で、内面はていねいな調整である。21は5と同様に内面から観察した器形に屈曲がみられる。22の内面には横位の山形文が施される。23~25は器面状態が悪く不明確であるが、縦位施文がみられる。

c: 山形文を施文するもの。(27~46)

細片が多く器形、文様構成は不明確であるが、縦位施文が主であり無文帯を挟むものがある。斜位施文の土器は胴部下半の可能性が高い。

山形の形状に3種類が認められる。

① 山形の原体が、山をずらして刻むことによって生じた三角形または菱形の空間に、円形あるいは楕円形に刻んでいるもの(27・28・30・32)で、ここでは「玉抱き山形文」と呼称する。刻んでいないもの(29・31)や、菱形状に刻んでいるもの(33)など形のバリエーションはあるが、まとめて玉抱き山形文と呼ぶこととする。

27は口縁部で、器面の内外に山形文を施文する。外面は口唇直下から縦位施文し、若干の無文帯を構成する。内面は口縁部上端に横位施文し、わずかに弱い条線状の調整の跡がみられる。胎土に含まれる繊維はごく微量である。

② 山形の角度が鋭角になるもの。(34~36・46)

46は胎土に繊維はみられず、霰母の微粉を含み、ていねいな器面調整である。

③ 山形の角度が鈍角になるもの。(37~45)

胎土に含まれる繊維は非常に微量である。38・39は器壁が7mmと他のものと比べ薄めであり、38は内外ともていねいな器面調整である。

第2類土器 沈線文土器 (第44圖~54圖)

a: 沈線間に連続する刺突をもつもの。(47~54)

器形は口縁部がやや外反する。いずれも繊維の混入が多い。47は小波状口縁になると思われ、焼成が良く、胎土に雲母の微粉がみられる。内面に条痕調整が施されている。文様構成は横位と縦位沈線間に刺突を持ち、横位沈線の下位に重鋸歯状の沈線文が施されている。48は幅5mmの横位沈線間に、円形竹管状施文具で斜め方向から刺突文を施す。沈線の施文具も同一のものと思われる。胴部には鋸歯状になると思われる沈線文が施されている。49・50は、棒状施文具による縦位の沈線が施され、沈線と同一施文具による刺突がなされる。51の施文具は細い竹管状と思われ、縦位沈線を施し、先端の割れた施文具で刺突がなされる。52はヘラ状施文具による横位沈線間に、同一施文具で斜め上方向からの刺突が行われる。焼成が良く、内面に条痕調整がみられる。53は半載竹管状施文具により横位に2条の刺突がされ、その下位に東山形状の沈線文を描いている。胎土には雲母が含まれている。54は小波状口縁となるようである。ヘラ状施文具による横位沈線文の下位に、同一施文具で数条の横位刺突文が施される。焼成が良く、胎土に赤色の大ききめな粒子が含まれ、内面はていねいな調整である。

b(1): 細い沈線で文様を施すもの。(55~74)

55は12Pからの出土である。器形は口縁がわずかに外反し、小波状口縁となるようである。先の尖った施文具による幅1mm以下の短い沈線と、先端が細かく割れて撥痕状の極細の条線を残す幅3mmの棒状ないしは半載竹管状施文具による2種類の原体で斜格子目状の沈線文を描く。器面は内外面ともに条痕調整されている。56・57は同一個体であると思われる。

58~65・71は単沈線による斜格子目状の沈線文が施されている。施文具は棒状施文具を用いると思われるが、59は鋭い線を描くことから、先端の尖った施文具によると思われる。58・59の口唇部は斜めの刻みがある。器面調整はいずれも内外面に条痕調整がなされており、また胎土には繊維を含んでいる。65は文様の下位部分にあたると思われる。焼成が良く、外面はていねいな調整である。71の沈線は、1本線と2本線で描かれている。施文具が異なるか、あるいは半載竹管状施文具の使い分けとも考えられる。

66~68は複数単位で斜格子目状等の沈線文を描く。66・69は3本単位の平行沈線で斜格子目状に施文する。70・72・73は細片で詳細は不明であるが、斜格子目以外の文様を描いている。70は器壁が厚く、焼成がよい。外面はていねいな調整である。

b(2): やや幅広い沈線で文様を施すもの。(75~92)

器形は口縁部がやや外反するものと、直線的に立ち上がるものがある。内外面に条痕調整を残すものが多く、胎土への繊維の混入も見られる。75~77は鋸歯状の沈線文を描く。75・76は口縁部破片で、口縁端部は平坦ではなく不規則な凹凸がある。先端がささくれた幅4mm程度のヘラ状施文具による浅い沈線で施文し、77は棒状施文具による2本の平行沈線で施文している。78・79・81~84・86・90は、斜格子目状の沈線文を描く。78は縦方向に条痕を施した後、斜格子目状に沈線文を描いていると思われるが、磨耗が激しく明確でない。内面はていねいな調整である。82は器壁が12mmと厚めであり、沈線の中にわずかに条線を残している。84は器壁が5mmと薄く、焼成が良い。先端が割れて沈線の中に明確な条線を残す施文具で、浅く施文している。86は細い半載竹管状の施文具により斜格子目状の沈線文を施す。外面には粗く条痕調整がされているようである。

80・87・91・92は斜め方向に、85は縦位に沈線文を施す。80は沈線の中に条線を残し、胎土には罌母を多く含んでいる。91は浅い2本の平行沈線で文様を描き、胎土に纖維を特に多く含んでいる。88は斜め方向と縦位の沈線を施し、外面はていねいな調整を行う。89は2本の平行沈線により曲線状に描いている。

c：沈線と刺突を施すものを一括した。便宜上、刺突のみのもも含めている。(93～112)

器形は口縁部がやや外反するものと、直線的に立ち上がるものがある。内外面に条痕調整が残るものが多く、胎土には纖維を含んでいる。93～95は先端が割れた施文具により浅い条線を残す沈線で鋸歯状の文様を描き、刺突文を施す。93・94の胎土には罌母が多く含まれている。94・95はともに沈線と刺突に同一施文具を使用している。

96は刺突文をもち、斜格子目状の沈線文を描くと思われる。沈線は幅4mm弱の施文具で浅く施文するものと、幅2mmの施文具でやや深めに施文するものと2種類がみられる。外面はナゲ調整であるが、内面は条痕調整である。

97・98・100・103～107は、斜め方向の沈線文を描き、刺突文を施す。97・98は先端が割れた施文具により沈線と刺突を施している。器壁とともに5mm弱と薄めである。100は2本の平行沈線で文様を描き、無文部分に同一施文具による刺突文を施す。101・102は沈線の下位に刺突を横位に連続して2段施文している。101は3本の平行沈線文を斜めに施文した下位に、沈線文と同一施文具により刺突文が施され、胎土には纖維を多く含んでいる。102は曲線状の沈線文の下位に刺突文を施している。106の刺突文は、先の割れた棒状施文具によるものと思われる。

108～112は刺突文のみのも。108は口縁部で上端に連続した刺突が施されている。施文具は櫛歯状のものと考えられる。109は二又あるいは2本棒の施文具による2穴の刺突を横位に施文し、110は竹管状施文具による円形の刺突を1条横位に施している。111は刺突文を横位に3条以上施文する。胎土や刺突の形状が101と似ていることから同一個体であると思われる。112は横位に1条の沈線の下位に、櫛歯状の施文具によりわずかに引いた刺突を行う。

d：条痕のみのもを一括した。(113～205)

口縁部破片があり、あるいは他の文様を併用されない一群の存在も考えられるのでd種にまとめたが、第2類a～cの胴部の破片が含まれていると思われる。器形は口縁部がやや外反するものと、内湾するもの(114)があり、波状口縁と思われるもの(116)も若干ある。胎土は纖維を含んでおり、また罌母を含んでいることも本類の特徴である。条痕は内外面に施されるもの(113～140・176)、外面のみに施されるもの(141～175・177)があり、横方向～斜め方向に施す。中には条痕調整の後ナゲ調整しているものがみられる(183～205)。

197は条痕調整後、縦方向に間隔をあけて、ヘラ状のものでけずっているようである。胎土もほかのものに比べると相違がみられ、砂粒をあまり含まず、しっかりとした焼成である。183が出土地点の同じこと、胎土・成形が同じであることから同一個体と思われる。

204・205は条痕調整後、板状の工具による擦痕状調整を行っている。

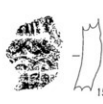
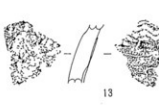
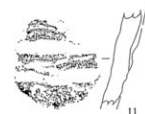
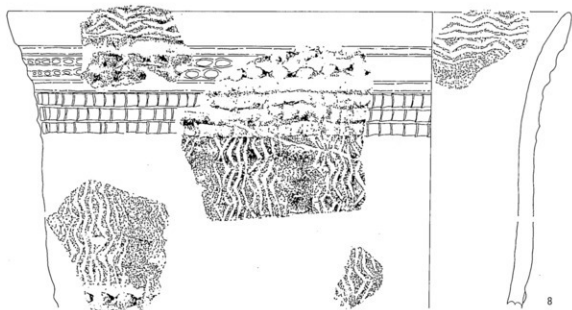
第3類(第53図)

3点の出土である。胎土はいずれも纖維を含んでおり、208は罌母が多くみられる。



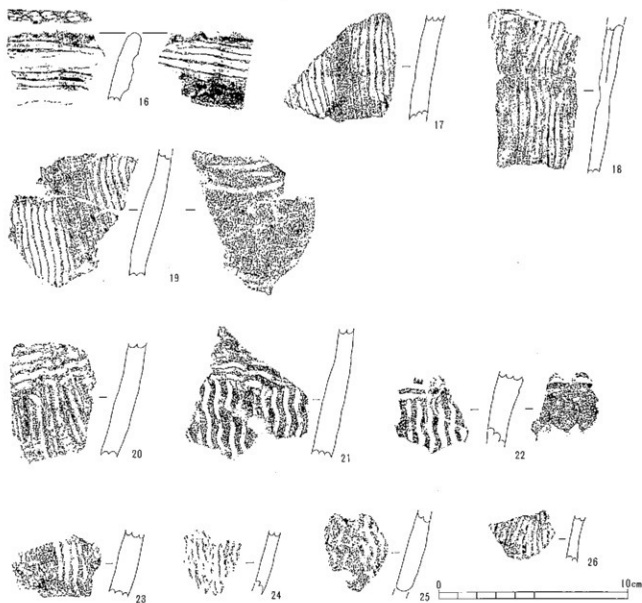
№	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	繊維	備考
1	E14	頸~胴	1a(1)	横位の半隆起線上に連続する刺突 胴部には縦位山形文	—	半透明粒子多い	有	山形は2単位
2	C22	口縁付近	1a(1)	横位の半隆起線上に連続する刺突	横位山形文	半透明粒子	有	№3と同一個体
3	C40	口縁付近	1a(1)	横位の半隆起線上に連続する刺突	ナデ	半透明粒子	有	№2と同一個体
4	Ct19	口縁付近	1a(2)	横位に連続する刺突 横位押し比線文	ナデ	乳白色粒子	微	
5	A42	口縁付近	1a(2)	押し比線文が4条	ナデ	半透明粒子	微	
6	D29	口縁	1a(2)	口唇に刻み 押し比線文が5条	一部条痕	乳白色粒子	微	
7	C18	口縁	1a(3)	横位山形文 横位比線文	横位のくずれた山形文 横位山形文	乳白色・赤色粒子	微	

第40図 禅海塚遺跡縄文時代早期土器（第1類）拓影図（1：2）



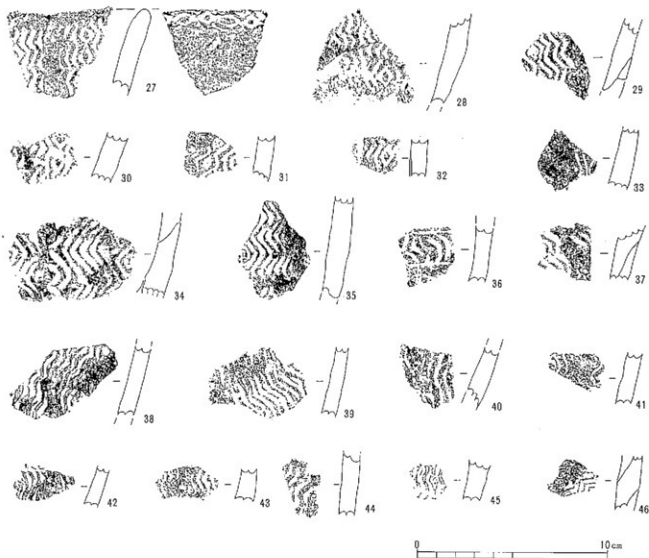
No.	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	繊維	備考
8	B38	口縁一帯	1a(3)	口縁部は横位山形文 押圧縹帯文 押引比 線文 胴部に縦位山形文	ナゲ	鷲母	微	山形は2単位、10条、3.6cm
9	Cx30	口縁	1a(3)	口唇に刻み 横位山形文 頸部から肩部は縦位山形文の上に比線	ナゲ	半透明粒子	微	
10	F43	口縁	1a(3)	口唇に刻み 横位比線文 上部押圧の施文原形は不明	横位山形文	半透明粒子	微	
11	—	口縁付近	1a(3)	横位のくずれた山形文 横位比線文	ナゲ 一部磨痕	半透明・乳白色粒子	微	
12	D29	頸	1a(3)	横位山形文 押引比線文が縦位山形文に重なる	横位山形文	ナゲ 半透明・乳白色粒子	微	
13	D20	口縁付近	1	ハクラク	横位山形文	半透明粒子	微	
14	A34	胴	1	縦位のくずれた山形文の上から横位押引比線文	ナゲ	半透明粒子	微	
15	D37	胴	1	押引比線文間の幅広い縹帯上に山形文	ナゲ	半透明粒子多い	微	

第41図 神海塚遺跡縄文時代早期土器（第1類）拓影図（1：2）



No.	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	繊維	備考
16	G40	口縁	1a(3)	口唇部に原付押圧 横位の条線押壓文の上に沈線文	横位条線押壓文	細砂粒	少	
17	G40	胴	1a(3)	縦位条線押壓文 無文帯あり	ナデ	半透明・乳白色粒子多い	少	
18	G40	胴	1a(3)	縦位条線押壓文 無文帯あり	ナデ	半透明・乳白色粒子多い	少	
19	F42	胴	1a(3)	縦位条線押壓文 無文帯あり	ナデ 上部に条底	半透明粒子	少	
20	—	胴	1b	横位のくずれた山形文 原体による条底	ナデ	乳白色粒子	少	
21	C120	胴	1b	横位のくずれた山形文の下位に縦位山形文	ていねいなナデ	糖形微粉 半透明・乳白色粒子	少	
22	C121	口縁付近	1b	横位のくずれた山形文の下位に縦位山形文	山形文 ナデ	半透明・乳白色粒子	微	
23	C143	胴	1b	くずれた山形文	ナデ	乳白色粒子	微	
24	C3	胴	1b	くずれた山形文	ナデ	半透明粒子	微	
25	C23	胴	1b	縦位山形文	ナデ	乳白色粒子多い	微	
26	C126	胴	1b	くずれた山形文?	ナデ	半透明粒子	無	

第12図 御海塚遺跡縄文時代早期土器(第1類)拓影図(1:2)



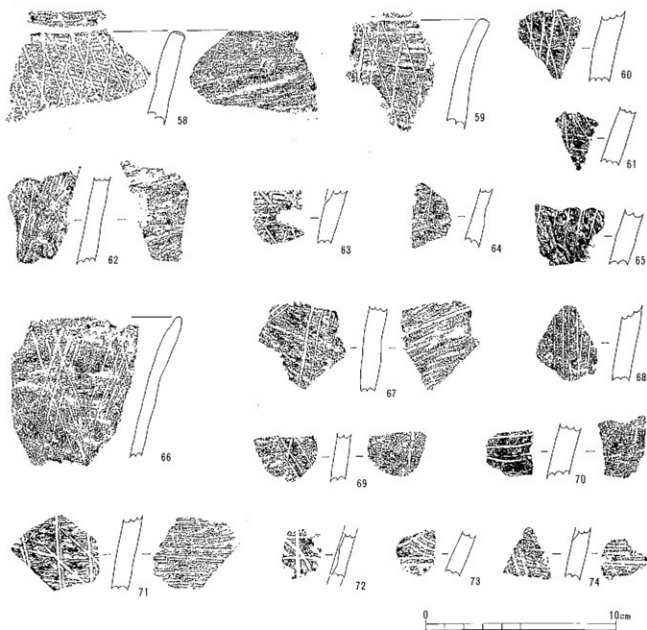
No.	グリッド	部位	分類	外観文様および調整	内面調整	胎土	繊維	備考
27	F41	口縁	1c	縦位の玉抱き山形文	弱い垂直調整後横位山形文	半透明・乳白色粒子	微	
28	B31	胴	1c	縦位の玉抱き山形文	ナデ	半透明粒子	微	
29	D15	胴	1c	縦位の玉抱き山形文	ナデ	乳白色粒子	微	
30	—	胴	1c	縦位の玉抱き山形文	ナデ	乳白色粒子	微	
31	D13	胴	1c	縦位の玉抱き山形文	無文帯あり ナデ	乳白色粒子	微	
32	—	胴	1c	縦位の玉抱き山形文	ナデ	半透明粒子	微	
33	B26	胴	1c	縦位の玉抱き山形文	無文帯あり ナデ	窯母 半透明粒子	微	
34	D28	胴	1c	縦位山形文	凹凸	半透明・乳白色粒子多い	少	
35	C29	胴	1c	縦位山形文	ナデ	窯母微粉 乳白色粒子	少	
36	C41	胴	1c	縦位山形文	ナデ	半透明粒子	少	
37	D14	胴	1c	斜位山形文	ナデ	窯母 半透明粒子	少	
38	—	胴	1c	斜位山形文	ナデ	乳白色粒子	微	
39	D22	胴	1c	斜位山形文	ナデ	半透明粒子	微	
40	F29	胴	1c	縦位山形文	ナデ	半透明粒子	少	
41	D20	胴	1c	縦位山形文	無文帯あり ナデ	乳白色の大粒子	微	
42	F37	胴	1c	縦位山形文	ナデ	乳白色粒子	微	
43	B26	胴	1c	縦位山形文	ナデ	半透明粒子多い	微	
44	D23	胴	1c	縦位山形文	ナデ	半透明粒子	微	
45	F41	胴	1c	縦位山形文	ナデ	半透明粒子	微	
46	C18	胴	1c	縦位山形文	無文帯あり ナデ	窯母 乳白色粒子	微	

第43図 御海塚遺跡縄文時代早期土器（第1類）拓影図（1：2）



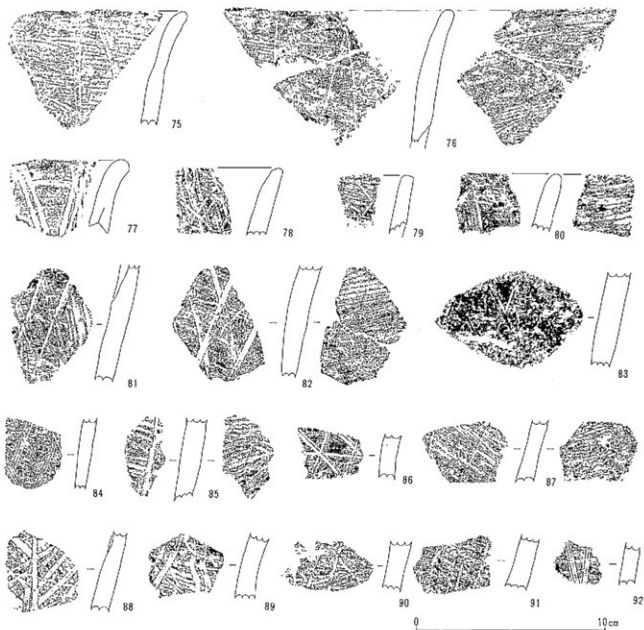
No.	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	繊維	備考
47	B17	口縁	2a	縦位と横位の沈線文間に連続する刺突 重削盤	糸痕	製母 半透明粒子	合	小波状口縁か
48	B20・F30	口縁	2a	横位沈線文間に円形刺突 その下位に重削盤状の沈線文 地文に糸痕	粗いナデ	半透明粒子	多	
49	—	胴	2a	縦位沈線文間に連続する刺突	ナデ	半透明粒子	合	
50	B15	胴	2a	縦位沈線文間に連続する刺突	ナデ	半透明粒子	合	
51	B23	胴	2a	斜方向の平行沈線文と連続する刺突	ナデ	半透明粒子	多	
52	C27	胴	2a	横位沈線文間に連続する刺突	糸痕	砂粒	合	
53	D23	胴	2a	横方向に連続する刺突 その下位に重削盤状の沈線文	ナデ	製母微粉多い	多	
54	Ct26	口縁	2a	横位沈線文 その下位に数本の重削盤	ていねいなナデ	赤色粒子	合	小波状口縁
55	B26	口～胴	2b(1)	斜格子目状の沈線文 糸痕調整	糸痕	乳白色粒子	合	
56	Ct26	胴	2b(1)	斜格子目状の沈線文 糸痕調整	糸痕	乳白色粒子	合	
57	B26	胴	2b(1)	斜格子目状の沈線文	糸痕	乳白色粒子	合	

第44図 御前塚遺跡縄文時代早期土器（第2類）拓影図（1：2）



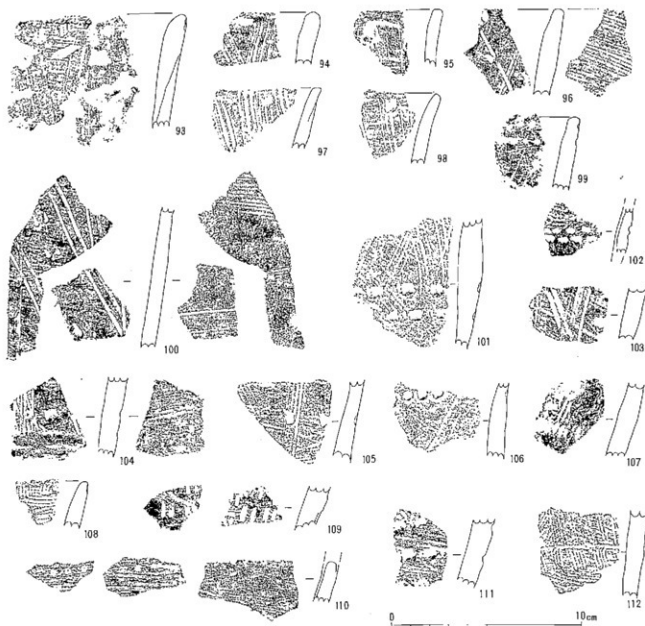
No	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	焼成	備考
58	A42	口縁	2b(1)	口唇に刻み 斜格子目状の沈線文	条痕調整	半透明・赤色粒子	合	小波状口縁
59	B31	口縁	2b(1)	口唇に刻み 斜格子目状の沈線文	条痕調整	ナデ	半透明粒子	合
60	A42	肩	2b(1)	斜格子目状の沈線文	条痕	半透明・赤色粒子	多	
61	C16	肩	2b(1)	斜格子目状の沈線文 条痕調整	一	半透明・赤色粒子	少	
62	Ck27	胴	2b(1)	斜格子目状の沈線文 条痕調整	条痕	乳白色粒子	少	
63	B17	胴	2b(1)	斜格子目状の沈線文 条痕調整	ナデ	乳白色粒子	合	
64	Ck30	肩	2b(1)	斜格子目状の沈線文	条痕	半透明・赤色粒子	少	
65	A30	肩下	2b(1)	縦位沈線文 条痕後ナデ	ナデ	少粒	多	
66	B53	口縁	2b(1)	日本で1単位の高格子目状の沈線文	ていねいなナデ	白色・赤色粒子	少	
67	C22	胴	2b(1)	斜方向の沈線文 条痕調整	条痕	白色粒子多い	少	
68	D22	肩	2b(1)	縦位沈線文	炭化物付曇	半透明粒子	曇母	無
69	C25	胴	2b(1)	斜格子目状の沈線文	ナデ	半透明・乳白色粒子	少	
70	C25	胴	2b(1)	横位沈線文 ナデ	ていねいなナデ	細砂粒	少	
71	K14	胴	2b(1)	斜格子目状の沈線文 条痕調整	条痕	乳白色粒子	合	
72	Ck33	胴	2b(1)	直交する沈線文と斜方向の沈線文	一	半透明粒子	合	
73	D29	胴	2b(1)	平行沈線による不規則な文様	条痕	半透明粒子	合	
74	C22	胴	2b(1)	斜方向の沈線文	条痕	半透明粒子	合	

第45図 瀬海環濠跡縄文時代早期土器(第2類) 拓影図(1:2)



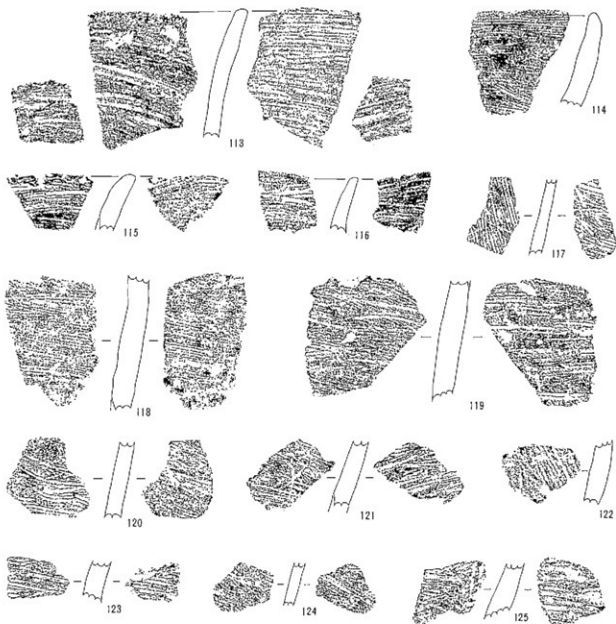
No	グロッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	施装	備考
75	F41	口縁	2b(2)	縦條状の浅い沈線文	糸痕調整	糸痕	半透明粒子	少
76	F37	口縁	2b(2)	縦條状の浅い沈線文	糸痕調整	糸痕	半透明粒子	少
77	C23	口縁	2b(2)	縦條状の平行沈線文	糸痕調整	糸痕	半透明粒子	食
78	—	口縁	2b(2)	斜格子目状の沈線文	糸痕調整?	ナダ	乳白色粒子	多
79	C80	口縁	2b(2)	斜格子目状の沈線文	糸痕調整	糸痕	乳白色粒子	少
80	C31	口縁	2b(2)	斜方向の沈線文	糸痕調整	糸痕	雲母多い 乳白色粒子	少
81	D29	腹	2b(2)	斜格子目状の幅広い沈線文	糸痕調整	ナダ	半透明	食
82	C23	腹	2b(2)	斜格子目状の幅広い沈線文	糸痕調整	糸痕	半透明・赤色粒子	食
83	D30	腹	2b(2)	斜格子目状の沈線文	糸痕調整	糸痕	半透明粒子多い	食
84	—	腹	2b(2)	斜格子目状の沈線文	糸痕調整	ナダ	半透明粒子	食
85	B23	腹	2b(2)	縦立沈線文	糸痕調整	糸痕	乳白色・赤色粒子	少
86	A43	腹	2b(2)	斜格子目状の沈線文	糸痕調整?	ナダ	雲母 乳白色粒子	食
87	F142	腹	2b(2)	斜方向の浅い沈線文	糸痕調整	糸痕	半透明・乳白色粒子	食
88	D29	腹	2b(2)	斜方向と縦位の沈線文	糸痕調整	糸痕	半透明	少
89	C29	腹	2b(2)	2本の平行沈線で不規則な文様	糸痕調整	ナダ	半透明粒子	食
90	C122	腹	2b(2)	斜格子目状の浅い沈線文	糸痕調整	糸痕	半透明粒子	食
91	D23	腹	2b(2)	斜方向の浅い沈線文	糸痕調整	糸痕?	乳白色粒子	多
92	B14	腹	2b(2)	斜方向の沈線文	糸痕調整	ナダ	半透明粒子	食

第46図 御海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類) 拓影図(1:2)



No.	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	表面調整	胎土	組織	備考
93	C17	口縁	2c	扇歯状の浅い沈線文と刺突	糸痕調整	糸痕	発色多い	半透明粒子 少
94	A15	口縁	2c	捲子目状の沈線文 同一工具による刺突	糸痕	糸痕	発色多い	黄 少
95	B23	口縁	2c	縦位の浅い沈線文と刺突	糸痕調整	糸痕	半透明粒子	黄 少
96	C26	口縁	2c	斜位目状の沈線文と刺突	糸痕調整	糸痕	乳白色多い・赤色粒子	黄 少
97	F121	口縁	2c	斜位沈線文と刺突	糸痕調整	糸痕	乳白色粒子	黄 少
98	B26	口縁	2c	斜方位の沈線文と刺突	糸痕調整	糸痕	黄色粒子多い	黄 少?
99	D27	口縁	2c	横位に連続する円形刺突その下に扇歯状の沈線文	ナデ	糸痕	半透明粒子	黄 多
100	B23・F41	胴	2c	交差する2本の平行沈線 同一工具による刺突	糸痕	糸痕	半透明粒子	黄 少
101	F37	胴	2c	斜方位に交差する3本の平行沈線 その下に横位2条の刺突	糸痕	糸痕	半透明粒子	黄 多
102	B24	胴	2c	不規則な沈線 その下に横位2条の刺突	ナデ	糸痕	半透明粒子	黄 少
103	B23	胴	2c	交差する沈線と刺突	糸痕	糸痕	乳白色粒子	黄 少
104	C29	胴	2c	斜方位に交差する沈線文 沈線間に刺突	糸痕	糸痕	半透明粒子多い	黄 少
105	D14	胴	2c	平行沈線 沈線上に刺突	糸痕後ナデ	ナデ	半透明粒子	黄 少
106	B17	胴	2c	斜方位の沈線文 横位の刺突	糸痕	糸痕	乳白色・赤色粒子	黄 少
107	C31	胴	2c	斜方位の沈線文と同一工具による刺突	糸痕	糸痕	半透明粒子	黄 少
108	—	口縁	2c	横位刺突 糸痕調整	ナデ	糸痕	半透明粒子	黄 少
109	—	胴	2c	横位に不規則な刺突	糸痕	糸痕	半透明粒子	黄 少
110	C42	胴	2c	横位に連続する円形刺突	糸痕調整	糸痕	発色 半透明粒子	黄 多
111	F33	胴	2c	横位に連続する刺突	糸痕調整	ナデ	乳白色粒子	黄 多
112	C42	胴	2c	横位に連続するわずかに押し引いた刺突 糸痕調整	糸痕	糸痕	半透明粒子	黄 多

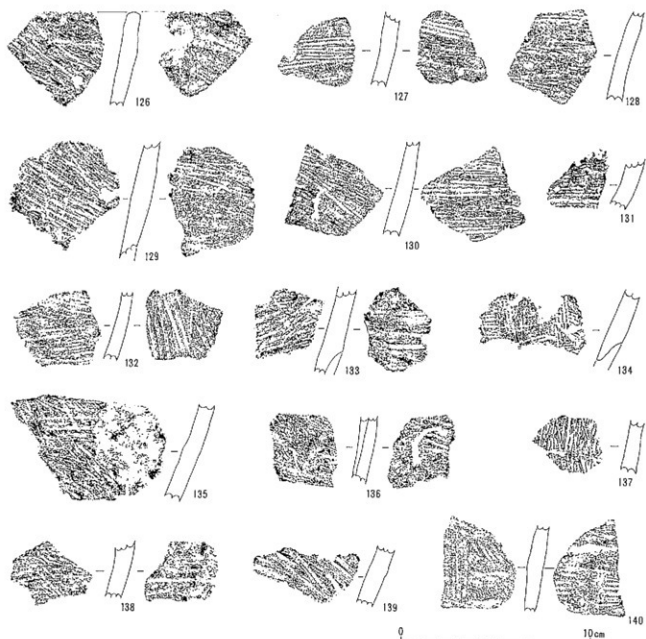
第47図 神海原遺跡縄文時代早期土器(第2類)拓影図(1:2)



0 10cm

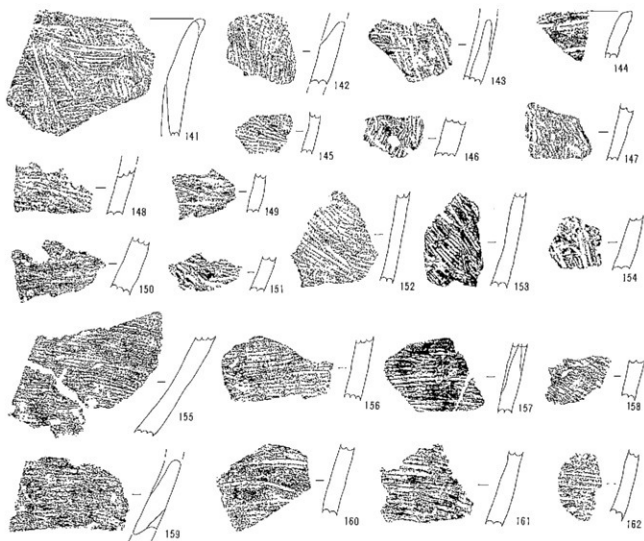
№	グリッド	部位	分類	外壁文様および調整	内面調整	胎土	繊維	備考
113	A27	口縁	2d	条痕 ナナメ	条痕 ヨコ	罌母多い	含	
114	E14	口縁	2d	条痕 ヨコ・ナナメ	条痕 下位は浅い	罌母 半透明粒子	含	
115	B17	口縁	2d	条痕 ヨコ・ナナメ	条痕 ヨコ	乳白色・新包粉	含	
116	C20	口縁	2d	条痕 ヨコ・ナナメ	条痕 ヨコ	乳白色粒子 罌母微粉	少	小波状口縁
117	Ft41	胴	2d	条痕 ナナメ	条痕 ナナメ	乳白色粒子	少	
118	D20	胴	2d	条痕 ヨコ	条痕 ヨコ	罌母多い	含	
119	E13	胴	2d	条痕 ヨコ	条痕 ヨコ	罌母多い	含	
120	—	胴	2d	条痕 ナナメ	条痕 ナナメ	乳白色粒子	含	
121	Ct20	胴	2d	条痕 ヨコ	条痕 ヨコ	罌母微粉 乳白色粒子	多	
122	C9	胴	2d	条痕 ナナメ	条痕 ヨコ	罌母微粉 半透明粒子	含	
123	C11	胴	2d	条痕 ナナメ	条痕 ヨコ	罌母	少	
124	C21	胴	2d	条痕 ナナメ	条痕 ナナメ	半透明・赤色粒子	含	
125	Ft42	胴	2d	条痕 ヨコ	条痕 ヨコ	罌母微粉 半透明粒子	含	

第48区 御海塚遺跡縄文時代早期土器（第2類）拓影図（1：2）



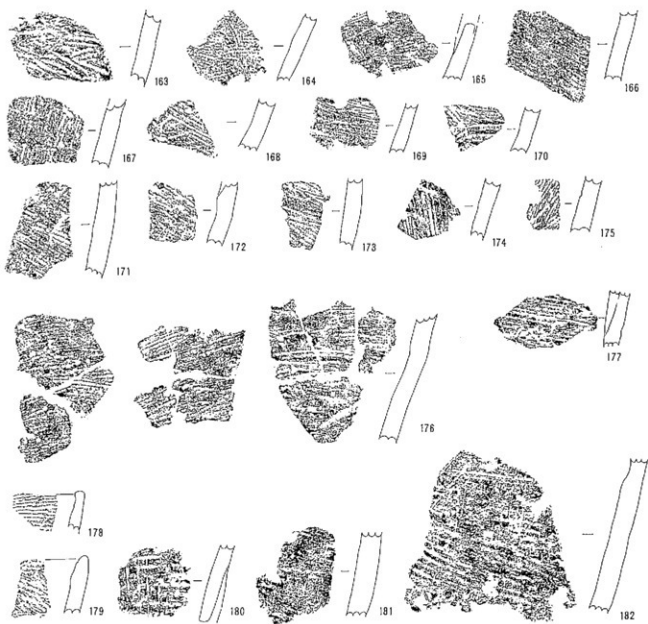
No	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	繊維	備考
126	B23	口縁	2 d	条痕 ナナメ	条痕 ナナメ	雲母多い		含
127	C43	胴	2 d	条痕 ヨコ	条痕 ナナメ	雲母微粉 乳白色粒子		含
128	C23	胴	2 d	条痕 ヨコ	条痕 浅い	乳白色粒子		含
129	C437	胴	2 d	条痕 ナナメ	条痕 ヨコ→ナナメ	雲母 乳白色粒子		含
130	—	胴	2 d	条痕 ナナメ	条痕 ヨコ	乳白色粒子		含
131	C42	胴	2 d	条痕 ヨコ	条痕 ヨコ	雲母微粉 乳白色粒子		含
132	D60	胴	2 d	条痕 ヨコ→ナナメ	条痕 タテ	細砂粒		含
133	F43	胴	2 d	条痕 ナナメ	条痕 ヨコ	雲母微粉 乳白色粒子		含
134	D28	胴	2 d	条痕 ヨコ→タテ	条痕 ヨコ	半透明粒子		多
135	C29	胴	2 d	条痕 ヨコ→ナナメ	条痕	雲母 半透明粒子多い		含
136	D60	胴	2 d	条痕 ナナメ	条痕 ヨコ	雲母多い 半透明粒子		含
137	—	胴	2 d	条痕 タテ	条痕 ヨコ	乳白色粒子		含
138	B26	胴	2 d	条痕 ヨコ→ナナメ	条痕	雲母 半透明粒子		含
139	B37	胴	2 d	条痕 ヨコ→ナナメ	条痕	乳白色粒子		少
140	C27	胴	2 d	条痕 タテ	条痕	雲母多い		含

第49図 神海塚遺跡縄文時代早期土器(第2類) 拓影図(1:2)



No	グリッド	形位	分類	外面文様および調査	内面構造	胎土	堆積 備考
141	D29	口縁	2d	糸痕 不規則	—	雲母 半透明粒子	含
142	F141	胴	2d	糸痕 ココクナ	ナゲ 炭化物付着	雲母	少
143	C120	胴	2d	糸痕 不規則	ナゲ	雲母 半透明粒子	含
144	E16	口縁	2d	糸痕 ココ	ナゲ	雲母多い	含
145	A27	胴	2d	糸痕 ココ→ナナメ	ナゲ	雲母多い	含
146	B26	胴	2d	糸痕 ナナメ	ナゲ	乳白色粒子	含
147	F141	胴	2d	糸痕 ナナメ	ナゲ	雲母多い	含
148	C20	胴	2d	糸痕 ナナメ→ココ	ナゲ	雲母炭粉	含
149	—	胴	2d	糸痕 ココ→ナナメ	ナゲ	雲母炭粉 半透明粒子	含
150	C31	胴	2d	糸痕 ココ	—	雲母 半透明粒子	含
151	B26	胴	2c	糸痕 不規則	ナゲ	細砂粒	含
152	D14	胴	2c	糸痕 ナナメ	散在	半透明粒子	含
153	—	胴	2c	糸痕 ナナメ	ナゲ	雲母炭粉 半透明粒子	含
154	C31	胴	2c	糸痕 ココ→ダテ	ナゲ	半透明、赤色粒子	含
155	C42・43	胴下	2c	糸痕 ココ	ナゲ	雲母 半透明粒子	含
156	C42	胴	2c	糸痕 ココ	糸痕浅い	雲母 半透明粒子	含
157	—	胴	2c	糸痕 ココ	—	半透明粒子多い	含
158	D14	胴	2d	糸痕 ココ	ナゲ	雲母 半透明粒子	含
159	B23	胴	2d	糸痕 ココ	—	雲母 乳白色粒子	多
160	C26	胴	2d	糸痕 ココ	ナゲ	半透明粒子	含
161	F141	胴	2d	糸痕 ココ	—	雲母炭粉 半透明、赤色粒子	含
162	C26	胴	2d	糸痕 ココ	—	雲母 半透明粒子	含

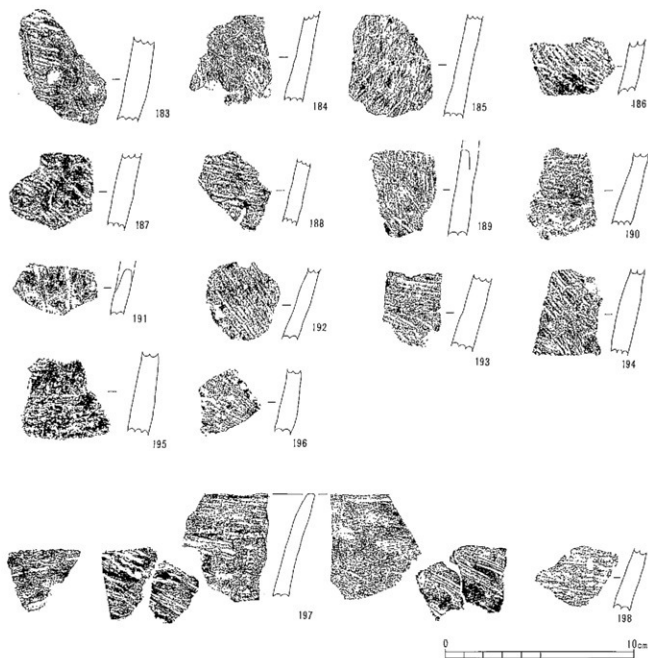
第50図 揮海塚遺跡縄文時代早期土壌 (第2類) 拓影図 (1:2)



0 10cm

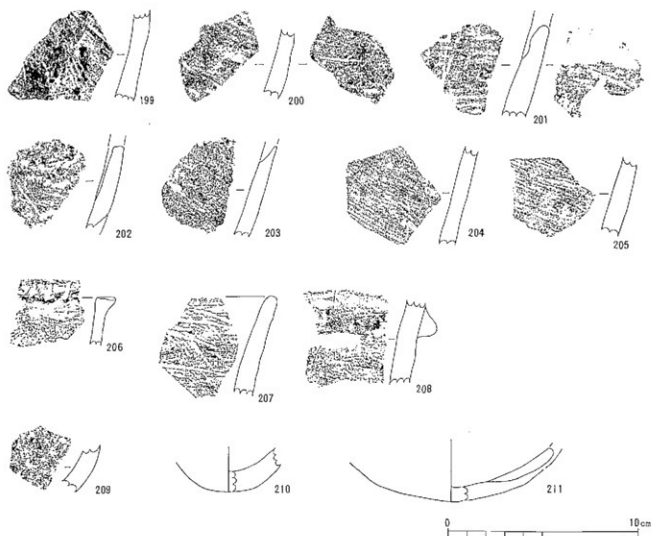
No.	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	繊維 備考
163	Ct20	胴	2d	条痕 ヨコナナメ	ナゲ	半透明粒子	含有
164	B27	胴	2d	条痕 ヨコナナメ	—	雲母微粉 半透明粒子	含有
165	D20	胴	2d	条痕 ヨコナナメ	ナゲ	乳白色粒子	含有
166	B11	胴	2d	条痕 ナナメ	ナゲ	半透明粒子	含有
167	—	胴	2d	条痕 タテ	ナゲ	雲母 半透明粒子	含有
168	B31	胴	2d	条痕 ナナメ	ナゲ	乳白色・赤色粒子	含有
169	—	胴	2d	条痕 ヨコ	ナゲ	乳白色粒子	含有
170	Ct26	胴	2d	条痕 不規則	ナゲ	赤色粒子 少ない	含有
171	—	胴	2d	条痕 ヨコ	ナゲ	雲母 半透明粒子	少量
172	C9	胴	2d	条痕 ナナメ	—	雲母微粉 半透明粒子	含有
173	D23	胴	2d	条痕 ナナメ	ナゲ	雲母 半透明粒子	多量
174	B17	胴	2d	条痕 タテ	ナゲ	乳白色・赤色粒子	含有
175	B58	胴	2d	条痕 タテ ナナメ	ナゲ	乳白色粒子	微含有
176	Ct42	胴	2d	条痕 ヨコ	条痕後ナゲ?	雲母 半透明粒子	含有
177	B20	胴	2d	条痕 ヨコ	—	乳白色粒子	含有
178	F43	口縁	2d	条痕 ヨコ	—	半透明粒子	含有
179	G43	口縁	2d	条痕 ヨコナナメ	—	雲母 半透明粒子	含有
180	F43	胴	2d	条痕 ヨコナゲ	—	半透明粒子	含有
181	F43	胴	2d	条痕	ナゲ	雲母微粉 半透明粒子	含有
182	F43	胴	2d	条痕後一部ナゲである	ナゲ	雲母 半透明粒子	含有

第51図 御海塚6遺跡縄文時代早期土器(第2群)拓影図(1:2)



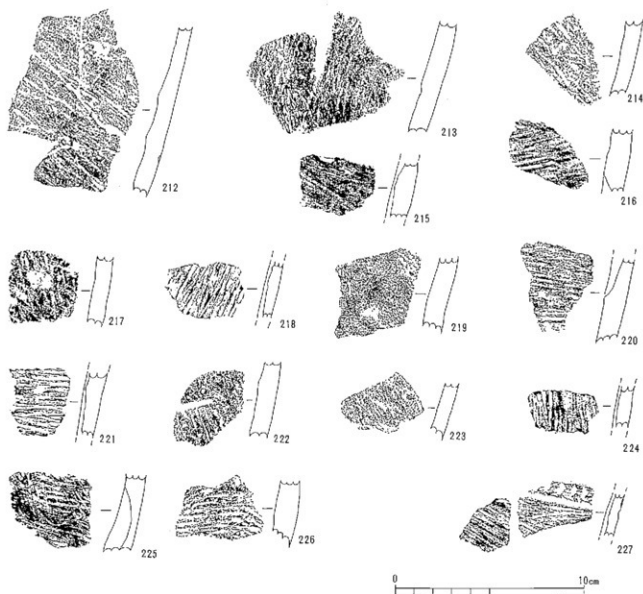
Na	グリッド	部位	分類	外置文様および調整	内面調整	胎土	繊維 備考
183	B26	胴	2d	糸痕後一部ナデ	ナデ	紅砂粒	含
184	—	胴	2d	糸痕後ナデ	—	蟹母殻粉 半透明粒子	含
185	—	胴	2d	糸痕後ナデ	ナデ	蟹母多い	含
186	G40	胴	2d	糸痕後一部ナデ?	ナデ	蟹母	含
187	F41	胴	2d	糸痕後ナデ	ナデ	蟹母 乳白色粒子	含
188	Cx27	胴	2d	糸痕後一部ナデ	ナデ	細砂粒	含
189	—	胴	2d	糸痕後ナデ	ナデ	細砂粒	含
190	—	胴	2d	糸痕後一部ナデ	—	蟹母殻粉 半透明粒子	含
191	B23	胴	2d	糸痕後ナデ	ナデ	半透明粒子	含
192	—	胴	2d	糸痕後ナデ	ナデ	蟹母	含
193	C42	胴	2d	糸痕後ナデ	—	蟹母多い	含
194	F24	胴	2d	糸痕後ナデ	ナデ	蟹母 半透明粒子	含
195	D29	胴	2d	糸痕後ナデ	—	半透明粒子	含
196	C40	胴	2d	糸痕後ナデ	ナデ	蟹母	含
197	B36	胴	2d	糸痕後縦方向にナデ	糸痕後ナデ	細砂粒	含 少
198	C43	胴	2d	糸痕後ナデ	糸痕	蟹母 半透明粒子	含

第52図 押海塚遺跡縄文時代早期土器（第2類）拓影図（1：2）



No	グリッド	部位	分類	外面文様および調整	内面調整	胎土	練堀 備考
199	E31	胴	2d	糸痕後ナゲ	ナゲ	乳白色粒子	含
200	C28	胴	2d	糸痕後ナゲ	糸痕	曇母多い	少
201	F42	胴	2d	糸痕後一部ナゲ	糸痕	曇母微粉 乳白色粒子	含
202	C21	胴	2d	糸痕後ナゲ	ナゲ	曇母 半透明粒子	含
203	A29	胴	2c	糸痕後ナゲ	糸痕	曇母微粉 乳白色・赤色粒子	含
204	B26	胴	2c	糸痕後擦痕調整	糸痕	曇母微粉 乳白色粒子	少
205	C42	胴	2c	糸痕後擦痕調整	糸痕後ナゲ	曇母 半透明粒子	含
206	F29	口縁	3	口縁に開突	糸痕	乳白色粒子	含
207	—	口縁	3	不規則な凸縁 糸痕調整	ナゲ	細砂粒	含
208	E30	胴	3	横位に一条の隆帯	糸痕	曇母多い 乳白色粒子	含
209	C26	底		無文	ナゲ	半透明粒子多い	含
210	C15	底		無文	ナゲ	乳白色粒子	含
211	G40	底		糸痕?	ナゲ	半透明粒子	含

第53図 榑海塚遺跡縄文時代早期土器(第2・3類)拓影図(1:2)



№	グリッド	部位	分類	外置文様および調整	内面調整	染土	織継 備考
212	C29	胴下	2d	条痕	—	半透明粒子	含
213	C29	胴下	2d	条痕	条痕	藍母 半透明粒子	含 №214と同一個体
214	C29	胴下	2d	条痕	条痕	藍母 半透明粒子	含 №213と同一個体
215	C29	胴	2d	条痕	—	半透明粒子	含
216	C29	胴	2d	条痕	条痕	半透明粒子	含
217	C29	胴	2d	条痕	炭化物付着	半透明粒子	含
218	C29	胴	2d	条痕	—	半透明粒子	含
219	C29	胴	2d	条痕後ナデ	条痕	半透明粒子	含
220	C29	胴	2d	条痕	条痕	半透明粒子	含
221	C29	胴	2d	条痕	—	半透明粒子	含
222	C29	胴	2d	条痕	炭化物付着	半透明粒子	含
223	C29	胴	2d	条痕	ナデ	半透明粒子	含
224	C29	胴	3d	条痕	—	半透明粒子	含
225	C29	胴下	2d	条痕	条痕	半透明粒子	含
226	C29	胴	2d	条痕	—	半透明粒子	含
227	C29	胴	2c	横位2条の別突 条痕	—	半透明粒子	含

第54図 神海塚遺跡縄文時代早期土器(24P)拓影図(1:2)

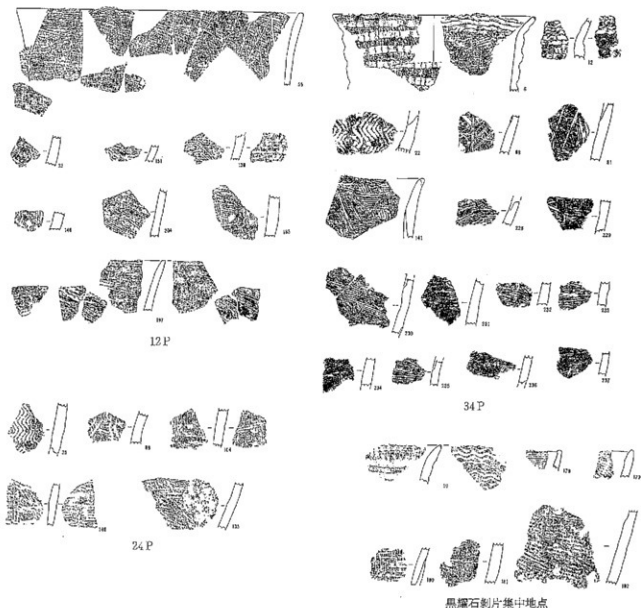
206は口唇が外側につまみ出され、刺突が行われている。内面は擦痕状の調整がみられる。207は不規則な沈線文を施し、外面に擦痕状の調整、内面はナデ調整であると思われる。208は断面が三角形を呈する1条の隆帯を貼付する。また、内外面に条痕調整がみられる。

その他底部破片が3点出土した。第1・2類の底部と思われるが不明である。210は丸底状を呈しており、211もそれに近いと考えられる。

(3) 押型文土器と沈線文土器

出土状況

早期土器は、調査区のはほぼ全体から出土しているが、前述の通りB、C、Dグリッドに集中している。



第55図 神海原遺跡縄文時代早期小竪穴・黒耀石割片集中地点出土土器(1:4)

層的には、包含層である黒色土層の出土が大多数を占めており、層位別での特色はみられない。これらについて各分類ごとの出土状況を見ると、各グリッドで、各類が一樣に出土している状況がみられる。

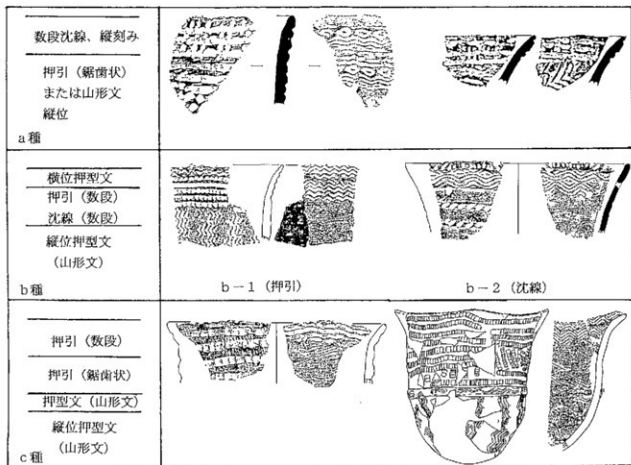
次に遺構の出土状況を見ると（第55図）、12Pでは第1類1点、第2類19点、24Pからは第1類1点、第2類19点、34Pからは第1類3点、第2類11点が出土しており、第1、2類が小竪穴覆土に混在する状況にある。このことから両者は併行、あるいは時間的に近接する状況がうかがわれる。

榊塚遺跡出土土器群の特徴

時間的に近接する可能性が高い第1・2類の特徴をここで整理しておく。

第1類aは器形をみると口縁部が外反し、胴部に若干の膨らみをもつ。胎土にはごく微量の繊維を含む。調整は内外面ともナデ調整が主であるが、内面に一部条痕状のものがみられる例がある。口縁部の文様構成には、横位沈線間の半途起帯上に刺突が施されるもの、数条の押引文を施すもの、横位の押引文・横位沈線文・押引文を施すもの3種類がある。これは守屋氏の分類案（註1）に一致する在り方である（第56図）。従来相木式といわれてきた土器群の文様構成を考えるうえでまとまった資料となった。

押引文に注目すると、7・10の口縁部の内面や、8の胴部にみられるような玉抱き山形文と総称した、山形の山をずらして刻むことによって生じた空間を、菱形かあるいは三角形や楕円形に刻むものが特徴的である。山形文はほとんどがくずれた山形文で、波状のようにも見える。16～19については、18をみるとわずかに山形らしきものがみられ、原体が太いためもあってか山形がくずれ、直線的になったもの



第56図 相木式土器の分類〔守屋（1997）〕

と考えられる。また、地文状に縦位山形文を施文する6・9・12も存在する。胴部をみると、山形文の施文方法に、全面施文するものと、無文帯を挟むものと2種類があると思われる。これは8のように10条以上の長い原体を特徴としており、胴部を縦位に施文すると端部が明瞭に施文されず、密接施文が徹底しないきらいがある。これを良として無文帯を残したまま、すなわち手抜き施文とみるか、意識的に無文帯として残したか、意見の分かれるところである。ここでは意識的に無文帯を残したと考えておく。

第1類bの21・22については、大きいくずれた山形文であること、内面に山形文が施文され、外面に横位と縦位の山形文がみられることから、相木式の範疇で考えるべきものであると思われるが、沈線文が確認されないこと、相木式の定義そのものがこれまで明確ではないことから、細分を行うにあたってはあえて区分することとした。

第1類cは器形が判明するような資料はなく全体像が不明確である。胎土に非常に微量な繊維が含まれるものと、含まれないもの若干ある。文様構成については小破片のみで不明確な部分が多いが、無文帯を構成するものがあり、縦位施文が主である。玉抱き山形文とした、山形の山をずらして刻むことによってできた空間を、円形、槽円形あるいは菱形状に刻んでいるものが特徴的である。山形の角度は、鈍角なものが多くみられる。

第1類に共通することは、くずれた山形文や玉抱き山形文が存在することがあげられる。また胎土に含まれる繊維が微量である。

第2類aは8点の出土である。器形は口縁部がやや外反し、小波状口縁と考えられるものも存在するようである。胎土には繊維が多く含まれ、器面調整は内面に条痕調整を施すものがみられる。文様構成を見ると、口縁部には沈線間に刺突を施し、胴部に沈線で文様を描くものと、胴部にまで沈線間に刺突文を施すものとがみられる。施文具は様々なものが用いられているようである。

第2類bとした沈線のみで文様を描く土器群は、本遺跡の特徴的な土器と思われる。器形は口縁部が外反するものが多く、直線的に立ち上がるものもあり、また小波状口縁となるものもある。胎土には繊維を含み、内外面に条痕調整がみられる。文様構成は口縁部から斜格子目状の沈線文を施すものが多い。55にみられるような、太さの異なる2種類の沈線で文様を構成するものが存在するようである。斜格子の施文順序に注目すると、同一方向の斜線を最初に全て引いた後、逆方向の斜線を引いて斜格子目を描いていくパターンが多い。施文具はaと同様に様々なものが用いられているが、aにはみられないものとして、先端が割れて擦痕状の条線を残す施文具があげられる。

第2類cは口縁部がわずかに外反する器形で、胎土に繊維が多く含まれ、内外面に条痕調整を施す。文様構成は口縁部上端に刺突文を施すもの、胴部の沈線間の無文部分に刺突文を施すものがある。また、沈線に重ねて刺突を行うもの、沈線文の下位に連続した刺突を施すものがある。

第2類dの器形は、口縁部が外反するものと、1点ではあるが内湾するものがある。胎土には炭母が多く含まれ、繊維の含有率には差がみられる。条痕は深く明瞭に施すものと、浅く施すものがあり、方向に統一性はみられない。また貝殻条痕も確認されていない。

第2類には共通して条痕調整がみられ、文様は斜格子目をはじめ、斜め方向の沈線が多い。沈線を描く施文具は、1個体の中で2種類確認されるものがある。

類似資料の比較

御海塚遺跡の資料と、類似資料との比較を行い、類似資料の編年上の位置付けを記し、これまでの問題を整理しておきたい。

第1類 a とした相木式は、北相木村栃原岩陰遺跡出土の資料を基準として設定され、長野県内では佐久町後平遺跡、飯田市恒川遺跡、中島平遺跡、茅野市判ノ木山西遺跡など、主に南信地方に分布する状況がみられる。また、県外では岐阜県九合洞穴遺跡、向畑遺跡、小の原遺跡にも類似資料が出土している。

a1 と類似する資料としては、茅野市判ノ木山西遺跡第1a 類があげられる。口縁部文様帯に、沈線間の半隆起線上に刺突を施す部分に共通点がみられるが、胴部文様帯が本遺跡では縦位山形文であるのに対して、判ノ木山西遺跡では押し沈線文を施文しているところに違いが認められる。

a2 と類似する資料は、栃原岩陰遺跡の完形個体の資料があげられる。本遺跡は口縁部のみ出土であるが、数条の押し文を施文し、口縁部内面に横位山形文を施文する文様構成は共通である。

栃原岩陰遺跡資料の胴上半と下半を分ける隆帯の上に山形文を施文するものも、本遺跡から1片であるが出土している。

a3 と類似する資料は、佐久町後平遺跡、飯田市恒川遺跡、岐阜県小の原遺跡等にみられる。口縁部文様帯に横位の山形文や沈線文、押し文を施文し、胴部に縦位山形文を施文するという共通点がみられる。口縁部文様帯の占める割合をみると、恒川遺跡、小の原遺跡の場合は狭く、胴部文様帯である縦位山形文が本遺跡より上部の位置より施文されるところに相違がみられる。

山形文に注目すると、いずれの遺跡も大ぶりなくずれた山形文で、山をずらして窺むことによって生じた空間に、菱形あるいは三角形や楕円形を刻む玉抱き山形文が施文されており、相木式の特徴と思われる。しかし、問題となるのは栃原岩陰遺跡出土の完形個体一つをとって相木式とされていて、定義そのものがいまだ明確でないということがある。また相木式のメルクマールとされる押し文が、どこから発生するのかという問題も解決されていない。

相木式の編年の位置付けは、長野県史(註2)の中では、岐阜県向畑遺跡で高山寺式の上層から相木式が出土していることから、もっとも新しい押し文であるとしている。この見解を踏まえ、下荒田遺跡報告書(註3)の中で、高山寺式が長野県内において分布する時期には、田戸上層式が分布することから、相木式を田戸上層式後半以降に位置付けている。

ここで問題なのは、相木式が押し文系の土器群の編年から、その系譜をたどれるかどうかということである。また相木式と共存する良好な資料が出土していないことから、編年の位置付けが困難な状況にあるということがいえるであろう。

第2類 a とした土器は、沈線間に連続刺突をもつという点では御代田町下荒田遺跡の早期第1群1類のなかに類似資料がある。下荒田遺跡が横位の沈線間にペン先状の施文具による斜方向の刺突であるのに対し、本遺跡は竹管状施文具などが使われ、縦方向に施文するものがあることに相違がみられる。

第2類 b に含めた細い沈線による斜格子目状の沈線文も、下荒田遺跡早期第1群1類と4類の一部の胴部にみることができる。また、千葉県城ノ台南貝塚遺跡、静岡県清水柳北遺跡の胴部にもみられる。本遺跡では斜格子目状の沈線文が、口縁部から施文されているが、他の遺跡では、口縁部文様帯は別の

文様をもち、胴部文様帯に格子目状の沈線文が施文されているのが、大きな相違点である。

下荒田遺跡は田戸上層式以降に、城ノ台南貝塚遺跡の格子目状の沈線文は田戸下層式に位置づけられている。

第2類c、dとした土器は、茅野市判ノ木山西遺跡第3類と類似する。胎土に繊維が含まれ、曇母を含むものがみられること、文様におそらく先のササクレた施文用具を用いているためであろうと思われる擦痕状の糸線のみえる沈線と刺突を施す点は共通である。判ノ木山西遺跡の報告書(註4)の中では、口縁部の刺突、擦痕調整などから子母口式・野島式に併行するとしている。第2類に共通していることは、類似資料が少なく比較を行うのに十分とはいえないということである。関東編年と対比させるにも共通点が少なく、相木式と同様に困難な状況であるといえる。

シンボジウム「押型文と沈線文」

禅海塚遺跡の土器の編年の位置付けについては、シンボジウム「押型文と沈線文」(1997年、長野県考古学会縄文早期部会主催)において若干触れられている。

守屋氏は、この中で相木式土器と沈線文土器の併行関係について、禅海塚遺跡を例にあげ一案をのべている。引用すると「なかでも注目したいのは、器形が外反して、口縁部に数条の沈線と、沈線に挟まれた部分を丸頭状工具や竹管で刺突し、頸部に鋸歯状の沈線をめぐらすものである。型式学的な類似からこの土器が相木式と併行するととらえる」とし、第2類aに分類された沈線文と相木式が併行関係にあるとの見解を示した。

田中氏は、田戸上層式に併行する中部・東海地方の沈線文土器群として、禅海塚遺跡の資料を取り上げて(註5)。本報告で第2類a・bとしたものと、下荒田遺跡・栃原岩陰遺跡の一部、清水柳北遺跡の資料を、文様・モチーフから同一のグループにまとめ、これに続くものとして本遺跡第2類cと判ノ木山西遺跡・栃原岩陰遺跡の一部、上林中道南遺跡の資料を同一グループとし、2つのグループに連続性があるとしている。

阿部氏は、禅海塚遺跡と判ノ木山西遺跡を比較し、施文原体の使用方法と相木式の出土量の違いから時間差があることを指摘している(註6)。判ノ木山西遺跡の沈線文や刺突文の施文原体は、半截竹管状工具によるものがみられ、その施文方法には、工具の背面を使うものと、腹面を使うものが安定的に認められるのに対し、禅海塚遺跡では半截竹管状工具の腹面を使用し、背面の使用がみられない点、相木式の出土量が禅海塚遺跡の方が多い点をもって判ノ木山西遺跡の古段階に相当するとしている。

また、文様構成要素から下荒田遺跡の口縁部沈線間に施される連続刺突文が、判ノ木山西遺跡の口縁部の刺突列に変化していくと仮定し、その中間的要素に、口縁部付近に刺突文をもつ、望月町平遺跡の例をあげている。平石遺跡資料の胴部文様に1本書きの細沈線が登場することも、判ノ木山西遺跡への変遷をうかがう一つの要素としている。

阿部氏は関東編年との対比も判ノ木山西遺跡資料から試みており、判ノ木山西の古段階と禅海塚遺跡を田戸上層式の終末に、新段階を子母口式においたが、今後検討していく必要があるとしている。

以上、類似資料との比較や、シンボジウムの成果を検討すると、田戸上層式から子母口式の間には下荒田遺跡、判ノ木山西遺跡などの中部地方独自の変遷をたどり、禅海塚遺跡はその中に組み込まれると考えられるようである。

ま と め

シンポジウムの成果と、今回報告書作成にあたり改めて整理を行った結果から、禰海塚遺跡の押型文土器と沈線文土器について考えてみたい。

初めに第1類と相木式についてみる。禰海塚遺跡出土の第1類土器を3種類に細分し、aを従来相木式といわれてきた文様要素をもつ土器、b・cを山形文のみを施文する土器としたが、aとb・cを比較すると、くずれた山形文及び玉抱き山形文が共通要素として認められる。このことから第1類bの20～22と、第1類c（34～36などの山形の角度が鋭角なものを除く）は相木式のバリエーションととらえ、相木式の範疇に含まれるものであると考えてよいことが確認された。そして個体数にして、口縁部破片から12個体が確認できたということは、その存在を問われていた相木式の型式内容をより明らかにして、その存在を位置付ける結果となった。

また、本遺跡では相木式に数多くの個体数があるにもかかわらず、中部高地の押型文系土器である種沢・細久保・塞ノ神式の土器、含繊維の楕円文が全く見られない。他の遺跡では楕円文などと共に相木式が出土しているが、たいへん少量である。この本遺跡出土資料の在り方は、相木式を含む該期の単純遺跡の存在を裏付けるものと考えられる。

続いて相木式と沈線文の関係を考えてみたい。両者の関係が何える資料として、1と14が注目される。1は沈線間に刺突を行うという文様モチーフで第2類aと、14は押引文に先端が割れて条線を残す施文工を使用する点で、第2類b・cとの関連が考えられる。また胎土をみると、相木式は非常に微量の繊維と細かな粒子を含み、良好な焼成であるのに対して、1の胎土は大きな粒子が多く、繊維も若干多めであり、第2類の胎土と類似しているようである。

このほか第1類の一部に、条痕状の痕跡がみられたり、20のように外面に原体条痕が施されることは、大多数の個体に条痕をもつ沈線文との関連性を示唆するものと考えたい。

続いて出土状況を概観すると、第1類及び第2類は良好な出土状態に恵まれているとはいえ、12P・24P・34Pの覆土では少量ながら両者が伴って出土している。遺構外でも同じ状況である。また先行する撫糸文系土器、押型文系土器、無文土器は全くなく、後続する含繊維土器も極めて少ない。

以上の事から、第1類の相木式土器と第2類の沈線文土器は、ほぼ同時期かあるいは近接した時期に存在していたととらえることが可能のように思える。

最後に第2類と他遺跡との関係についてふれておく。

第2類の沈線文には、貝殻復線文が全く出土していない。また第2類に近い様相をもつ下荒田遺跡と判ノ木山西遺跡の資料をみると、斜格子目状の沈線文を溝に描くこと、条痕後ナゲ調整を行うものがみられることで共通する。しかし、下荒田遺跡では斜格子目状の沈線文を溝部に描くが、本遺跡では口縁部と胴部の両方に描いている。一方、判ノ木山西遺跡では口縁部に斜格子目状の沈線文がみられ、格子目状の沈線間に刺突を施すのは本遺跡と同様である。併せて本遺跡と判ノ木山西遺跡には、先端が割れて条線を残す施文工が多く使われており、本遺跡と判ノ木山西遺跡は内容的に非常に近いものをもって見るとする見方は首肯できる。

いずれにしても今回の出土資料は、これまでに類例が少ない中部地方独自の資料として、不明確な部分が多かった該期の資料を補うものである。今後は資料の増加を待って、禰海塚遺跡及び他遺跡の資料を含めた相木式土器と沈線文土器の型式と属年の位置付けの検討が必要であろう。

本稿作成にあたり会田進、小笠原永盛、田中総、中沢道彦、守屋豊人（敬称略）各氏に、ご助言ご協力をいただき感謝いたします。

- 註1 守屋 豊人 1997 「中部地方における押型文土器後半期の様相」
シンポジウム『押型文と沈線文』本編
長野県考古学会編文（早期）研究部会
- 註2 宮下 健司 1998 長野県史 考古資料編 遺物・遺構 II時代と編年 2(3)
- 註3 中沢 道彦 1996 「下荒田遺跡早期第1群土器について」
『下荒田遺跡発掘調査報告書』御代田町教育委員会
- 註4 小林 秀夫 1981 長野県中央道垣蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
一茅野市・原村 その3—
—茅野市その4・富士見町その3—
- 註5 田中 総 1997 「中部・東海地方における沈線文土器の様相」
シンポジウム『押型文と沈線文』本編
長野県考古学会編文（早期）研究部会
- 註6 阿部 芳郎 1997 「判ノ木山西遺跡出土土器の分類と編年」
シンポジウム『押型文と沈線文』本編
長野県考古学会編文（早期）研究部会

その他の参考文献

長野県考古学会編文（早期）研究部会 1997 シンポジウム『押型文と沈線文』資料集

おわりに

平成7年度から始まった緊急地方道路（街路）事業に伴う間下丸山・禪海塚遺跡発掘調査も平成9年度をもちまして終了することができました。

間下丸山・禪海塚遺跡は古くから宅地として利用されてきた土地であるため、これまでに大がかりな発掘調査が行われることがなく、今回の調査地も建物の取り壊しなどの影響で遺跡の保存状態の悪いことが予想されました。しかし、調査の結果、道路工事に先立ち建物を撤去した跡地であっても、意外に遺構の残りが良いものもあり、多くの遺構、遺物が発見され、幾つもの時代にわたり生活が営まれていたことが明らかになりました。間下丸山遺跡からは縄文時代中期後葉の特徴的な模様を施した土器群が出土する住居址の発見があり、禪海塚遺跡では縄文時代早期の土器片や、中期初頭の小竪穴が出土し、古墳時代の住居址や江戸時代の遺物も発見されました。

間下地区は段丘の上に位置し、太古の昔より住みやすい土地であったのでしょうか、この段丘に尾根状に続く小高い丘の上にはガラス製のビーズを出土した天王垣外遺跡があり、さらに縄文、弥生、古墳、平安時代の複合遺跡である海戸遺跡へと続く遺跡地帯となっていることから、周辺遺跡との関係に興味が増えるところです。

発掘調査につきましては工事関係者、地元住民の方々にご協力をいただきました。報告書発刊では江戸時代陶器類の鑑定を文京区教育委員会遠藤寛子氏に依頼しご指導、ご助言をいただきました。縄文時代早期土器片の整理につきまして長野県考古学会縄文（早期）研究部会のみなさまのご教示をいただきながら、作業をすすめることができました。これら多くのみなさまに心から感謝申し上げます。またこれまで発掘調査に携ってこられた作業員の皆様に厚くお礼申し上げます。

付表 遺構・遺物一覽表

1. 遺構一覽表

(1) 住居址一覽表

(イ) 間下丸山遺跡

※ 住居の大きさを示す測定値は、主軸とこれに直交する横軸の値。()内は推定

住No.	平面形(推定)	主 軸	規模(m)	炉	時 期	備 考
4	隅丸方形	—	(5.0×5.7)	—	古 墳	
5	—	—	—	カマド	(平 安)	
6	—	(N-66°-W)	—	カマド	(平 安)	
7	(隅丸方形)	—	4.1×(1.0)	—	縄・中	
8	隅丸方形	N-97°-W	3.6×(3.4)	—	鎌倉以降	竪穴状遺構
9	円 形	N-20°-E	径5.5	石囲炉	縄・中・中葉~後葉	
10	長方形	N-107°-W	(4.7×5.3)	—	平 安	
11	楕円形	N-37°-W	4.3×3.5	埋燗炉	縄・中・中葉	
12	—	—	—	—	縄・中・中葉	

(ロ) 禅海塚遺跡

住No.	平面形(推定)	主 軸	規模(m)	炉	時 期	備 考
3	方 形	N-16°-W	3.7×3.8	カマド	平 安	
4	方 形	N-0°	2.7×2.4	カマド	平 安	
5	長方形	N-0°	3.2×4.0	カマド	平 安	
6	隅丸方形	N-37°-W	(4.0×5.0)	カマド	平 安	

(2) 小竪穴一覽表

(イ) 間下丸山遺跡

※ 口径・底径は長軸×短軸、()の数値は残存値

小竪穴No.	グリッド名	平面形	断面形	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	時 期
19	D-163	楕円形	—	90×70	76×50	24	不 明
20	B-160	円 形	—	65	40	20	不 明
21	B-167	楕円形	—	120×90	84×70	16	不 明
22	B-168	楕円形	—	90×(70)	56×30	32	不 明
23	D-169	楕円形	—	120×(80)	98×(70)	23	不 明

(ロ) 禅海塚遺跡

※ 口径・底径は長軸×短軸、()の数字は残存値

小堅穴No.	グリッド名	平面形	断面形	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	時期
3	F-30	円形	—	110 × 105	82 × 70	26	縄文早期
5	C-20	方形?	—	70 × 70	60 × 50	47	縄文中期初頭
6	D-20	不整円形	—	(110) × (100)	60 × 55	60	不明
7	C.D-20	楕円形	—	(110) × (80)	(70) × 55	23	不明
8	D.E-31	円形	—	160 × 140	110 × 90	54	縄文中期初頭
9	H-44	円形	—	80 × 80	70 × 65	22	不明
10	D-16	楕円形	—	80 × 58	64 × 50	24	不明
11	D-16	円形	クライ状	118 × (90)	100 × (85)	25	不明
12.13	B-26	楕円形	—	115 × 88	95 × 70	13	縄文早期
14	A.B-29	円形	—	98 × 92	70 × 70	43	縄文中期初頭
15	B.C-30.31	隅丸長方形	—	200 × 110	170 × 95	22	江戸以降
16	E-18	円形	—	75 × (62)	60 × 55	34	不明
17	E-17	円形	—	55 × (40)	20	27.15	縄文中期初頭
18	A.B-23	楕円形	—	95 × 75	37 × 35	27.17	縄文中期初頭
19	B-23	楕円形	—	160 × 95	150 × 80	19	縄文早期
23	B-25	円形	—	60 × 55	46 × 32	10	不明
24	C-29	不整円形	クライ状	220 × 195	195 × 150	45	縄文早期
25	D-15	円形	—	75 × 65	60 × 50	30	不明
26	B.C-21	不整円形	—	75 × 66	60 × 50	16	縄文中期初頭
27	D-27	楕円形	—	87 × 76	70 × 60	29	縄文中期初頭
28	D-23	不整円形	—	105 × 90	75 × 70	23	縄文中期初頭
29	C-21.22	不整円形	—	80 × 60	55 × 44	13	縄文中期初頭
30	D-21	不整円形	—	60 × 57	50	32	縄文中期初頭
32	G-30	円形	—	48 × 44	37 × 32	33	不明
33	E-31	円形	—	88 × (70)	75 × 70	22	縄文中期初頭
34	D-29	円形	—	110 × 105	90 × 90	38	縄文早期
35	A.B-38	楕円形	—	95 × 80	78 × 65	28	不明
36	E-12	円形	—	83 × 75	64 × 57	30	縄文中期初頭
37	B-13	円形	—	92 × 85	65	34	縄文早期
38	C-9	楕円形	—	220 × 130	140 × 80	65	不明
39	E.F-44	方形	—	240 × (185)	(184) × 170	33	江戸以降
40	C.D-72	方形	—	200 × 140	130 × 120	9	平安～中世
41	G-44	方形	—	223 × (185)	200 × (175)	20	不明
42	A.B-30.31	隅丸長方形	—	(315) × 128	(290) × 100	76	江戸以降

2. 遺物一覽表

(1) 石器

※ 種別分類は基本的に熊久保遺跡発掘調査報告書にしたがっている。
詳しくは「熊久保遺跡」(本編)490~544頁を参照されたい。

(イ) 間下丸山遺跡

石 鏃

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No.	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
7H	フ	F157	1	ob	—	—	—	(0.3)	
8H	フ下	C157	3	ob	(11.5)	(13.3)	(2.5)	(0.3)	
8H	フ下	D157	2	ob	16.6	12.7	3.6	0.5	
9H	フ	B155	4	ob	(18.7)	(18.0)	3.1	(0.6)	
9H		B156	3	ob	16.3	12.9	3.8	0.5	
9H	フ下	C154	6	ob	24.1	15.5	4.3	1.0	
9H	フ上	C156	10	ob	27.6	(19.3)	4.8	(1.9)	

石 錐

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No.	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
9H	フ上	C154	7	ob	25.2	19.3	5.1	1.6	
9H	フ上	C156	18	ob	29.7	13.2	7.7	1.9	

打製石斧

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No.	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
8II	フ下	C158	6	泥	97.2	55.6	17.3	133.1	
9H	フ上	C156	12	泥	98.1	54.7	12.5	87.8	
10H	フ下	C169	6	泥片	94.7	46.5	14.4	75.7	
	カク	B120	2	sh	(63.6)	(38.9)	(10.3)	(31.9)	
	アンカツ	C155	49	砂	107.2	62.5	14.2	112.0	

磨製石斧

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No.	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
9H	P9	B155	48	緑凝	79.9	30.4	15.1	66.8	
9H	フ上	C155	15	蛇	76.1	27.5	8.4	31.4	

磨石類

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No.	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
8H	フ下	C157	6	III	凝	107.5	72.5	61.0	545.0	
8H	フ上	C157	7	II	安	118.7	91.3	57.3	990.0	
8H	フ上	C157	8	II	凝	103.9	80.5	47.6	635.0	
8H	フ下	C157	9	II	安	129.5	52.9	36.2	329.0	
8H	フ上	D157	1	II	安	133.4	69.0	39.2	535.0	
8H	フ下	D158	5	II	凝	104.4	98.0	69.2	1070.0	
8H	フ上	D158	8	II	凝	75.0	71.9	39.0	256.4	
9H	フ上	B155	59	II	砂	116.0	72.5	46.5	521.0	
9II	フ上	C154	14	II	凝	102.0	63.7	53.7	523.0	
9H	フ上	C154	20	III	鱗片	62.3	42.6	9.4	34.3	
9H					安	(114.8)	(65.7)	(39.3)	(248.5)	
10H	フ下	B170	13	III	安	95.5	56.0	44.9	271.3	
10H	フ下	E169	1	III	凝	104.7	76.0	48.3	435.0	
18P		F116	1	III	安	108.6	93.1	54.8	725.0	

敲石

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No.	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
9H	P9	B155	47	鱗片	158.0	61.0	44.0	544	

石皿

(単位は cm, g)

遺構区	層位	グリッド	No.	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
9H	フ下	B154	14	安	(28.9)	(18.0)	(8.8)	(1930.0)	
9H	フ上	C154	21		(71.9)	(72.5)	(45.2)	(300.0)	
	アンカツ	—	1	安	(15.0)	(17.6)	(7.3)	(1710.0)	

(ロ) 禅海塚遺跡

石 鉄

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No.	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
		クロ	B17	1	ob	21.9	14.8	4.8	1.2
		クロ	B17	6	ob	24.7	16.1	3.4	1.1
		カツ	B22	11	ob	21.0	15.0	4.4	1.0
		クロ	B30	7	ob	12.3	12.9	3.6	0.5
		クロ	B31	14	ob	19.0	13.3	4.5	0.6
		クロ	B31	15	ob	19.8	14.6	5.1	1.1
		クロ	B32	1	ob	(17.4)	12.7	4.1	(0.8)
		クロ	C25	3	ob	24.6	15.2	4.5	1.3
		クロ	C28	5	ob	27.9	(15.5)	4.3	(1.4)
		クロ	C29	6	ob	(20.2)	13.1	4.0	(1.0)
		クロ	C32	1	ob	21.5	(12.9)	4.0	(0.8)
		クロ	D13	3	ob	17.0	16.0	4.7	0.8
		クロ	D18	9	ob	14.6	14.2	4.1	0.7
		クロ	D21	3	ob	(22.7)	16.1	5.3	(1.5)
		クロ	D21	4	ob	(20.5)	17.4	2.9	(0.8)
		クロ	D25	1	ob	(22.9)	(14.7)	4.2	(1.0)
		クロ	D39	2	ob	(21.1)	15.7	5.2	(1.5)
		クロ	D40	3	ob	(18.5)	(15.4)	4.3	(0.9)
		クロ	E13	1	ob	(25.0)	(10.6)	4.8	(1.0)
		クロ	E14	3	ob	(17.0)	13.6	3.7	(0.7)
		クロ	E16	9	ob	—	—	—	(0.2)
		クロ	E29	3	ob	(24.6)	(11.3)	3.3	(0.6)
		カツ	E34	3	ob	14.2	13.9	3.4	0.6
		クロ	F28	1	ob	27.8	16.6	3.9	1.2
		クロ	F38	1	ob	12.3	11.5	3.4	0.3
		クロ	F41	3	ob	11.8	12.9	3.7	0.6
		クロ	F41	4	ob	19.2	(12.7)	4.1	(0.7)
		クロ	F42	170	ob	(17.4)	(13.0)	2.8	(0.5)
		カツ	G26	3	ob	24.7	16.0	3.5	1.3
		カツ	G26	5	ob	16.9	(11.4)	3.1	(0.6)
		クロ	G42	32	ob	21.4	(18.9)	5.3	(1.4)
		Z		100	ob	—	—	—	(0.5)
		表	C73	3	ob	18.2	(15.2)	2.6	(0.5)
25P			D15	3	ob	13.8	14.0	3.8	0.9
34P			D29	9	ob	32.0	15.0	5.0	1.7
6H		床	G18	5	ob	15.5	14.5	4.0	0.7
		表	Ct44	3	ob	26.9	24.1	5.8	3.2
		クロ	Ct42	3	ob	24.8	15.1	4.4	1.3
		アンカツ	Ct31	6	ob	28.3	(15.5)	5.0	(1.8)
		アンカツ	Ct24	1	ob	18.2	14.0	2.7	0.7
		アンカツ	Ct22	1	ob	(18.8)	18.5	6.0	(1.7)
		アンカツ	Ct18	5	ob	17.6	22.3	7.3	3.0
		アンカツ	Ct16	1	ob	(27.9)	(15.8)	4.6	(1.6)
		アンカツ	Ct27	10	ob	19.5	(17.4)	5.0	(1.1)
		クロカツ	Ft42	3	ob	14.2	4.9	4.2	1.0
		クロカツ	Ft42	6	ob	17.0	13.6	3.8	0.7
		アンカツ	Ft21	2	ob	27.9	18.3	4.9	2.1
		カク	Ft20	5	ob	22.7	16.6	4.1	1.2
		Z		1	ob	(25.4)	(14.3)	4.4	(1.0)
		クロ	B31	36	ob	(18.9)	(15.2)	3.5	(0.6)

未製品

未製品

未製品

	カツ	C21	11	ob	(21.2)	(14.0)	5.1	(0.9)
		Z	15	ob	14.3	14.0	14.5	0.7
		Z	21	ob	21.0	(13.5)	(4.0)	1.0
		Z	22	ob	14.4	14.0	3.5	0.7
黒曜石剥片集中地点	クロ	F43	108	ob	(18.6)	(12.2)	4.0	(0.9)
黒曜石剥片集中地点	クロ	G43	9	ob	(17.9)	(18.1)	(3.8)	(0.9)
黒曜石剥片集中地点	カク	F43	607	ob	(16.4)	15.0	(3.9)	(0.7)
黒曜石剥片集中地点	クロ	F43	442	ob	(13.6)	(13.9)	3.4	(0.4)
黒曜石剥片集中地点		F43	606	ch	25.0	18.0	6.0	2.5
黒曜石剥片集中地点	クロ	F42	27	ob	—	—	—	(0.1)

石 錐 (小形尖頭器)

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
	Z	--	88	ob	31.4	18.3	7.7	3.7
	クロ	B31	47	ob	29.4	21.0	10.2	5.5
	カツ	C23	17	ob	30.9	15.7	6.0	2.1
	クロ	C25	4	ob	21.0	12.4	7.2	2.4
	クロ	D40	11	ob	30.0	18.1	6.4	2.6
	カツ	F27	5	ob	38.1	18.2	9.2	3.8
	クロ	G40	12	ob	25.7	16.1	8.6	3.1
	表	Ht 44	7	ob	30.0	14.0	5.8	2.1

石 錐

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
15P		B31	62	ob	33.3	23.8	13.2	7.5	
15P		B31	72	ob	28.1	23.8	10.3	4.8	
黒曜石剥片集中地点		F43	65	ob	33.0	33.0	4.3	11.9	
	Z		67	ob	25.3	14.5	3.0	0.9	
	カツ	B22	12	ob	27.8	24.9	9.4	4.4	
	クロ	B23	28	ob	28.2	18.1	9.0	1.9	
	クロ	B24	9	ob	43.7	20.6	12.5	9.1	
	クロ	B28	23	ob	20.3	15.1	18.2	1.4	
	クロ	B40	3	ob	27.1	7.5	3.5	0.9	
	表	Ct 42	7	ob	22.1	26.4	8.2	2.2	
	カツ	C20	8	ob	26.9	18.8	5.4	1.9	
	カク	C29	14	ob	31.2	18.1	9.0	3.6	
	クロ	D18	8	ob	34.6	20.8	18.5	3.6	
	クロ	D22	12	ob	38.1	20.5	7.8	2.6	
	クロ	D29	24	ob	34.5	21.0	6.8	4.5	
	カク	D29	26	ob	29.7	12.7	7.9	2.8	
	カク	Ft 1	6	ob	25.3	12.6	11.8	2.4	
	表	Ft 21	7	ob	30.0	24.4	16.6	4.2	
	カク	F17	9	ch	39.7	26.9	14.9	11.1	
	カツ	F25	3	ob	19.8	7.0	5.3	0.7	
	クロ	G38	5	ob	23.0	22.7	12.2	4.5	

打製石斧

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
5P		D20	7	砂	90.3	41.3	9.9	51.7	
10P		D16	5	石安	(97.4)	30.8	8.7	32.3	
15P		B31	31	緑片	140.0	50.9	27.2	207.7	
15P		B31	16	頁	135.2	48.6	18.8	118.7	
25P		D15	4	安	89.2	38.6	(9.7)	(44.0)	
	表		151	泥	(97.0)	47.1	(22.5)	(116.8)	
	表		159	泥	99.0	56.2	21.2	113.7	
	Z		11	安(?)	96.0	50.5	20.3	116.7	
	Z		102	頁	77.4	55.7	13.4	87.2	
	クロ	A27	1	泥	89.2	43.5	10.0	45.7	
	クロ	A29	1	頁	(62.0)	(45.5)	(11.5)	(35.8)	
	クロ	B26	18	緑片	71.6	34.6	7.3	32.4	
	アンカツ	Ct21	5	泥片	93.5	53.9	12.0	83.3	
	カツ	C21	20	砂	100.0	51.0	14.7	114.7	
	カク	C27	4	頁	85.1	35.7	14.0	44.1	
	カク	C29	3	頁	94.2	40.2	15.4	71.3	
	クロ	C29	4	緑片	116.0	37.8	9.6	61.6	
	クロ	C29	5	泥片	102.0	40.7	15.1	70.9	
	クロ	Ct31	5	頁	79.9	41.1	12.2	50.8	
	アンカツ	Ct33	3	砂	117.8	56.0	22.6	165.7	
	アンカツ	Ct33	4	泥	(59.2)	(44.1)	(13.8)	(32.3)	
	表	Ct40	3	緑片	73.9	49.9	12.8	53.4	
	表	Ct40	4	泥片	73.0	32.3	10.2	27.8	
	表	Ct40	5	泥	78.0	50.8	11.7	54.1	
	クロ	D17	3	安	77.3	51.0	18.2	92.6	
	クロ	D18	3	泥片	83.5	42.8	15.4	62.3	
	クロ	E16	2	蛇	92.3	65.6	24.1	203.3	
	カツ	E34	4	緑片	122.7	65.2	23.5	230.1	
	クロ	F15	3	砂	101.7	52.2	22.0	150.5	
	カク	G19	5	泥片	(50.7)	(26.3)	(6.7)	(11.9)	
	クロ	G29	1	頁	84.5	54.0	20.7	86.0	
	クロ	G29	2	砂片	118.4	57.4	19.6	156.5	

磨製石斧

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
	カク	B11	1	?	103.2	45.7	28.3	129.5
	クロ	D18	4	蛇	63.3	40.4	11.6	39.1
	クロ	E16	1	緑片	113.2	(49.7)	38.5	(191.2)
	カク	—	7	緑片	119.4	49.2	29.4	357.0

石 匙

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
	クロ	D30	5	ob	30.1	(36.1)	8.0	(5.8)	
	カク	C27	1	ch	56.0	41.0	9.5	23.9	
	—	H40	1	?	94.0	96.0	16.0	127.1	大濠粗製石匙

磨 石 類

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
33P		E31	8	凹	安	(83.0)	(23.1)	(52.7)	(129.4)	
34P		D29	10	磨	凝	(102.5)	(62.0)	(61.0)	(575.0)	
	カク		8	磨	安	156.2	80.8	62.5	1160.0	
	Z		4	磨	凝	136.6	81.0	78.5	1300.0	
	Z		16	凹	凝	150.6	90.3	71.4	1188.0	
	クロ	Ct 43	5	敷	砂	(85.0)	(64.0)	(41.0)	(320.0)	
	クロ	Ct 32	3	敷	砂	117.5	60.8	(48.8)	(430.0)	
	アンカツ	Ct 23	1	敷	砂	(98.5)	81.5	(72.0)	(790.0)	
	クロ	F16	6	磨	凝	91.2	70.5	57.0	470.0	
	クロカツ	Ft 43	1	凹	凝	126.6	46.5	41.8	355.0	
	カツ	G26	6	磨	砂	62.1	50.0	35.3	142.5	
黒曜石剥片集中地点		F 43	316	敷	凝	150.5	64.1	61.6	1700.0	

砥 石

(単位は mm, g)

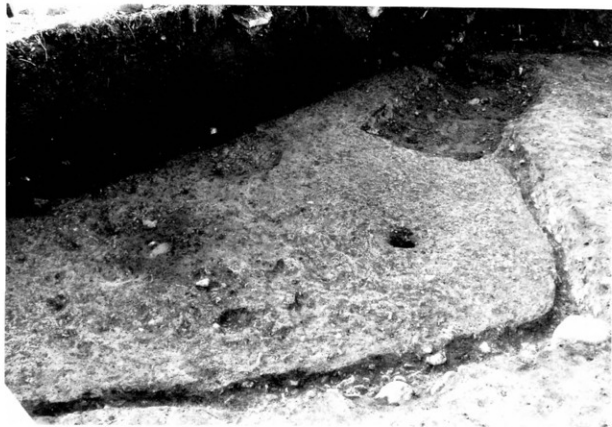
遺構区	層位	グリッド	No	石材	長さ	幅	厚さ	重さ
	クロ	Ct 42	6	泥	48.2	47.2	11.8	

土 器 片 鏝

(単位は mm, g)

遺構区	層位	グリッド	No	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	欠損状態	切れ目箇所
	クロ	C25	5	土器片	47.5	35.7	10.0	14.8	風化	4

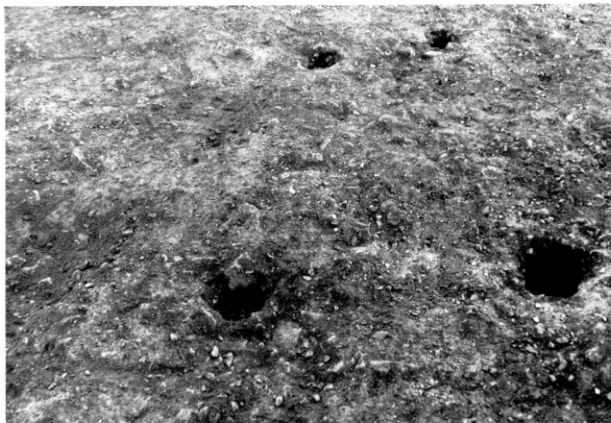
写 真 图 版



間下丸山遺跡 4号住居址



間下丸山遺跡 4号住居址 主柱穴間の掘出土状態



問下丸山遺跡 5号住居址



問下丸山遺跡 6号住居址



間下丸山遺跡 平成9年度調査区南側



間下丸山遺跡 平成9年度調査区北側



間下丸山遺跡
平成9年度調査区北側遺構検出状況



間下丸山遺跡 7号住居址



間下丸山遺跡 8号住居址 露出土状態



間下丸山遺跡 8号住居址



間下丸山遺跡 9号住居址 遺構検出状況



間下丸山遺跡 9号住居址 遺物出土状態



間下丸山遺跡 9号住居址 遺物出土状態 炉の南側



間下丸山遺跡 9号住居址 貼床面まで掘り下げた状態



間下丸山遺跡 9号住居址 貼床下の柱穴まで完掘



間下丸山遺跡 9号住居址 炉の周辺の遺物出土状態



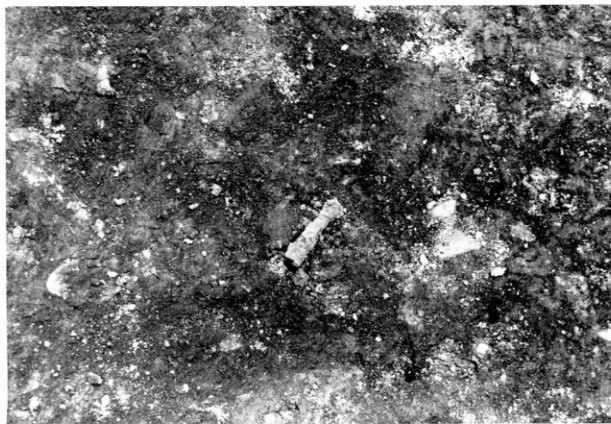
間下丸山遺跡 9号住居址 小竈穴9 P上の土器



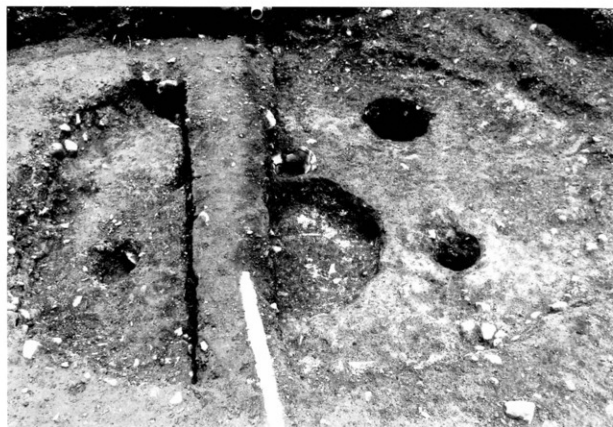
間下丸山遺跡 9号住居址 竈と小竈穴9 P



間下丸山遺跡 10号住居址



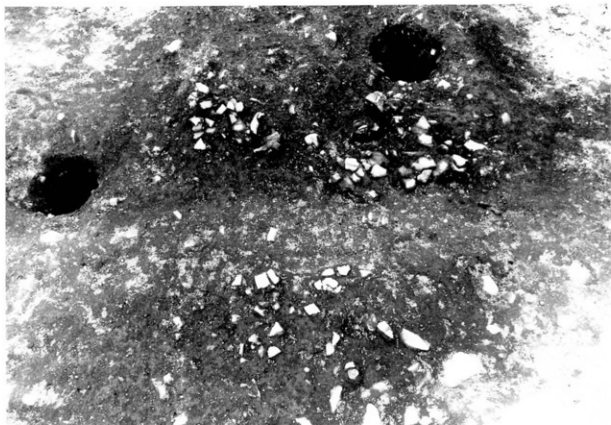
間下丸山遺跡 10号住居址出土鉄製品



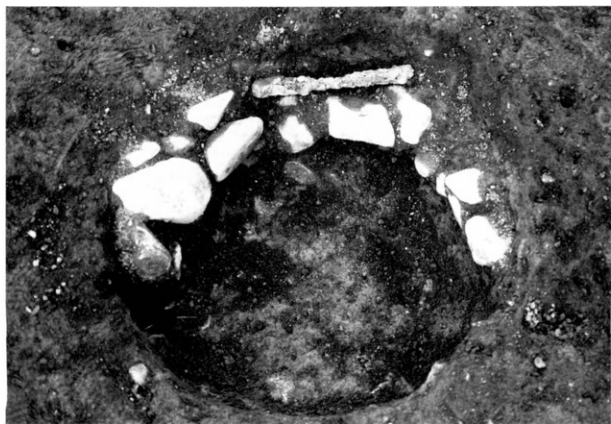
間下丸山遺跡 11号住居址



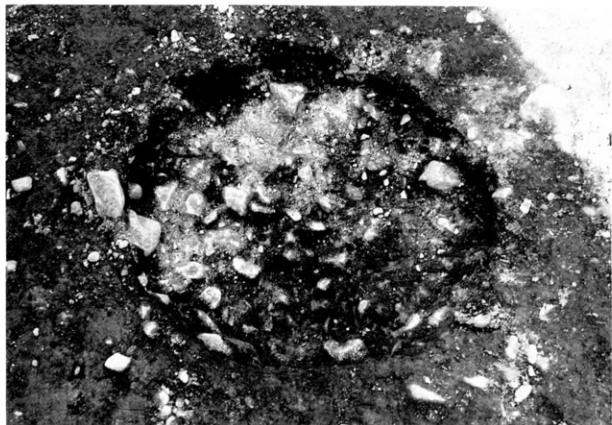
間下丸山遺跡 11号住居址 埋葬炉



問下丸山遺跡 12号住居址



問下丸山遺跡 小竅穴20Pの鉄製品出土状態



問下丸山遺跡 小竪穴21P



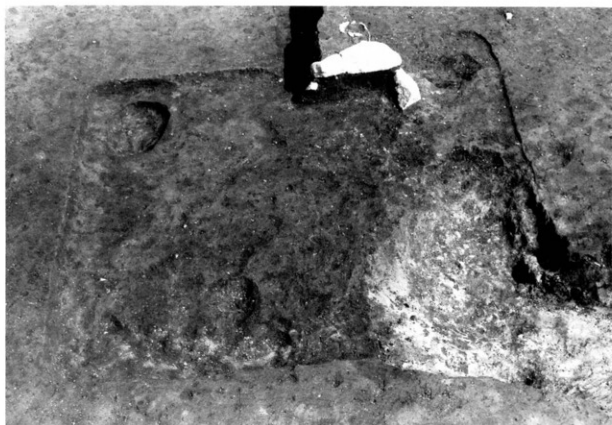
問下丸山遺跡 小竪穴23P



禅海塚遺跡 3号住居址



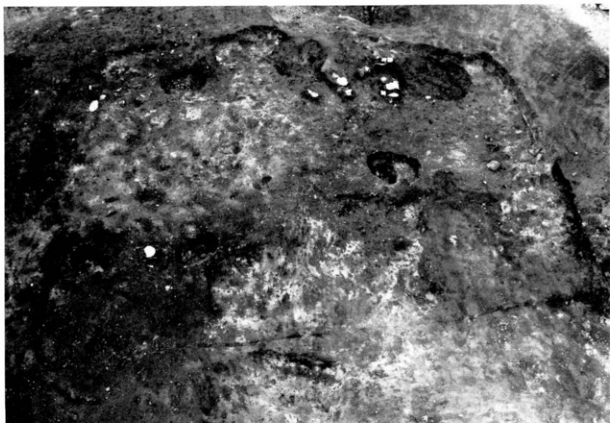
禅海塚遺跡 3号住居址 カマド



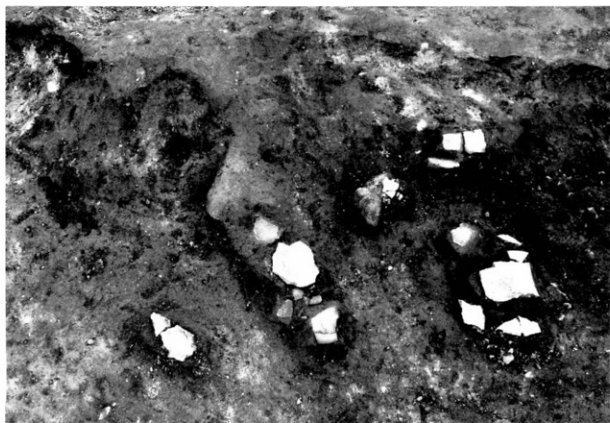
禰海塚遺跡 4号住居址



禰海塚遺跡 4号住居址 カマド設置土器



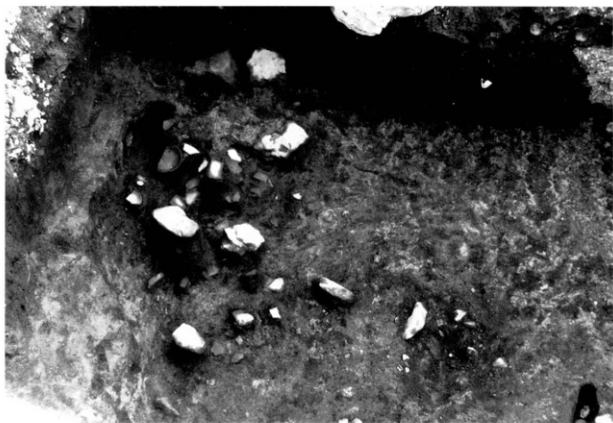
禅海塚遺跡 5号住居址



禅海塚遺跡 5号住居址 カマド周辺の遺物



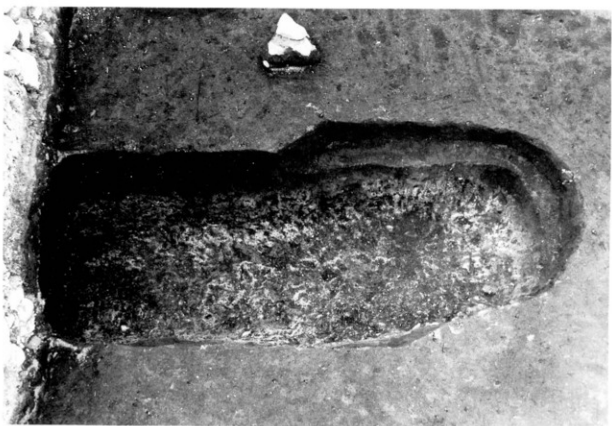
禅海塚遺跡 6号住居址



禅海塚遺跡 6号住居址 カマド構築材



禅海塚遺跡 小堅穴15P 遺物出土状態



禅海塚遺跡 小堅穴15P 完掘



禪海塚遺跡 小竅穴28P 遺物出土状態



禪海塚遺跡 全景



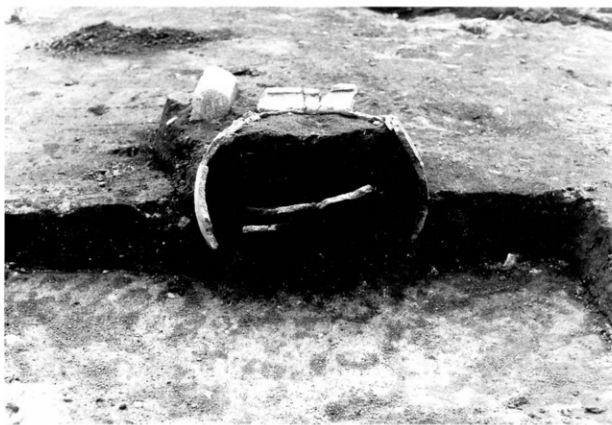
禅海塚遺跡 黒耀石剝片集中地点



禅海塚遺跡 ホウロク出土状態



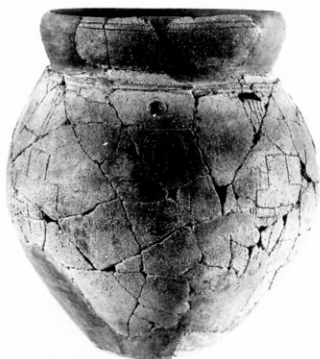
禅海塚遺跡 縄文土器 (第35図4) の出土状態



禅海塚遺跡 同土器を半截した状態



間下丸山遺跡 9号住居址出土土器



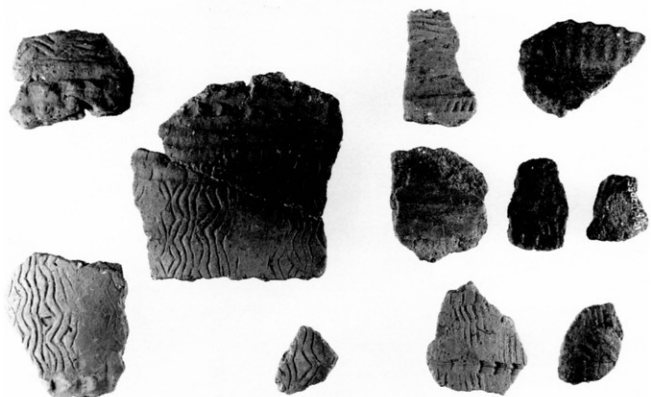
禪海塚遺跡 包含層出土土器



禪海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第1類-第40回表)



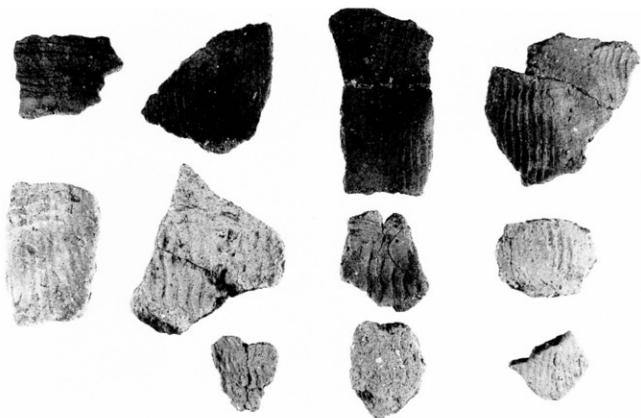
禪海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第1類 第40回裏)



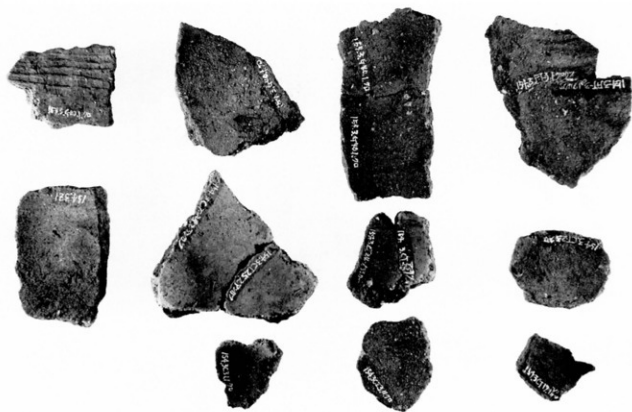
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第1類-第41回表)



神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第1類-第41回裏)



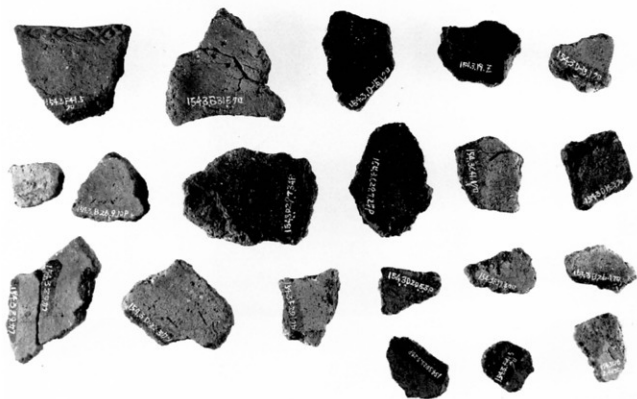
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第1類-第42図表)



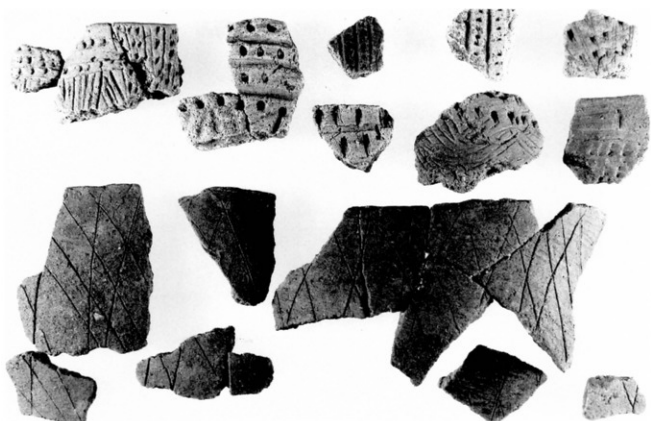
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第1類-第42図表)



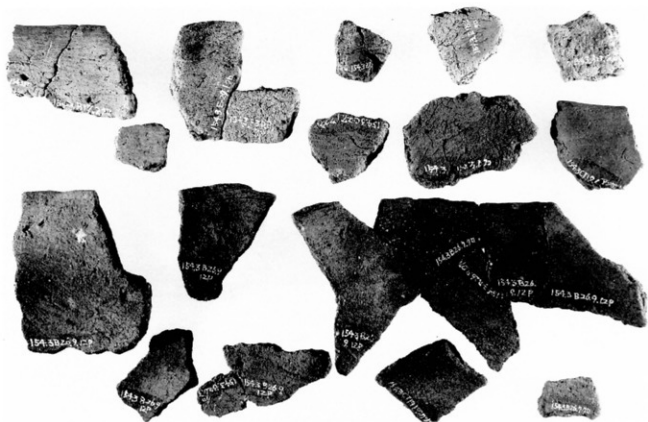
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第1類-第43図表)



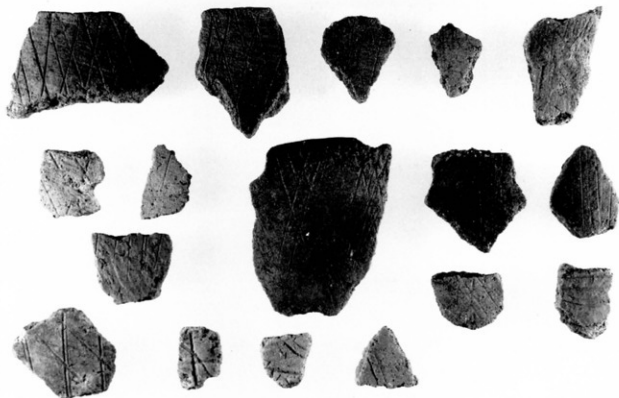
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第1類-第43図裏)



神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第44回表)



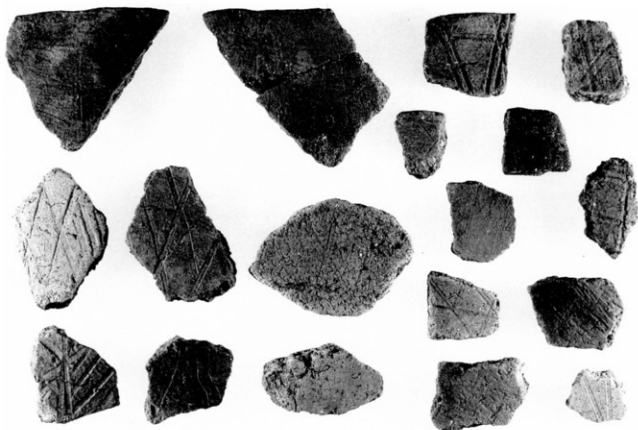
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類 第44回裏)



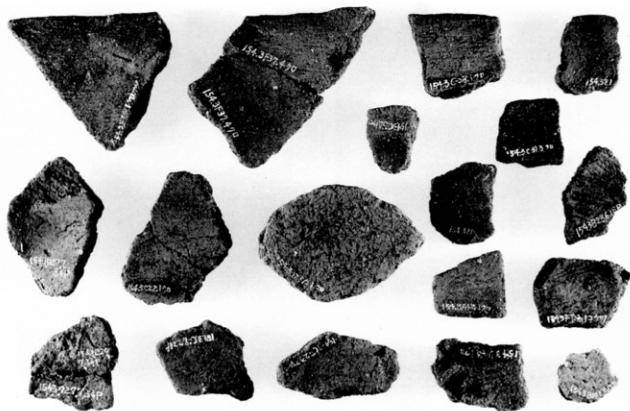
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第45図表)



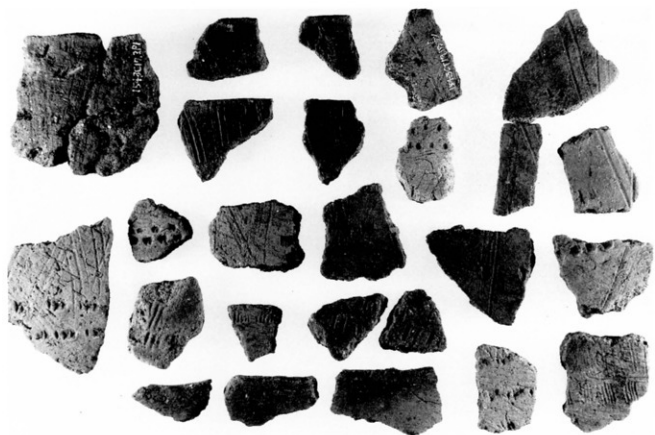
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第45図表)



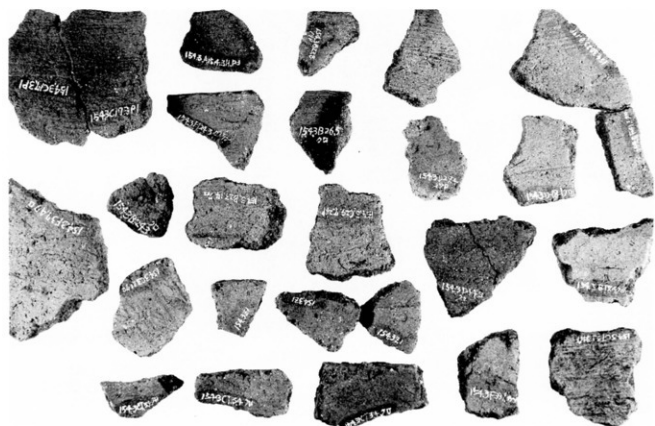
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第46図表)



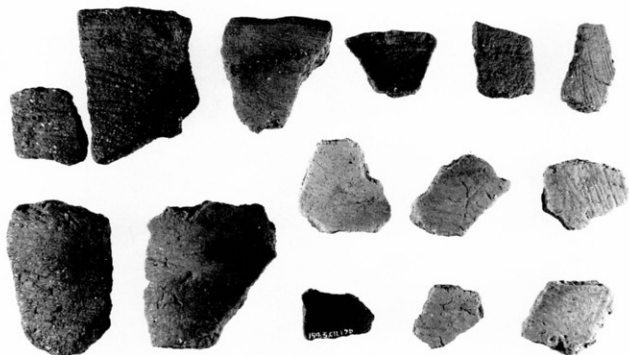
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第46図表)



神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第47図表)



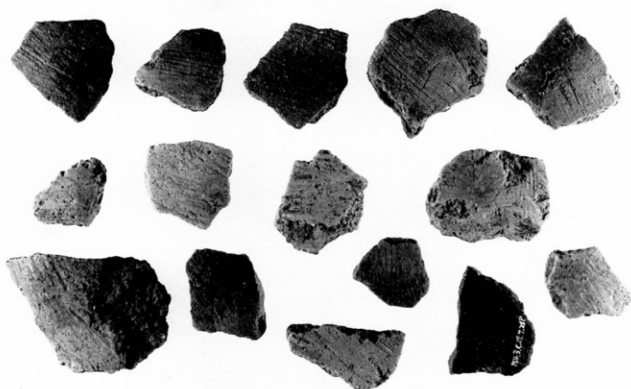
神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第47図裏)



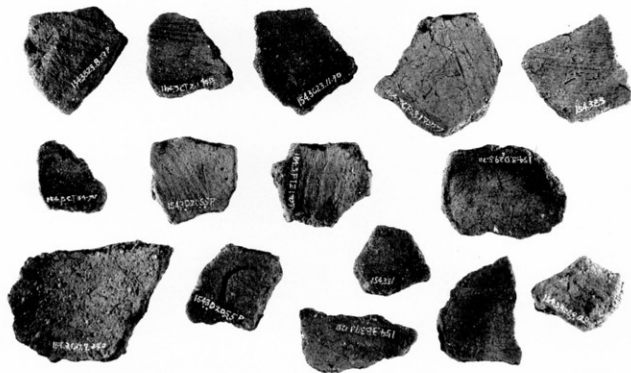
禅海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第48図表)



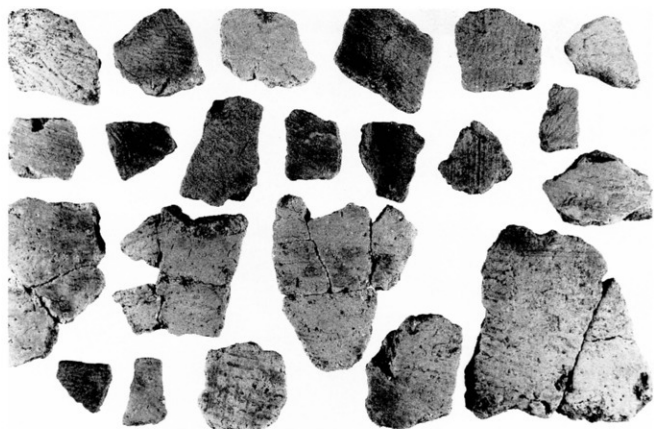
禅海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第48図表)



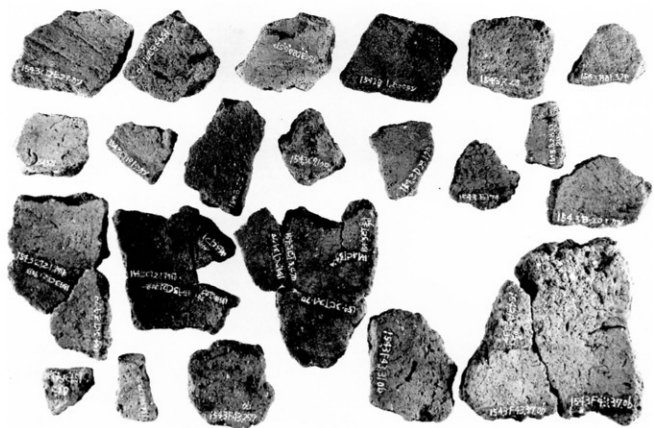
禪海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第49図表)



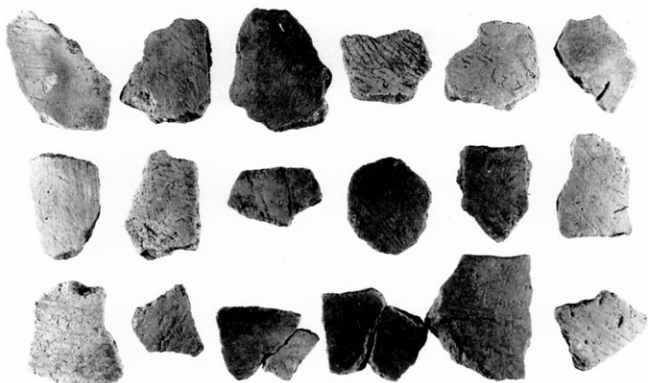
禪海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類 第49図裏)



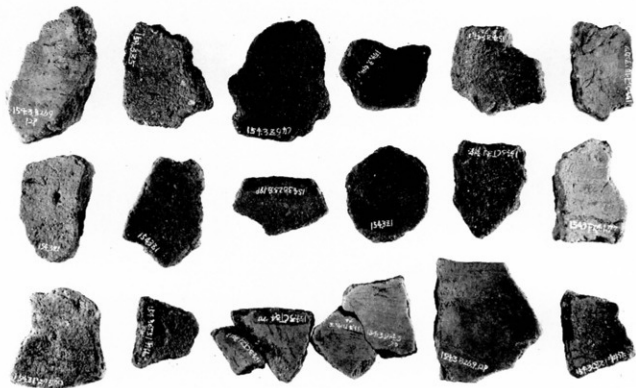
禅海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第51圖表)



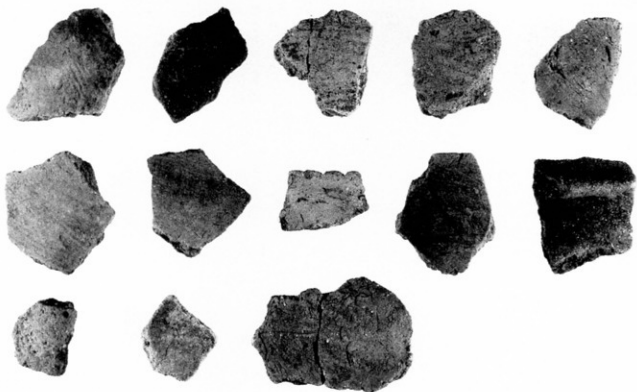
禅海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第51圖表)



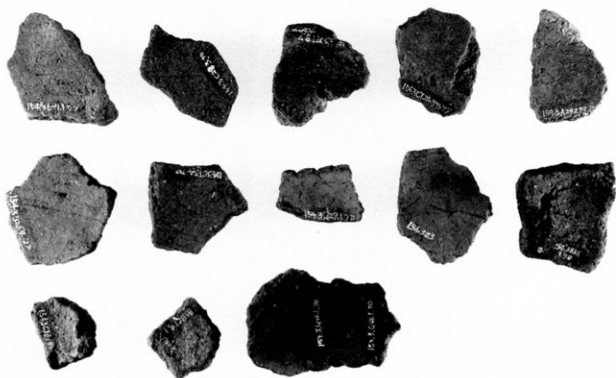
禅海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類-第52回表)



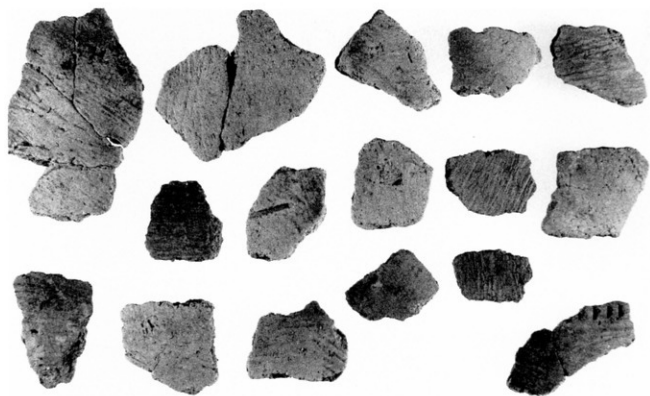
禅海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2類 第52回裏)



神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2・3類-第53図表)



神海塚遺跡 縄文時代早期土器 (第2・3類-第53図裏)



神海塚遺跡 縄文時代早期土器 24P (第54図表)



神海塚遺跡 縄文時代早期土器 24P (第54図裏)



沈線間に刺突 (第40図1)



押引文と玉抱き山形文 (第41図8)



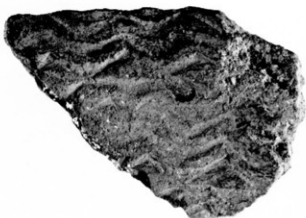
押引文 (第40図6表)



くずれた山形文と条痕状調整 (第40図6裏)



(第41図10表)



玉抱き山形文 (第41図10裏)



押引文 (第41回14)



条線押型文 (第42回16)



玉抱き山形文 (第43回27表)



玉抱き山形文 (第43回27裏)



2種類の刺突 (第44回47)



2種類の沈線 (第44回55)



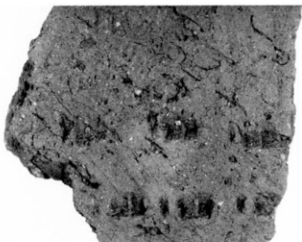
2種類の沈線 (第45図71)



条線を残す沈線 (第46図84)



沈線と刺突 (第47図97)



刺突 (第47図101)



わずかに引いた刺突 (第47図112)



条痕後へラ状のもので調整 (第52図197)

報告書抄録

ふりがな	ましたまるやま・ぜんかいづか							
書名	間下丸山・禪海塚遺跡							
副書名	一平成7・8・9年度緊急地方道路整備事業（街路）に伴う間下丸山・禪海塚遺跡発掘調査報告書一							
巻次								
シリーズ名	郷土の文化財							
シリーズ番号	20							
編著者名	長野県岡谷市教育委員会							
編集機関	長野県岡谷市教育委員会							
所在地	〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1 ☎ 0266-23-4811							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ましたまるやま 間下丸山	ながのけん 長野県 おかやし 岡谷市 やましたもと 山下町	20204	83	36° 3' 44"	138° 2' 53"	19950601 ～ 19950904	1,194	県道拡幅工事
ぜんかいづか 禪海塚	ながのけん 長野県 おかやし 岡谷市 やましたもと 山下町	20204	154	36° 3' 52"	138° 2' 53"	19961126 ～ 19970722	1,135	県道拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
間下丸山	集落	縄文時代 古墳時代	縄文時代住居址4棟 古墳時代住居址1棟	縄文式土器16 土師器甕2				
禪海塚	集落	縄文時代 古墳時代	縄文時代早期 小竅穴7基 古墳時代住居址3棟	縄文式土器6 土師器甕5		縄文時代早期押型文土器 片多数出土		

郷土の文化財20

MASHITAMARUYAMA ZENKAIZUKA SITE

間下丸山・禅海塚遺跡

発行日	平成10年3月
編集	岡谷市教育委員会 生涯学習課分室 〒394-0021 長野県岡谷市郷田2-1-52 TEL 0266(22)1020
発行	岡谷市教育委員会 〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1 TEL 0266(23)4811
印刷 製本	株式会社 エース企画 〒394-0011 長野県岡谷市長地2021-1 TEL 0266(28)5411
